
黒竜異聞

真下守里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜異聞

【Nコード】

N6683W

【作者名】

真下守里

【あらすじ】

母一人子一人で育ってきた北方の村の少年リクは、母の死をきっかけに、単身王都を目指す。その懐には、顔も知らない父の形見だという短刀。それを手掛かりに父を探し、慰謝料のいくらかもふんどくつてやろうという心積もりなのである。そんなリクが、旅のさなかに出会ったのは、手のひらサイズの黒いチビ竜。しかも、その正体は……！？ このお話は「野いちご」で公開していた『黒竜異聞』シリーズの加筆修正版です。このため、プロットがほぼ9割決まっていますので、ストーリー展開についてのご希望には添え

ないことが多いかと思います。あしからずご了承下さいませ。
稿は、ほとんどが大筋には関わらない小さな変更です。 改

思いがけない拾いもの（前書き）

前作『竜を抱く』で、何げに人気だったらしいリク。そんな彼のお話を、あらためて紡ぎ直してみたくて、（忙しい忙しい騒いでるくせに）つい書き始めてしまいました。彼の両親の出会いから始めるので、相当な長編かつまったり更新となるかと思いますが、よろしくお付き合いいただければ幸いです。R15指定は念のため^^；

また、ほかの竜のシリーズ同様、単位は尺貫法を使っています。

この序章に出てくる「リク」は、主人公「リク」の父親です。

思いがけない拾いもの

サラハン大陸暦892年、初冬

秋口より始まった、北の隣国・ヘキギョク（と言っても、ここに至るまで何度も為政者が変わり、そのたびに国名も変わったので、近在の土地では、「上つ国^{かみくに}」という昔からの通り名で呼んでいたのだが）との戦^{いくさ}は、寒さの到来とともに膠着状態に陥った。

戦場^{いくさば}となった国境が雪に降り込められ、両軍ともに身動きが取れなくなつたのだ。本当は秋の収穫の時期までには勝負を決したいところだつたのだが、互いに想定していた以上に相手に善戦され、戦いが長引いてしまつたのであつた。

十六になるイヅチの住む山間^{やまあい}の力ノへ村にも、程なくその噂は伝わった。国境まで十数里（約50km）という場所柄もあり、いつ戦火に巻き込まれるか、誰もが戦々恐々として成り行きを見守っていたからだ。

「けど、この分じゃ、春まではナンも起こらないっしょ」

こうした場合、往々にして女の方が割り切り良く、肝も据わっているものだ。加えて、イヅチは女だてらに「猿^{ましら}」の異名を取るほどのお転婆娘でもあつた。そうとわかれば、家の中にじつとしてなどいられるはずもない。

「ついでに、山向^いこの市^{いち}で買^もい物^{もん}もして来てやつから！」

取^とつてつけたように言い添えると、荷台付きの櫓^{そり}にまたがり、さつさと雪の中へ飛び出した。無論、買^かい物^{もの}などただの口実。本当の

目的は、荷台にくくりつけてある「雪板」で、滑空の練習をするこ
とだった。

年明け早々に村を挙げての雪滑りの大会が行われることになって
おり、「猿のイヅチ」は、その優勝候補のひとりだったのである。
優勝者には、米一俵と金一封が贈られることになっていた。貧しい
小作の娘であるイヅチにとっては、滅多にできない親孝行となるだ
ろう。それに、

（今年こそは、けっちゃんけっちゃんにしてやんだから、あの庄屋
のバカ息子……！！）

「庄屋」とは、この村の長のことだ。その庄屋のひとり息子は、
村で唯一の寺子屋に入学したその日、イヅチに「猿」とあだ名をつ
けた張本人であった。十二でそこを卒業してからも、何かというと
偉そうな態度で神経を逆撫でしてくる。例えば雪板のことひとつ取
つても、

『僕のは、毎年「お父様」に王都で求めてきてもらう最新式のもの
なんだからね。十年一日、同じ古い板で滑っているおまえなんか、
逆立ちしたって敵いつこないさ！』

とか何とか、自慢たらしいことおびただしいのだ。

ところが、半刻（約一時間）も経たぬうちに、イヅチは戻ってき
た。しかも、彼女が櫓の荷台に乗せて運んできたのは、肉でも野菜
でも魚でもなかった。山賊に外套を剥がれでもしたか、薄衣と筒袴
のみを身にまとい、白磁のような額から血を流してぐったりと横た
わっている、イヅチと同年代の若い男

「山さ下ってたら、ふらふらあって脇道から出てきてさ。ケガもし

てるし、凍えて死にそうだし、ほったらかしにしとくのもアレかな
って……」

驚く家族にそう説明すると、イツチは手際良く男を古毛布でくる
んでやり、今度は、村でたったひとりの医者様の家に櫓を向けた。
方向を見失わないよう、視線は前方に置いたまま、

「あたし、イツチってんだ。あんたの名前は？」

「……リク」

「どっから来たね？」

答えは返ってこなかった。頭を打った衝撃で忘れてしまったのか、
あるいは語りたくないのか……

（ま、どっちでもいいけどさ）

年の頃から推して、恐らくは、強制的に徴兵され、前線に駆り出
された少年兵なのだろう。だとすれば、雪が解ければ早々に仲間が
捜しに来るはずで、そうになったら、もう二度と会うこともないのだ。

ほかにも傷を負っているのか、リクが低く呻いた。思わず後ろを
振り返ると、相手は苦しげにまぶたを閉じていた。そのまつ毛の長
さに、はっと目を奪われる。スツと通った鼻筋と、薄いがくつきり
と紅い唇にも……

「……あたしより女らしいかも」

呟いてしまってから、いけない、とイツチは首をすくめた。案の
定、リクの眉が、たちまちキツと吊り上がった。

「どうせ私はチビで女顔だ！」

「や、チビだとまでは言っていないけど」

「……っ！」

真っ赤になって、リクは再び黙り込んだ。つまりはそれだけ身の丈の低さを気にしているのだ、ということが丸わかりである。

「やだ、可愛」

「可愛いなどと言っなっ！！」

ますます真っ赤になって、リクは怒鳴った。よほど普段から言われつけていて苛立ちの種にでもなっているのか、涙目にまでなっ
てイヅチを睨んでいる。

やっぱり可愛い、とイヅチは思ったが、今度は口には出さなかった。相手の名譽のために、というだけでなく、ふと、心の中で警鐘が鳴った気がしたからでもあった。

リクが口にしたのは、自分がしゃべっているような訛りまじりの荒っぽい言葉ではなく、王都^{みやこ}で話されている「お上品な言葉」だった。それも、庄屋の息子のように格好をつけるためにわざと使っているのではなく、本当に日頃から使い慣れているのだということが、たった二言三言からでも、ちゃんと伝わってくる。

ということとは、もしかしたらリクはただの少年兵などではなく、どこか「いいところのお坊ちゃん」なのかもしれない。豪商の息子か、あるいは騎士か貴族の家系の出か……

（だったら、下手に「深入り」なんかしない方がいいよね）

上つ国と同じく王制が敷かれているこの国・カムナギ（^{なか}）^{くに}といっても、こちらにも、イヅチたちには「ウチの国」だとか「中つ国」だと

かといった通り名で呼ばれるのが常だったのだが）では、身分制度は人々の生活に深く浸透し、それを基準に何もかもが決められていた。昔ながらの因習の色濃く残るこの近在では、特に。

ここよりはるかに「進んで」いる王都あたりでは、実は身分の壁を越えたという話もなくはない。殊に、商人たちが力をつけてきた昨今では、商家の娘が、茶会あたりで貴族の男に見初められて玉の輿に……といったこともしばしばあるようだ。が、それだって、身分のくくりこそ平民だが「大金持ち」の部類に入る層限定での話である。

一刀両断に片づけると、イツチはリクを医者様に預け、さっさと踵を返した。それで、すべてが終わるはずだった。このあたりでは見かけない、ちょっと凜々しくて可愛い「都会の男の子」と、ひとときだけでも関わり、言葉を交わした。そんな、一瞬で溶けてしまふ、ほの甘い綿菓子のような思い出を胸に、再び変わり映えのない日常に戻って行くはずだったのだ。

ところが 風邪の蔓延する季節だったから、医者様は多くの患者を抱え、目の回るような忙しさの中にあつた。今にも扉を開けて外へ出て行こうとしていたイツチを呼び止めて、医者様は言った。

「悪いが、手当てが終わったなら、この患者の様子を見とつてくれんかの。この傷と打ち身の様子では、恐らく熱が出るじゃろう。しかし、儂^{わし}はこの通り、ひとりの患者ばかりにかかわずらうてはおられないのでな」

村の全員の命を預かる医者様の頼みは、庄屋の命令と同じぐらい絶対だ。それに、お転婆が災いして日頃からケガの絶えないイツチは、この医者様に何度も手当てしてもらったり、時には冗談抜きに命を救ってもらったりもしていたから、そういう意味でも、返事は「はい」以外あり得ない。

かくて、イツチは一晚、リクの傍らに座って、彼の看病をした。医者様の診立て通り、夜半過ぎにはリクは高熱を發して呻き始めた。

「い、づち……」

覚えたばかりの彼女の名を何度も呼び、不安げにその手を求めるリクの姿に、なけなしの女心を揺さぶられてしまったとしても、誰がイツチを責められよう？

傷が癒えると、リクは、「自分には診療代が払えないから」と、引き続き医者様のもとに残り、その手伝いをするようになった。

よほど高等な教育を受けてきたのだろう、万事について呑み込みが早く、じきに診療の手順も覚えてしまったリクを、医者様はたいそう可愛がり、「春にはここを出て行くのだということではなければ、このまま弟子にしてしまいたいところなんじゃが」と口惜しがった。

また、リクの整った顔立ちは、イツチ以外の村の娘たちの心も、あつという間に虜にした。イツチ自身は、彼の苦しみ喘いでいる顔か、「どうせチビだ」とムツとしている顔しか見たことがなかった

が、何でも、につこり笑うと、その美貌はさらに際立つのだとか……
何故伝聞なのかと言え、あれ以来、一度もリクには会っていません
から。リクに夢中になっている娘の中には、「小町」と評判の美少女も
含まれていた。それ以外の娘たちにしても、それこそ野生の猿のごとく
ガサツで薄汚れた自分に比べれば、皆可愛らしくて、女の子らしくて……

（人にはさ、分ってもんがあるんだよ）

そう自分に言い聞かせつつ、イツチは、畑が雪で埋まってしまう
ている冬の間の仕事であるわらじ作りや菅笠作りに黙々と勤しみ、
それを市へ売りに行つては、その帰り道に、ひたすら滑空の練習を
続けた。

その甲斐あつてか、雪滑り大会では文句なしの優勝だった。賞品
を手喜び家族を微笑んで見つめながら、リクもどこかで見ていて
くれるだろうか、という思いが、ちらりと心をかすめた。

けれど、すぐにイツチはそれを抑え込んだ。仮に見ていたとしても、
「猿の異名は伊達ではなかったのだな」と思われるのが関の山
だろう。それどころか、「女の身であるような野蛮なことなどして」と
軽蔑されてしまつかもしれない……

降って湧いたような

雪解けの気配が漂い始めた頃、村の若者たちに取り囲まれて何か言われているリクの姿を見た。言葉の合間合間には、小突かれたり、殴る蹴るされたりもしている様子だ。何やってんだよおまえら、と怒鳴りかけて、しかし、イツチは口をつぐんだ。

男の子にまじって遊んで育ってきた彼女は、彼らが時に言葉以外のものでも語り合う人種であることを知っていた。もし、あれが、彼らなりの「リクを仲間を迎える儀式」のようなものだとしたら、そこへ割って入ることは、むしろ大いなる野暮となってしまう。

それに、せっかく抑え込んだ気持ちが一たびむくむくと頭をもたげそうな気もした。ケガをしていけば手当てしたくなるだろうし、傷ついていけば慰めてやりたくもなるだろう。けれど、それもまた、リクにしてみれば余計なお節介でしかないかもしれない。「小作の娘が、たかだか一度関わったぐらいでいい気になって」そんなふうに使われてしまったら……

しかも、さらに厄介なのは、そう思うであろう人間は、リクひとりではないということだった。例えば、リクに夢中になっている、あの「小町」ハツセ、という名の彼女は、庄屋の分家筋の娘でもあり、それだけに影響力も庄屋の息子並みに強かった。否、「娘たちへの」と範囲を限定すれば最強とさえ言えるかもしれない。そんなハツセにも同様のことを思われ、へそを曲げられてしまえば、今後の村の女社会でのイツチの立場は最悪のものになってしまうだろう。

だが、切れ切れに聞こえる声の中に「よそ者が」「目障りだ」「さっさと出て行け」といった言葉がまじり始め、殴る蹴るの様子も明らかに常軌を逸していることが見て取れてくると、やはり、どう

にも捨てては置けなくなった。

「ああつ、喧嘩だ！　ねえねえ、喧嘩だよおつ！　……あ、ほらハツセちゃん、こつちこつち！！」

といつても、ハツセとは寺子屋で一緒だったという以外特に接点はない。だいいち、彼女の姿自体、実はどこにもなかったのだが、その名を使わせてもらうのが一番効果的だとイヅチは思ったのだ

「猿^{ましう}」に見られたところで連中は片腹痛くもないだろうが、相手が「小町」となれば話は別なはずだから。

案の定、連中は、こちらを振り返ることすらせず、脱兎の如く逃げ去って行った。その中に、というか、ほぼその中心に、庄屋の息子の姿を認めて、イヅチは、ああ、と納得した。

真面目でよく働くリクは、最近では、医者様だけでなく村人のほとんどの好意をもって受け入れられつつあった。中には、「春にはお別れなんて残念だねえ」などと声をかける者さえいる。おまけに娘たちの間での大人気ぶりも相変わらずで……「常に僕が一番」でなければ気の済まない庄屋の息子としては、面白くないことこのうえなかったのだろう。それで、同じようにリクをやっかんていた者たちを集めて、こんな愚行に及んだのだ。

「……かたじけない」

リクの声がした。振り返ると、彼は、右手でみぞおちを押さえ、左手で唇の端についた血を拭いながら立ち上がるところだった。その唇に苦笑が浮かぶ。

「何やら、いつも格好のつかぬところばかり見せているな、そなたには」

「え……」

返答に困って、イツチは立ち尽くした。はいと答えれば失礼だし、さりとていいえと答えれば嘘になる。おまけに、「そなた」という呼びかけ方　いくら「いいとこの坊ちゃん」でも、相手を「そなた」などと呼ぶ者はそうそういない。そう、例えば……

「えと……リク　様って、まさか、お　」

しかし、そこでイツチは硬直した。

「リクで良い」

相手のすんなりした人差し指が、そつ、と唇に当てられたのだ。

「すまん、今のは失言だった。出自がわかってしまうような物言いは、なるべくせぬように努めていたのだがな……どうも、そないや、おまえの前だと気が緩んでしまつて」

最初の最初で恥を掻き尽したからかな、と付け加えて、くすりとリクは笑った。息をするのも忘れて、イツチはその笑顔を凝視していた。

（みんなの言つてた通りだ……）

美しくて、神々しくて、何だか目がくらみそう　そこまで思つたところで、本当に目がくらんだ。ぐるり、と景色がひっくり返り、そのままイツチは気を失った。

次に気がついたときには、医者様の家の離れに寝かされていた。

「何をやっているのだ！ あのように息を止めていては、倒れるのは当たり前ではないか！！」

開口一番怒鳴られて、逆にイツチはホツとした。初対面の印象が印象だったせいか、こちらの方が、ずっとリクらしい気がする。それに、あんな攻撃力抜群の笑みをこれ以上向けられ続けたら、今度こそ確実に窒息死してしまうかもしれない。

「あ、あの……ありがとう」

そこまで言って、再び彼女は硬直した。掛け布団の上に出ている自分の右手　そこに、相手の右手の指が、しっかりとからめられていたから。

「いつぞやと、立場が逆になったな」

イツチの変化に気づいたのか、リクも、いささか面映ゆげな顔になった。が、握られた手が離されることはなかった。

「あのときは、この手に随分と救われた。あたたかくて、心強くて……」

だから、夜が明けて、いつの間にか、手も、おまえも、どこかに消えてしまっているのに気づいたときには、本当に、その……」

言葉が途切れ、代わりに、手の方にさらにぐっと力がこもった。

「何故、あれからずっと顔を見せなかったのだ！

あ、いや……こちらから会いに行くことも、無論何度も考えたのだぞ？　だが、その……私のように、いろいろな意味で男らしくな

い、というか……そんな男は、おまえのような凜々しい女の好みには合わんのだろうか、と思うと……」

「……へ!？」

とうとう真っ赤になって口ごもってしまった相手を、まじまじとイヅチは見直していた。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

リクが医者様に正式に弟子入りを志願したのは、その日のうちのことだった。しかも、彼はイヅチをわざわざ家まで送ってくれ、その玄関先で、親たちに向かつて、今後この村で暮らし、ゆくゆくは今の医者様のあとを継ぐことに決めたので、ぜひイヅチを嫁に貰い受けたい、と頭を下げたのである。

降って湧いたような話に、父も母も当然戸惑いをあらわにした。特に母などは、「分不相応では」と、わざわざ医者様のところへ問い合わせにまで出かけた。けれど、応対した医者様の答えは、

「何、ウチだって、持ち出しの方が多い貧乏医者じゃ。それに、イヅチなら、よく働uksi機転も利くし、下手なお嬢様に来られるより、よっぽど助かるでな」

というものだった。それというのも、彼は、最初の晩の様子を見てとつくに二人の気持ちを察しており、あたたかい目で成り行きを見守ってくれていたのである。

そんなこんなで、最終的には、両親も「幸せになるんだよ」と喜

んでイツチを送り出してくれた。患者が最優先ということで、祝言は形ばかりのものを内輪でごくひっそりで行い、リクがイツチに想いを告白したあの離れで、二人は夫婦として暮らし始めた。

「ねえ……本当に、良かったの？」

初めて床を共にする前、やはりどうしても信じられなくて、イツチは確かめた。

「元の身分を捨てて、おまけに、あたしみたいな猿まじひ」

その先は、リクの唇に阻まれた。それ以上の続きは許さない、と言わんばかりに深い口づけを何度も繰り返すと、彼はかたくかたく新妻を抱きしめた。

「猿まじひではない、天女だ」

「え……？」

「正月に、雪板を駆って大空に舞うおまえを見た。あれは、まさしく天女だった。それ以前からまた会いたいと思うてはいたし、人づてに、決して浮つくことなく、常に地に足のついた暮らしを心がけていると聞いて、そのことも好ましく感じてはいたが、あの滑空で完全にとどめを刺された」

呆然となった彼女をそつと布団に横たえ、上から覆いかぶさって、その胸元に顔を埋める。

「それに……どのみち、私には帰る場所などない。

おまえも聞いているであろう？ 数日前、上かみ（つ国）との間に講和条約が結ばれた、と……

ここだけの話だが、あれに調印するためには、本来なら私の立ち

合いと血判が必要なのだ。だが、実際には、何事もなかったかのよう
に事が進められた。恐らく、私は既に死んだものとされ、すべ
ての権限は副将として同行していた弟に移されたのだろう。

その点、ここでは……無論、まだまだ修業は必要だが、それでも、
私を　私の立場やそれに付随する権力ちからではなく、私という人間そ
のものを必要とし、頼ってくれる者がたくさんいる。

しかも、医者というのは人の命を救う仕事だ。それが、何よりも
嬉しい。正直、もうたくさんなのだ。この口から発せられた命令
ひとつで、これまでいったい何百、何千の兵が……」

声が詰まった。ぎゅっと自分の寝巻にすがりつき、肩を震わせる
夫を見やって、ああ、やはりこのひとは王族か、それに連なる家系
の出であったかとイツチは確信したが、口にはしなかった。

（このひとが、自分からその家を捨てようって決めたんだものね……）

ならば、自分はその気持ちに寄り添うまで。何も知らない、何も
聞かなかったふりをして、このひとの「リクである部分」だけを見
つめ、愛おしんで行けば、それで……

「い、づち……」

あの夜と同じように、心もとなげに夫が呼んだ。

「リク……」

呼び返して、イツチはそつと寝巻の帯を解き、相手のすべてを受
け入れた。近くの川で、雪解け水が音を立てて流れ始めたのを聞き
ながら、二人は激しく互いを求め、いつしかひとつに溶け合った。

懷刀と幻の手紙

(……なのに、あのバカ二人が余計なことすつから！)

憤然と、イツチは嘆息した。久々に昔を思い出して頭に血が上ったせいか、体じゅうが妙にカツカと熱い。

大陸歴910年の、冬の終わり　あれから十八年の時が過ぎ、「猿^{まじら}」と呼ばれた少女は、「狒狒^{ひび}」という形容の方がふさわしい貫録を備えた中年女になっていた。

そして、でつこりと居間の円卓の前に陣取ったイツチと向かい合つて座っているのは、あの当時の夫に瓜二つの容貌と、彼女によく似た茶色い髪と瞳を持った、次の誕生日には十七になる息子だったが、夫の姿は、どこにもない　あの初夜から一月と経たぬうちに「国王ユアン・ナスル・ハシム四世配下の隠密」を名乗る者たちに連れ去られてしまったのである。

その原因を作った者こそが、イツチが言うところの「バカ二人」
庄屋の息子と「小町」ことハツセであった。

リクとイツチがつつましくも幸せな夫婦生活を送り始めたのを知つて、露骨に地団駄踏んで悔しがったのがこの二人だった。リクを毛嫌いしていた庄屋の息子と、リクに惚れていたハツセ　同じ人間に全く反対の感情を抱いていた二人であつたが、思わぬところで利害関係が一致した。

『絶対、引き裂いてやる』

かくて彼らは結託し、上つ国・ヘキギョクとの講和が成つて王都^{みやこ}へ帰りかけていた軍隊のもとへ走つて、「これこれこういう特徴の

脱走兵がウチの村にいて、イツチという女に匿われている」と密告したのである。

軍隊からの脱走者は死罪、これを匿った者は追放刑となるのが、昔からの習わしだった。庄屋の息子はまさしくそれを狙っていたのであろうし、ハツセにしても「このあたしを振って、あんな猿な^{まじう}んかを選んで……！」という「可愛さ余って憎さ百倍」的な気持ちの方が勝^{まさ}っていたものらしい。また、「あたしを差し置いて、あのひとと恋仲なんかになった性悪女に天誅が下るんだったら……」という気持ちも少なからずあったのだらう。

ただ、ひとつだけ彼らは誤算をしていた。さすがの軍部も、自分たちの総大将であったリクを死罪に処すわけには行かなかったのだ。そこで、隠密がこっそりと彼を連れに來たのであった。

イツチや医者様の前ではあくまでも只人^{ただひと}でありたかつたのだろうが、リクは、やって來た隠密^{いんみつ}たちを別室へと誘^{いざな}った。

「私は、もう戻るつもりは……」「ならば、せめて妻だけでも連れて……」「ドウタク、そこを何とか……！」　そんな声が途切れ途切^{しはんとぎ}れに聞こえたが、どうやら全く聞く耳持つてもらえなかったらしい。四半刻^{しはんとき}（約30分）ほどして再び現れた彼は、絶望にうなだれていた。

「すまぬ……しかし、戻らねば、おまえと、それに医者様が……！」

リクが戻ろうと戻るまいと、イツチは罪に問われ、追放刑となる。「脱走兵を匿っていたこと」自体は冤罪^{えんざい}だとしても、「総大将がここにいることを軍に隠していた罪」「彼を平民になるよう唆^{そそのか}し、あまつさえ婚姻関係まで結んだ罪」など、挙げようとすればいくらでも挙げられるのだとか。しかも、それを見て見ぬふりしていた医者様も同罪なのだという。

『ですが、お戻りになると確約いただければ、それらすべてのことに目をつぶりましょう。それだけのことをして、あなた様にはお戻りいただきたいと、これは国王陛下じきじきの仰せにございますゆえ……』

リクに「ドウタク」と呼ばれていた隠密の頭領は、そう囁いて、リクのすべての抵抗を封じたのであった。「国王陛下じきじきの仰せ」と言われれば、理不尽な、と抗議するわけにも行かない。それに、「国王陛下の決定」としてイツチたちが罪に問われぬことが村に伝えられれば、庄屋の息子もハツセも、これを認めざるを得まい。そうしなければ、「陛下の仰せに逆らう」ことになってしまうのだから。

こうして、リクは、その晩のうちに村から姿を消したのだった。愛しい妻と、恩義ある医者様を守るために……

もつとも、イツチ自身も、半年後には村を去ることとなった。

「国王陛下の仰せ」が効いて、確かに表立つては何もされてはいなかったが、ハツセの音頭取りで、村の女社会から締め出されつつあるのはひしひしと感じていた。それ自体は想定の内だったし、自分ひとりのことなら耐えられる自信もあった。

ところが、二月ほどして珍しく体調が崩れ、医者様に診てもらったと、どうやら腹に子がいるらしいとわかった。

『あたしは何言われたって、何されたっていい。けど、何の罪科もないこの子が、やれ父なし子だの、脱走兵の子だのって後ろ指差されながら育つのは……！』

医者様にそう語ったイツチは、彼の助言に従って、つわりが収まり、腹の子が安定してきた頃を見計らって旅立つことにしたのである。幸い、カノヘから二十五里（約100km）ほど南へ下ったところにあるハクトという村に、医者様の医学所時代の友人が住んでいたので、そこで世話になれるよう手配りもしてもらった。

旅のしたくをしていると、リクの使っていた文机の引き出しから一通の手紙と、その手紙に丁寧にくるまれた一振りの懐刀^{ふところがたな}が出てきた。

『此度のこと、どれほど詫びても詫び切れぬほどだ。また、たとえ少しの間でも夫婦として暮らしていたのであるから、子ができているかもしれぬと気にもかかっている。』

この懐刀は、我が家に代々伝わる唯一無二の宝刀である。もし女子が生まれたら、これを売って嫁入り道具を買ってやるように。また、男子が生まれたら、私と同じリクという名をつけ、成人した暁には、この刀を持たせて王都へ来させてほしい。名前と刀、二つの証さえあれば、どれほど成長していようと、私の子だとすぐにわかる。そして、父子の対面が叶ったならば、せめてもの罪滅ぼしに、何とか身が立つようにしてやるつもりだ』

このような形で託すことにしたのは、隠密たちの前で「唯一無二の伝家の宝刀」を人手に渡すのは憚られたからだっただろう。

《ありがとよ、旦那様。最後まで、こったら氣いつかってくれて…》

押し戴くように刀を手にし、しっかりと懐に収めると、イツチは手紙をいろいろにくべた。道中の護身的手段としても使えそうな刀はともかく、手紙の方は、こうするのが一番だと思ったのである。

《だって、万が一落としてもしたら……》

そうして、まかり間違つてリクの家の子の目に触れるようなことにでもなれば、きつとリクに迷惑がかかってしまう。その文面にこめられた気持ちが本当に嬉しかっただけに、それだけは絶対に避けたかった。

また、同じ理由で、彼の厚意にもすがるつもりはなかった。だから、約束を守るという意味で、月満ちて生まれてきた息子には、名前こそ同じ「リク」とつけたが、何故そのような名をつけたのかも含め、手紙に書かれていた内容は一切教えていない。無論、父親の出自もだ。もっとも、こちらについては、本人がとうとう語らなかったこともあり、相変わらず「たぶん、王侯貴族の誰かなんだらうねえ」という推測で止まっているのだけだ。

ガタン、と音を立てて、ぶんむくれた顔の息子が卓に突つ伏した。

（ま、この子が独り立ちしないうちにあたしが死ぬようなことにもなれば、遺言ぐらいはしてやってもいいけども……）

まんず、それはないだろうねえ、と、イツチは肩をすくめた。何しろ、幼い頃から風邪ひとつ引かず、つわりのときですら寝込んだことがないほど丈夫なのである。

（つていうか、下手したら、この子の方が先に逝つちまいそうだよ）

自分に似たのか大病こそしたことはないものの、父親譲りの小柄で華奢な体格に、人形の如く優しげな顔立ち。おまけに、母一人子一人で育ったせいも、無類の甘えん坊ときている。頼りないことこ

のうえない。

今日も今日とて、中等学校の級友に「チビの女男」とからかわれたとかで、半ベソになりながら帰ってきたのだ。そして、そんな息子を自分の向かいに座らせ、

『何だい何だいそんな情けないことで！ 母ちゃんなんか、あんたの年頃には、もうあんたのことを産んで、ひとりで頑張って子育てしてたんだよっ！！』

と説教したところで、芋づる式にどうしてそうなったのかということまで思い出し、ついついかあっとなってしまったところで今に至る、というわけなのだった。

「……腹減った」

さらに情けない声で、息子が呟いた。再び深々とイヅチは嘆息した。

「まったく説教しがいのない子だねえあんたは。……でもま、確かに時分ときではあるか。どれ、夕飯にでも」

言いながら立ち上がったところで、突然ぐらりと体が揺れた。

（あ、れ……？）

おかしい。節々に全然力が入らなくて、体の火照りも、さっきと全く変わらない……

「……母ちゃんっ！？ どうしたんだよ母ちゃん、すごい熱じゃないか！！」

悲鳴にも似た息子の声を聞いたところで、ぷつつと意識が途切れた。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

イツチが罹ったのは、この一帯で数年おきに流行る厄介な疫病だった。高熱が何日も続き、激しい嘔吐と下痢にも見舞われる。この結果、脱水症状を起こして三人に一人は死に至るのだ。

一度この病を乗り越えた者には免疫ができ、次に流行ったときには罹らずに済むか、罹っても軽く終わるのだが、イツチの場合は、これまで病気ひとつしたことがなかったことが、逆に裏目に出た。あれよあれよという間に病状は進行し、それからたった三日後、彼女は息子に心を残しつつ、三十四年の生涯を閉じた。

この疫病は三年前にも全国的に流行し、このときには、国王ハシム四世と、嫡子の王太子も命を落としていた。その王太子 ユアン・リクこそ、イツチの終生愛した夫・リクにほかならなかったのだが、彼女がそれを知るとは、ついぞなかったのである。

旅立ち

葬式を出してそろそろ三月は経つというのに、いまだ毎日のように夢に見る。発病後たった三日で、別人のように痩せこけてしまった母の顔。血の気を失った唇から、かすかに発せられた最期の言葉

「……か、たな……その、引き出しの、奥、に……ふところ、がたな、が……それ、持って……み、やこへ、おゆ、き……父ちゃんが……おまえの、父ちゃんが、そこに……」

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

サラハン大陸歴910年、初夏

「あー、ハクト村のイツチが息子リク、数え十八（歳）、と……」

目の前に置かれた通行手形を見ながら、関所の役人は、しかつめらしくその内容を記帳した。

「よし、通れ。それから……先刻は、その……悪かったな」

この役人、リクの顔を見るなり、「ここは女子おなごの来るところではない！ 女子の関所は向こうだぞ！」と一喝したのである。

髪を伸ばしていたわけでも、女物の服を着ていたわけでもないのに、「身を守るために男の格好で旅をしている女」だと勘違いされ

てしまったのだ　誰が見ても迷うことなく「女らしい」と形容するような、厄介な造作に生まれついてしまったばかりに。

この冬には満で十七（歳）にもなるのに、いまだに背丈が五尺一寸（約155cm）程度しかないということも手伝って、手形を見せても一向に信じてもらえなかった。拳句の果てに、明らかに下心満載な手つきで全身をくまなく触られ、その手が股間に来たところで、ようやく誤解が解けたのであった。

だから、本音を言えば「『悪かった』で済むんだったら捕り方なんか必要ねえだろ！」と啖呵の一つも切ってやりたいリクだったのだが、とりあえずは、ぐっと我慢した。

（王都^{みやこ}まで、まだまだ先は長いからな……）

ここは、村から三里（約12km）と離れていない最初の関所だった。こんな近場で早くも騒ぎを起こして牢屋にぶち込まれているようでは、いつ目指す場所にたどり着けるかわかったものではない。

「い……いえ、そんな！」

首を振り、精一杯の愛想笑いを浮かべる。が、そこで、しまった、とリクは後悔した。相手の顔が、みるみるうちに首まで真っ赤になっ

「とっ……とにかく、もう行け！」

「はっ、はいっ！っ！」

悪いことをしたわけでもないのに、逃げるようにその場をあとにした。一丁（約100m）ばかり離れた場所まで来たところで、ようやく足を止め、ふうっ……と息をつく。

「つたく、何なんだよもお……」

自分の笑顔を見て、他人がしばしばさっきの役人のような反応を起こすことに気づいたのは、村の寺子屋を出て隣町の中等学校に進んだ時分のことだった。さらに長じて、数え十五（歳）の成年式を迎える頃になると、女よりも男の方にその傾向が強いという、非常にありがたくない事実にも気づかされた。

（おかげで、ほんつとロクな目に遭わないんだよなあ……好きな娘^こができたって、いつつも「お友達」止まりだし、男らなんて、二言目には「女男！」だし）

中等学校をはじめとする上級学校は男女別学が基本で、恒常的に異性に飢えていたということもあったのだろつ、時には「片恋の女の代わりだ」とか何とか言われて、触られたり、抱きつかれたり、場合によっては押し倒されそうになったりすることもあった。もちろん、手に噛みついたり股間を蹴り飛ばしたりして、どうにかこうにか回避はしてきたのだけれど。

死んだ母・イヅチには、「からかわれたぐらいで涙目になって情けない！」とよく叱られたものだったが、本当のことを言えば、「からかわれたぐらいじゃ済まなかったから」涙目になっていたのだ。しかし、男の誇りにかけても、そのようなことなど、よりによって母に言えるはずはなかったのであった。

（あああ……それもこれも、どう考えたって全部、「父ちゃん」とかいっくソ野郎に似ちまったせいじゃないか！）

……と言っても、顔も知らない相手なので、本当のところは定かではない。ただ、自分から見て、母に似ていると思われるのは、茶

色い髪と瞳と、村の人々に比べてかなり白い肌ぐらいだったので、
ならば顔立ちは父親から受け継いだのだろうと思ったまでだ。

（だいたい、ヤツが生きてるってこと自体、あのときまで全然知ら
なかったもんなあ俺……）

あんまりにも母がその話題に触れないものだから、てつきりとつ
くに死んでいるものだとはかり思っていた。

それに、土地がやせていて、農作物を作って売るだけでは暮らし
が成り立たないハクト村では、野良仕事をしているのは、年寄りか、
それを手伝う女・子どもばかり。父親世代の男たちは、盆暮れや祭
りのとき以外は、王都や近在の大きな町に出稼ぎに行っているのが
常だった。つまり、どこの家でも「父ちゃんはいない」のが当たり
前。だから、自分の家が母一人子一人でもさほど気にならなかったし、
そのことを問いただしてみようとも思わなかったのである。

けれど、母が亡くなったあと、言われた場所を開けてみると、確
かに、手拭いに幾重にもくるまれた短刀が大事にしまわれてあった。
花と鳥らしき図柄の入った黒鞘はかなり古ぼけていて、全く冴えな
い印象だったが、刃の方は台所の包丁よりもはるかに入念に砥がれ
ており、それだけ母にとって思い入れの強い品であったことが窺え
た。

《きつと、体よく遊ばれて捨てられたんだろっなあ……》

「狒狒ひびみたいな母ちゃん」にも「天女」と呼ばれていた時期があ
った、などとは夢にも思わぬ息子としては、絶対そうだとしか思い
ようがなかった。

《どうせこの刀だって、ヤツにとっちゃガラクタ同然の骨董品だっ

たんだろっさ》

それを、さも由緒ある宝物のように装って母に渡し、「たとえ別れても、この短刀と同じぐらいあなたのことを大切に思っているから。何かあったらいつでも王都へ訪ねておいで」とか何とか、さんざん甘い言葉を駆使して言いくるめたのではあるまいか。

『……だったら、訪ねてってやろうじゃねえか!』

我知らず、眩きが口について出ていた。

『んでもって、罵声のひとつやふたつ浴びせて、がっばり慰謝料ふんどくってやるからよ。覚悟しとけ……!!』

正直、雲をつかむような話ではあった。学校の地理の時間はたいてい夢の中だったので、王都がいかほどの広さなのか、具体的な数字はパツとは出てこないのだが、少なくとも、ハクト村などは比べ物にならないほど大規模な都市であることだけは確かだ。人口だって桁違いなのに違いない。そこで、この刀だけを手掛かりに、たったひとりの人間を捜すなど……

《だけど、村で、いつまでもパツとしない暮らし続けてるよりは、ずうつとましだろうからな》

本来なら寺子屋を出たらすぐに働きに出るような身分と暮らし向きであつたにもかかわらず、家計を必死にやりくりして、母はリクを進学させ、「いずれは医学所に進んで医者様におなり」と口癖のように言っていた。あるいは、父親自身が、ほかでもない「医者様」だったのかもしれない。

しかし、残念ながら自分には学問はあまり向いていないようだ
とリクの方では思っていた。地理もそうだが、歴史や文学の授業に
しても、催眠作用のある念仏にしか聞こえない。「乏しい小遣いで、
いかに多くのおやつやメンコや喧嘩独楽けんかごまを手に入れるか」といった
ことに常に腐心していたおかげで、算盤勘定や損得の判断には若干
自信があるものの、これも「数学」や「経済学」という学問になる
と一気に頭痛の種と化す。医師になるのに最も必要となるであろう
生物学の授業に至っては、カエルの腑分け（解剖）にすら耐え切れ
ず、かわや厠に走ったという体たらくであった。

かと言って、武術や体術で身を立てられるかというと、こちらも
少々難しそうだった。その昔は「猿まじひ」と呼ばれていた母の血を継い
だか、走ったり飛んだりすることは比較的得意だったが、剣術や柔
術となると、体格が災いしてか、毎回相手に叩きのめされて終わる。
たとえ小兵こひょうであろうと、勝てる者は勝てるのだから、要は素質がな
いということなのだろう。

これらのことを総合してみると、自分に向いているのは、何かの
商売か、出納事務方担当の村役人あたりなのだろうとリクは見てい
た。が、村役人は庄屋と同様にほぼ世襲に近く、親が役人ではない
リクに割り込む余地はなかった。

となれば、都会へ出て商売を立ち上げ、これを足掛かりに一旗拳
げるか、村のほかの男たちと同様に_{出稼ぎ}に行くか……ならば、魅
力的なのは断然前者だ。事と次第によつては、王侯貴族並みの大金
持ちになって父親を見返してやることだってできるかもしれない。

「……っし、頑張る！」

気合を入れ直すようにひとりごちると、リクは再び歩き始めた。
この先何があるのかも、果たして父親に会えるのかどうかもわから
なかったけれど、とにかく前を向いて進めば、きっと何とかなるは

ず
だ
……

「災いのもと」、現る……？

その後は、おおむね順調に旅は進んだ。

南下するにつれて、気温が北国育ちの者にとっては尋常ではない暑さに変わって行ったり、相変わらず関所で女と間違われて不愉快な思いをしたり、路銀（旅費）の足しに口入屋くちいれやで料理屋の下働きの仕事を紹介してもらい、皿洗いや掃除のつもりで出かけてみたら、女の着物を着て酌をすることを求められてやっぱり不愉快な思いをしたり……といったこともあるにはあったが、大きな事故に遭ったり、大病をしたりすることに比べたら、まあ「ささやかな災難」の範囲内であつたろう。

それに、意外にも、この外見で得をしたことも多々あった。宿屋の、特に女将さんおかみ連中に、かなり受けが良かったのだ。ただでさえ顔立ちが「可愛らしい」部類に入るうえに、小柄で華奢なところが、いわゆる母性本能をくすぐるのだろう。

毎回のように「まだ小さいのに、ひとりで旅してるのかい！」と誤解されるのが難点ではあったが、そこで「いえ、俺はもう数え十八で」などと余計なことを言っではいけない。「はい、母ちゃんみやこが死んじゃって……生き別れた父ちゃんを捜して王都まで行く途中なんです」としおらしい声音で答えれば、たいてい「そうかい、それは大変だねえ……」と宿代を大幅にまけてくれるうえに、翌日の朝昼の弁当まで作って持たせてくれるのである。

もわつと熱い空気に、ようやくいくばくかの秋の気配が混じり始めた頃、何とか王都から十里（約40km）ちよつとのところまでたどり着いた。

リクの身分と手持ちの路銀では、当然全行程徒歩であるが、街道

には、土煙を上げて駆けて行く騎士の馬や、軽快な足取りであつという間に遠ざかつて行く豪商の籠や、悠然とすれ違つていく貴人の牛車ぎうしゃの姿もあつた。

そういつた「いけ好かねえ連中」を横目に、あらためてきっぱりと決意を固める。

（いつかは絶対乗ぜってーつてやる！！）

そして、どこかに座つて今朝持たせてもらつた弁当でも食おう、と路傍の様子を見渡したところで、不意にリクは目を剥いた。真っ黒い何かが、猛然とこちらへ向かつて飛んできたのだ。

（な、何だあ……！？）

呆然としているうちに、突然視界が真っ暗になった。「何か」が、まともにべしゃつと顔面にぶつかったのである。

「うおっ！！」

あわてて引き剥がそうとするのだが、爪のようなものがうちりとしがみつかれていて埒が明かない。

（猫？ 蝙蝠……！？）

つて、猫は飛ばねえか 内心で自分に突っ込みを入れたところで、やっと相手の力が緩んだ。

「ったく」

ボヤきつつ、その首根つこをつかんで、ぶらーん、とぶら下げる。
が、そこでリクは再び目を剥いた。

その生き物はもちろん猫ではなかったし、さりとして蝙蝠でもなかった。手のひらに乗るほど小さく、胴体とほぼ同じ長さの尻尾を含む全身が、真つ黒な鱗（うろこ）に覆（おほ）われている。頭から背中にかけてだけはやはり黒くてぼわぼわした鬣（たてがみ）が生えており、この鬣の間から、ピンと立った耳と、瘤（こぶ）のように小さい灰色の角が二本覗いていた。口元には真つ白な牙。背中には、それこそ蝙蝠のような翼が一对

（……って）

ぞぞぞ、つと背筋を怖（おそ）気が走った。まさか、これは……

「どわあああゝゝゝつつ！」

思わず叫び声を上げて、リクはそれを投げ捨てた。きゅうつ、という悲鳴が聞こえた気もしたが、そんなものに構ってはいられない。

「わ、わ、『災いのもと』だあゝゝゝつつつ！！！」

ダン、と地面を蹴つ飛ばすと、脱兎の如く彼は駆け出した。

＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊ゝ＊

サラハン大陸に並び立つヘキギョク（通称・上（かみ）つ国（くに））、カムナギ（中つ国）、ウナバル（下（しも）つ国）の三国には、こんな伝説が伝わっている。

はるか太古の昔、この大陸には人だけでなく、竜の一族も暮らしていた。姿かたちの全く違う二つの種族は、それはそれは仲が悪く、あるとき、とうとう戦^{いくさ}が起こった。

最初は、空を自由に飛べる竜族が圧倒的優位に立っていた。けれど、人族も負けてはいなかった。空を飛べない分、知恵を絞って、ついに竜族を撃退したのだ。

敗北した竜族は、天高く、雲の上まで逃げて行き、そこに「天空城」を構えて竜の国を建国した。そして、今も彼らは、水晶玉を通じてこの城から地上界を覗いては、人族へ復讐する機会を狙っているのだという

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

そんなわけで、この三国の民の間では、竜といえば「災いの象徴」。祭祀をつかさどる僧侶や呪術師の中には、「竜の姿を見た者は必ずや不幸になる」と断言する者さえある。子どもたちは、これを寝物語に聞かされて育ち、どんな悪童でも、「竜に連れに来てもらおうぞ!」と一喝されれば、たちまちべそを掻いて謝るほどであった。

(で……「あれ」って、どう見ても、その「竜」ってヤツ、だよな……?)

しかも、角以外、頭のとっぺんから尻尾の先まで真っ黒ときいてる。

(……でえええっ、不吉だあ! 不吉すぎるよおおゝゝゝっ!)

心中でさらに悲鳴を上げつつ、リクは走った。全速力で走った。ひたすら走った。わき目も振らずに走った。一刻も早く、少しでも遠く、あの生き物から離れるために……何しろ、一生が決まるかもしれない旅の途中なのだ。あんな「げんもん験の悪い物」のせいで水を差されたら、たまったものではない。

ところが、しばらくして何気なく後ろを振り返ったリクは、げ、と硬直した。

（何、で……）

一間（約1・8m）と離れていないところに、黒竜がいた。小さな翼を目一杯広げ、異様なまでの速さで滑空しつつ、どんどんこちらに近づいてくる。

（何つつでくつついて来んだよこいつ……つつつ！?!?!?!）

心で絶叫したのと、スーッと前に回り込まれたのが、ほぼ同時だった。

（うつわ……）

へなへな、と座り込むと、リクは天を仰いだ。すっかり息が切れていた。膝もガクガクと笑っていて、走ることはおろか、立ち上がることもすら、もう無理だ。

「ええい、こうなったらヤケだ！」

やぶれかぶれに、開き直る。

「煮るなり焼くなり、好きにしやがれ……!!」

すると、黒竜はゆっくりと地上に下りた。黒くて丸い目が、ひた
とこちらを見つめる。

「きゅう……」

甲高い声が、牙の間から漏れた。刹那、リクはあっけに取られた。
相手が、まるで謝罪でもするかのように、ぺこり、と頭を下げたの
だ。

「おまえ……さっきぶつかったこと、謝ってる、のか……？」

つい話しかけてしまってから、リクは苦笑した。

（何やってんだ、俺……）

竜に人の言葉など、わかるはずもないのに……

そんなリクを尻目に、黒竜はくるりと踵を返した。何故か今度は
飛ばずに、とてとてと歩き始める。

（……へえ）

自分でも信じがたいことに、その後ろ姿にリクは目を吸い寄せら
れていた。

（よく見たら……案外面白^{おもしれ}えな、こいつ）

短い足で、長い尻尾を振り振り、とてとてとて……「不幸を

運んでくるもの」というよりは、愛すべき珍獣といった趣だ。

と、突然、その背中が前のめりになった。かと思うと、ぱたん、とその場に倒れ伏す。

「おいっ!？」

とつさに、リクは相手を拾い上げていた。手のひらに乗せ、ちょいちよい、と頬のあたりを指で突いてみる。

「おい！ 大丈夫かよ、おいっ……!？」

「きゅ……」

かすかに鳴いて、黒竜は薄く片目だけを開けた。

『腹が、減った……』

「……何だ」

一気に脱力して、リクは大きくため息をついた。

「つたく、驚かせんな」

たしなめかけて、え、とまたしても硬直する。

（こ、こいつ……今、喋らなかった、か……!？）

しかも、その声ときたら ちんまりした外見とも、それまで発していた「きゅ」という啼き声とも、全くと言っていいほどそぐわない。低くて渋くて、まさに「大人の漢おとなのこ」という形容がふさわしいような……

（何だよ、こいつ……）

頭の中を、大量の疑問符が飛び交い始める。

（こいつ、いったい何者……！？）

すると、黒竜が、再び「きゅるっ、きゅるる……」と小さく啼いた。それと重なるようにして、先ほどの重低音が響く。

『ああ……団子が食いたい……』

「はぁ!？」

すつとんきょうな声をリクは上げ……さらにがっくりと脱力した。

「おまえな……そういうことを、そういう声でしみじみと呟くなよ」

そんな黒竜が、この先、自分の人生にこれでもか、というほど関わってこようとは、このときのリクには、まだ知る由もなかった。

さっそく、事件です！

誰かに見られでもしたらまずかろうと思い、黒竜のことは懐に入れて、茶店を目指すことにした。茶店なら、黒竜が食べたがっている団子も売っているだろうし、店主に断って、茶の一杯も別に頼めば、リクの手持ちの弁当も食べさせてもらえるはずだ。

唯一の問題は、懐に余計なものが入っているせいで、着物の帯の上あたりが不自然に膨らんでいることだった。そう、ちょうど女の胸元のように……

「よおおねえちゃん！　ひとりっきりでどこ行くのぉ？」

「なあなあ、俺らと遊ぼうぜえ？」

案の定、茶店を見つける前に、目ざとい遊び人風の連中に見つかった。

（だあれが「ねえちゃん」だっつーのつつっ！！）

リクは憤然としたが、口には出さなかった。最初に声をかけてきたのは腕全体に真っ青に刺青を入れた着流し姿の男で、もうひとりとは坊主よろしく紫の袈裟など羽織り、金剛杖を手にした男。どちらも筋骨隆々として、腕っ節ではとても敵いそうにない。こういう手合いは、無視してやり過ごすに限るのだ。

折良く、探していた茶店が目に入った。すかさずそこへ駆け込むと、リクは、店先にいた女将にひしつとすがりついた。

「助けて！　変なヤツが……！！」

「何だつて!？」

在りし日の母・イツチを思わせるような貫禄たつぷりの女將は、
たちまち目を吊り上げて、ぎろりと男たちを睨んだ。

「ウチの前で騒ぎを起こそうたあ、随分といい度胸じゃないか。言
つとくけどね、ウチの亭主^{ひと}は、御上^{おかみ}から御用を仰せつかつてゐるんだ。
あんたらみたいな破落戸^{くわらくき}なんか、あつという間にお縄にされて牢屋
行きだよ! …… あんた、ちよいとあんた、出ておいで!!」

幸運にも、どうやらここは捕り方の住まいでもあつたらしい。ち
つと舌打ちして、男たちは去つて行つた。

「ありがとう、おねえさん!」

にこつと笑うと、ぺこつとリクは頭を下げた。実は、どう見ても
「おばさん」にしか思えない女將なのだが、そこはそれ、笑顔と同
様、お得意の処世術という奴である。

そして、その狙いは見事に当たつた。

「あれま、おねえさんだなんて……嬉しいこと言つてくれた礼に、
お茶ぐらい御馳走しようかね」

「ええつ? いいよ、そんな……俺、ほんとのこと言つただけなん
だし」

「まあ、やだよこの子は。ほんとに口がうまいんだから って、
あんた男の子だったのかい! いや、ごめんねえ。可愛い顔してる
し、あんなのに追つかけてたから、てつきり、その……」

「ああ、いいいいいよ、気にしないで。いつものことだし、おねえ
さんに『可愛い』なんて褒められたら悪い氣しないし」

「そうかい？　ならいいけど……そうだ、勘違いの詫びに、もう一品つけたげるよ。何がいい？」

「ほんとっ！？　じゃあさ、団子一串くれる？　あと、良かったらなんだけど、その縁台で弁当も食わしてもらえると……」

「ああ、いいともいいとも。ゆっくり食べて行きな！」

胸を叩いて請け合うと、女将は店の奥に消えた。と同時に、こそこそ、と膨らんだ胸元が動く。

『おい……良いのか？　いくら金子きんすを払わずに済んだとはいえ、おまえが侮辱されたことには変わりないだろう。だいいち、「おねえさん」とは若い女性ウメコのことではないのか？　あの女将に対してそのような呼称を使うとは、まるで詐欺
』
「バカ、いいんだよそれで！」

慌ててリクは遮った。

「竜の世界ではどうだか知らないけどな、人の世界じゃ、こういうのは互いにわかってやってるもんなんだよ」

『わかって……？』

「ああ。女将さんだって、あんなのは俺の世辞だって百も承知だよ。でも、わかってたって、ああ言われりゃ気分が良くなるもんなんだ。俺にしたってそうさ。確かに何にも思わないつつたら大嘘になるけど、結果的には、こっちの得になることの方が多かった　つまり、双方不愉快な思いはしてないってことだろ？　おまえみたくバカっ正直にほんとのことなんか言ってみろ、団子さえ売ってもらえずに店から叩き出されちまうのがオチだぞ」

『そ、そうなのか？　それは困る』

きゅう……と情けない声を発して、黒竜は黙り込んだ。

やがて女将がお茶と共に運んできたのは、^{つうお}醬と砂糖と酒で甘辛く味をつけた団子と、餡子のたっぷりついた団子の二種類だった。リクは「団子一串」と頼んだはずだったのだが、これも、たぶん「おねえさん」の礼のつもりなのだろう。

「きゅうん！」

興奮したように声を上げると、黒竜がぴよこりと顔を出した。

「こらこら、それじゃ見つかるって。それに、できたてでまだ熱いし……」

リクがたしなめるのにも構わず、ぱくり、と彼が持っていた餡団子の串にかぶりつく。とたん、それこそあつという間に見つかりそうな勢いで、甲高い悲鳴が響き渡った。

「きゅい~~~~んっ!!」

「ほーら、だから言わんこっちゃない」

肩をすくめて、リクは黒竜を懷の中へ押し戻した。ふう、ふうと、息を吹きかけて、念入りに団子を冷ましてやる。

「しっかし、竜のくせに猫舌かよ。ほんと、変わってんなあおまえ」
「……きゅんっ！」

ぶんむくれたように応じると、くるりと黒竜は^{とくろ}蜷局を巻いた。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

互いの食欲を満たし、店をあとにしたのは、それから四半刻（約30分）ほどあとのことだった。

「なあ、おまえ」

懐の黒竜に向かって、リクは声をかけた。

「腹も膨れたんだしさ、そろそろ　　って、寝てんのかよっ!!」

懐は、規則正しく上下を繰り返していた。よくよく耳をすますと、イビキらしきものも聞こえてきている。

（やれやれ……）

リクはため息をついた。

先ほど来の様子を見て、相手に対する偏見自体はだいぶ薄れつつあったものの、だからと言って、いつまでもこの生き物を懐に入れたまま旅を続けるわけには行かない。

何しろ、自分は王都で商売を始めようと思っているのだ。もし「災いの元」が傍にいる、などとわかつたら、その商売に大いに差し障ってしまうだろう。今回はたまたま一銭も払わずに済んだが、食いつ持たって確実に増える。竜が財布を持っているなどとは聞いたこともないから、当然、それは自分の乏しい手持ちの中から出さねばならないわけで……

「おい、起きろ　　」

着物の上から相手を揺り起こしかけて、しかし、リクはその手を止めた。

（やっぱ、もうちょっとぐらいなら、いっか……）

鱗などで覆われているから、魚や蛇のようにひんやりとして、触れた感じも、ゴツゴツ、ぬらぬら、べちょべちょといった不快なものを想像していたのだが、実際にはそうではなかった。

（案外、あつたかいんだな、こいつ……）

どちらかといえば、犬や猫の仔を抱いているような気分だ。手を触れている部分からは、着物を通して、どく、どくと心臓の鼓動が伝わってくる。それに、すう、すうと安心し切ったような寝息本来ならば、彼ら竜とリクたち人は「敵」同士。いわば「敵の手に落ちた」も同然なのだから、もっと警戒してしかるべきだろうに……

（……やっぱ）

一瞬、冗談抜きに母性本能をくすぐられてしまった　男なのに。

「きゅん……」

懷の中から、かすかに啼き声が聞こえた。

「おう、起きたか」

ならば、今度こそ、これからの話を……そう思って覗き込んでみると、相手はまだ蜷局を巻いたままだった。

「何だ、寝言かよ……」

というか、竜でも夢を見たり、寝言を口走ったりすることがあるのだろうか そんな素朴な疑問が胸中を去来したそのとき、黒竜が小さく頭を振った。

『か、んにん……』

あの重低音の「人の声」だった。が、今までとは違い、か細く、震えてすらいる。そして、その声に連動したかのように、全身も小刻みに震え始めた。

『かにん、して……あね、さ……ク……ユ、イ……』

「かにんして」とは、確か「申し訳ない」ということだったカリク自身は、ほとんど使わない言葉だ。西の隣国・ウナバルの言い回しで、そこからたまに物売りにやってくる商人からは何度か聞いたことがあったが……

（そしたら、こいつ、下つ国しもくにから来たのか……？）

ただか団子を恵んでやっただけの自分に、こんなにも無防備に懷いてしまったのも、異郷の地で、異形ゆえに誰かに頼ることもできず、ひとり心細い思いをしていたから……？

ぐっと胸を衝かれた刹那、予期せぬことが起きた。いきなり体が宙に浮いたかと思うと、ビターン、と地面に叩きつけられたのだ。誰かの足に引っかけられ、転ばされたのだと悟るのに、数瞬を要した。

「いつてて……」

まともに地面に打ちつけたのか、鼻に妙な違和感がある。口に流れ込んできた鉄の味に顔をしかめたところで、胸元がぺしゃんこになっているのに気がついた。

（げ、つぶしちまった！？）

慌てて跳ね起きて、探ってみる。

（良かった、いねえや……）

どうやら黒竜は、今の衝撃で懷から飛び出したようだった。が、安心するのはまだ早かった。

（ちょっと待て。どこ行ったあいつ！？）

あんなにチビで、外^と国から来て右も左もわからなくて、おまけに「災いの元」なのだ。今度、誰か別の人間に見つかって捕まりでもしたら、どんな目に遭わされるかわからないではないか……！！

「おーい」

しかし、呼びかけようとした声は、そこで凍りついた。みるみるうちに、全身から血の気が引いて行く。

「おい。さつきはよくも恥掻かせてくれたな！」

「何でえ、おまえ男だったのかよ。だったら、お兄さんたちにちょっと金貸してくれや。……返さねえけどよー！！」

先ほどの二人の破落戸どもが、ニヤニヤしながら立ちはだかつていたのである。

ウソだろマジかよ信じらんねえ!!

「あ、いやぁ……ははははは……」

ひきつった笑いをリクは浮かべた。「まったく冗談じゃねえぞ！
だあれがてめえらなんかに……！！」と啖呵を切ってやりたいのは
山々だが、彼我戦力があまりに違いすぎる。

「えーっと、その……じゃっ……」

片手をひよい、と挙げたのと同時に、リクは前方に突進した。まさか自分から向かってくるとは思わなかったのだろう、破落戸ころつき二人は、たじろいだように身を引いた。

すかさずその間を駆け抜け、リクはひたすら突っ走った。全速力で。わき目も振らずに。一刻も早く。ちよつとでも遠く……

（……って、さっきから俺、こればっかだな）

だが、こんな連中に関わっていたら、金を巻き上げられるのはもちろんのこと、命だってどうなるかわからない。

（そうさ、命があれば何でもできる！　これ、俺ん家の家訓っ！
……今決めたんだけどっ！！）

ところが、数丁（数百メートル）と行かないうちに、急に足取りが重くなった。

（まずいな……）

思えば、こうして突っ走るのはこれで二度目なのだ。それも、団子屋での休憩をはさんで、ほぼ立て続け　脚力だって落ちるはずである。

「ぜ……は……はぁ……」

だんだん息が上がり始めた。左の足首の具合も、何だかおかしい。関節が浮いているような感覚と、ずきずきとした痛みが、数歩おきに襲ってくる。

（そっか……引っかけられたとき、ひねうちまったんだ……）

そう思い当たった瞬間、とうとう、かくんと体が傾き、ザザーッとその場に転倒した。

「う……うつつ……」

再び傷めた足首を押さえて、リクは呻いた。どうか振り切れていきますように、と祈る気持ちで後方を窺う。が、祈りむなく、破落戸たちはしつこくリクを追ってきていた。

（やっべ、こんなところで座り込んでる場合じゃねえぞ……）

渾身の力をこめて、リクは立ち上がろうとした。とたん、激痛が足から脳天までを貫き、またしても呻き声を上げて倒れ込む。逃げるどころか、もはや動くことすらかなわなかった。

（これまでか……！）

観念して、リクは目をつぶった

「うぎゃあああああー！」

突如、絶叫が響き渡った。

(……へ?)

驚いて、リクは目を開けた。恐る恐る、後ろを振り返ってみる。
そして……啞然とした。

本来なら喜ぶべき場面が、そこには展開されていた。悲鳴を上げてのた打ち回っていたのは、刺青の男だったのだから。その手は必死に右目を押さえており、そこからは、だらだらと血が流れ落ちている。

「い、痛^{いて}え……痛えよお……！」

「だっ……誰でえ、こんな真似しやがったのは！」

仲間を襲った突然の悲劇に、袈裟の男が怯えたような声を張り上げた。

「ふ、ふ、ふ、ふざけやがって……！！！」

「ふざけてなどいない」

間髪入れずに答え、ずずいと進み出たのは、リクの全く知らない男だった。六尺(約180cm)はありそうながつしりとした長身に、ほんの少し癖のかかった長くて黒い髪。浅黒く彫りの深い顔立ち、役者と見まごうほど整っている。

つまり、この男こそが、刺青男に華麗なる一撃を放った「救いの神」だったのである。その状況から考えても、まさに颯爽という形

容がふさわしい登場ぶり

の、はずなのだ、が。

(ど、どうしょ……俺、全然喜べねえんだけど)

刺青男の目には、串が突き立っていた 明らかに、どこかで見た竹串が。

「私は極めて大真面目だが？」

そう続けた声にも、これまたどこかで聞いた覚えがあつた。いかにも「大人の漢^{おとし}」という感じの、渋みの効いた重低音……

(こいつって……黒竜^{あいつ}、だよな……?)

あの、ちんちくりんとてとて歩きの黒竜の特徴自体は、かけらほども残っていなかった。けれど、声が声だし、得物(武器)に至っては団子の串ときているのだ。おまけに……

(何っでこいつ、上半身真っ裸^ばなんだよおおっ!!)

下半身だつて、どこから持ってきたのか、薄汚れた変な布きれを形ばかり巻いただけで……風呂上がりか!と突っ込みたくなるような姿である。そんな外見^{なり}をしておきながら、「大真面目」と言い切るその「ズレっぷり」 どう考えても、あの黒竜以外あり得ないではないか。

「ち、ち、畜生お……おっ、覚えてやがれ……!!」

お決まりの捨て台詞を放った袈裟の男が、相棒をひきずってさつさと逃げて行ったのも、恐らくは「危ない」と直感したからなのだろう　いろいろな意味で。

そして、そう思ったのは、どうやらリクひとりだけではなかったらしい。ただでさえ「関わりたくない」という風情で遠巻きにこちらを見ているだけだった人の群れが、あっという間に掻き消えた。誰もが、まるで今のことなどなかったかのような顔で、心なしか足早にその場を去って行くこうとしている。

（何か、俺も、ちょっとこの場からいなくなりたいんですけど……）

思わず、リクはべそを掻いた。はつきり言っ、不本意だったのだ

「まったく、何を考えているのやら……嘆かわしいことだ」

自分の方がよっぽど「何考えてんだか」という格好のまま、もつともらしくため息などついているこの男と「仲間だ」などと思われるのは。

「どうした少年。先を急がんと日が暮れるぞ」

「……ええ、急ぎますとも！」

あんと別経路でね……！！　と、こちらは助けられた手前こっそり心だけで呟くと、リクは、傷めた足を引きずりながらも、猛然と歩き始めた。

あとには、怪訝な顔の黒竜のみが残された。

「何だ、助けられたというのに礼の一言も言わずに」

ぼそり、と黒竜は呟いた。それから、あらためて自分の身を眺め、はあ、と深くため息をつく。

（まあ、この姿ではしかたがない、か……だが、私とて、好きでこのような有様になったわけではないのだがな）

一刻も早く助けたいと思った。そのためには、小さくて非力な仔竜の姿ではなく、人の姿になる必要があった。ところが、何しろ竜は服を着ていないから、そのままでは上半身どころか全裸となってしまう。それで、とりあえず下半身だけ隠して、急いで駆けつけたのだ。

（こんなことなら、多少無理をしても、衣服の入った巾着を持ってくるのだった……）

天を仰ぎ、慨嘆したそのときだった。いきなり、強烈な眩暈に襲われた。

（……しまった！）

仔竜であつたときなら、団子一本で十分に腹が膨れた。が、六尺余りの人にとつては、それでは全く腹の足しにならない。それなのに、あのような形で体力を使ったりしたから……

しかし、時、既に遅かった。すうつと目の前から色彩が消え、やがて、ぷつん、と意識が途絶えた。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

次に気がついたときには、布団の上に寝かされていた。

(ここは……宿屋、か……?)

見回すと、果たしてそこは宿屋の大部屋であるようだった。相部屋になった男たちの好奇の混じった視線を感じて、慌てて我が身を確認してみると、いまだ人の姿のままであった。どうやら、「竜だから」ではなく、「病人らしき者が運ばれてきたから」、様子を窺われていたものらしい。

「……目え覚めたか」

ぶっきらぼうな声が頭の上から聞こえた。

「少年」

「『少年』じゃねえ、リクだ」

さらにぶっきらぼうに、リクは答えた。その眉が、次の瞬間、ぴん、と吊り上がる。

「ああああもあ、おまえってヤツは……っつ！

そりゃあ、おまえのおかげであいつらにとっ捕まらないで済んだことは認めるよ？ けどな、それと引き換えに、どんだけ俺が大変な思いさせられたか！

ああやって半身真つ裸ばで現れただけでも十分こっ恥はずかしかったのに、そのカツコのまんま、あんな道端でぶっ倒れやがって……『あれ、あんたの念兄（男色における攻め役）じゃないのかい』

って知らねえヤツに呼びに来られたときには、こっちがぶつ倒れそうになったぞマジで！！

おまけに、んなこと言われたせいで、今度はその辺のヤツらみんなに思いつ切りヘンな目で見られてさ。で、その「ヘンな目」浴びつつ、おまえ引きずって、まずは呉服屋行つて、ほら、今おまえが着てるその服買つて。おまえ寝かすのに宿探して、泊まる算段もして　ああ、ぶっちゃけ地獄だったねほんと！　足は痛えし、おまえ超重いし……　氣い失つてつから余計にさ！！

あと、服代と宿代、当然いっぺんになんか支払えねえから、どっちもツケにしてもらう羽目にもなるし　おかげで今晚つから、この風呂掃除に便所掃除に皿洗いに……　ああ、おまえは手伝ってくなくていいからな？　んなことされたら、かえって仕事が増えちまいそうだからっつー！！」

こちらに口を差し挟む暇も与えず一気に喋り倒すと、ぜい、ぜい、はあ、はあと肩で息をつく。確かに、相当疲労困憊しているように見えた。

「その……済まなかったな」

身を起こすと、ひとまず黒竜は頭を下げた。

「頭を触ってくれば、竜体になったのだが……」

「りゅう、たい……？」

リクの目が、裏返らんばかりにひん剥かれた。それ自体は、黒竜がとつさに思いついた造語である。「竜の身体」や「竜の姿」などと言えば同室の者がどんな反応を示すかわからないので、音を聞いただけでは何のことだかわからないような、しかし、彼が竜であることを知っている者　つまり、リクが聞けば、なるほど、と思い

当たる表現を使ったのだ。

「ってことは何か、あそこでおまえの頭を一発ひっぱたいてササツと懷あたりに突っ込んだきや、少なくともそのあと、あんな重たい思いだけはしなくて済んだ、と……」

「まあ……そうなるな」

「……それを先に教えろ、この大バカ野郎ーっっ!!」

黒竜の胸ぐらを引っつかんで、リクは吼えた。

黒竜、はじめてのおてつだい！？

「……カイっ！！」

それから半刻（約1時間）ほど後。相変わらず、リクの眉は吊り上がりまくっていた。

「俺、おまえに『手伝うな』って言ったよなあ……！？」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「カイ」というのは黒竜の名だ。人前で「竜」という言葉を連呼するのも憚られたので、自分が名乗ったのをきっかけに確認したのである。

思えば、そのときの方が、まだ状況はましだった。というか、その時点が最高だったとも言えた。

くるぶしの痛みがなかなか引かず、このままでは約束していた宿の手伝いにも差し支えそうだったので、荷物の中から湿布薬と包帯を出して手当てをすることにした。すると、「ひとりでするのは難儀であろう」と言っ、カイが包帯を巻くのを手伝ってくれたのだ。最初は「ほんとに大丈夫なのか……？」と危ぶんでいたリクだったのだが、相手が手を動かし始めた瞬間、息を呑んだ。

『おまえ、医者様みたいだな……』

実際、巻き終わる頃には、痛みはほぼ半減していた。しかも、力

イは、この処置に加えて、どうやって交渉したのか宿屋の主人から氷を少しばかり分けてもらい、手拭いに包んで患部を丹念に冷やしてもくれた。おかげで、板場（厨房）に手伝いに向かう刻限には、歩くのにもほとんど不自由しなくなった。

だから、カイは満で二十歳だとも言っていたので、明らかにあり得ないことではあるが、「もし父ちゃんって野郎が医者様だったら、こんな感じのヤツなんだろうか……」などということさえ、ちらりと思ったものだったのに……

大部屋に泊まっている者たちは外で食事をするのが普通だが、個室を取るような金持ち連中は、自分の部屋に運んでもらって食えることが多い。彼らの使った食器を洗うのが、今夜の板場でのリクの仕事だった。

ところが、あれほど「手伝うな」と言い含めていたはずのカイが突然現れ、洗い終わった食器を重ねて棚にしまおうとしたのである。本人は「やはりおまえひとりでは大変そうだから」と言っていたが、まず間違いなく、くるぶしの手当ての件で調子づいたからなのに決まっている。

しかし、柳の下に同じドジョウは二匹とないものだ。折悪しく、そこへ板前のひとりがやってきた。そして、食器を抱えて一歩踏み出そうとしたカイと派手に衝突したのである。

ぽんっ！

腹が立つほど小気味いい音と共に、リクの目の前で着物「だけ」がふわりと宙に浮いた。それが、ふあさり、と床に落ちたのと、がつしゃーん！！と全部の皿が床に叩きつけられたのが、ほぼ同時であった。

『うわああっ！ すみませんすみませんすみませんっっ！！』

慌てて、リクは平身低頭した。とにかく、ここは謝り倒すしかない。それに、人ひとりが忽然と消え失せた、という不可思議な状況を、一刻も早く相手に忘れさせねば……という思惑もあった。

『すーっつぐに片付けますからっつー!!』

もう一発、深々と頭を下げて、そのついでに、足元の着物を「中身」ごとひょいとつまみ上げる。

『とりあえず、まず、これ何とかしますねえ!』

お愛想笑いしつつ、いかにもそれをどこかへ捨てに行くようなふりをしていったんその場を離れ

『……カイっ!! 俺、おまえに「手伝うな」って言ったよなあ……!?!?』

この時点に至るのであった。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

「いいか?」

こそこそ、と声を潜めて、リクは命令した。

「人目につかないとこにぶん投げてやるから、さっさと人になって、ここの掃除しろ!」

「きゆう……？」

布地の内側から、怪訝な声が響く。

『何故だ……今「手伝うな」と言うたばかりではないか』

「……あのなあ！」

ますますリクは眉を吊り上げた。

「これは『手伝い』じゃねえ、『落とし前』だ！ 自分の尻拭いぐらい、自分できつちりやりやがれっ……！」

言い捨てて、憤然と元の場所に戻る。

（……とはいえ、俺も知らん顔ってわけには行かねえだろうなあ）

ため息をついて、リクはその場に屈んだ。

床の上は、まるで花火大会のような有様になっていた。赤やら青やら黄色やらの派手な絵皿のなれの果てが、あつちこつちと一面に飛び散っている。薄青色の模様入りの破片は、醬か味噌用の小皿だろうか。てろんと茶色いかけらは、たぶん、酒か何かを入れるぐい呑みといったところか……

（まあ、俺でも泊まれるような宿だ、目ん玉飛び出るほど高価な品ってのはないだろうけど……）

それでも、これだけたくさん割れてしまったのだ、一日や二日ぐらい無償働きしたところで、弁償し切れるかどうか……

（……ああああ、それもこれも、ぜゝんぶあの「バカ竜」のせいだ

！)

「伝説」は、正しかったのだ。実際、あの竜と出会ってから、口くなく目に遭ってはいないではないか……

「おい、いつまでぐずぐずしてんだよっ！！」

たちまち腹わたが煮えくり返ってきて、リクは相手を「捨ててきた」方に向かって怒鳴った。

「さつさと」

しかし、そこで彼は瞠目した。

リクに言われるまでもなく、カイは「さつさと働いて」いた。それも、文字通り「さつさと」。「ものすごい速さ」で。

異様に慣れた手つきで、床に散った皿のかけらを次々、次々と小脇に抱えた塵箱ごみに入れて行く。それが終わると、いつの間に見つけたのか、短めの棕櫚簾しゅうろを持ってきて、食器をぶちまけた場所のみならず、板場の床という床を一寸の隙もなく掃き清める。さらにその床を、これもどこからか持ってきた雑巾で、きゅっきゅ、きゅっきゅと磨き上げ……

「……って！ こっ、こらこらこら、待てってば、おい……！！」

ぶつたまげて、リクは相手の次の動きを制した。

「何、床なんか舐めようとしてんだよ、おまえ！？」

いくらきれいに拭いたとはいえ……面妖な趣味の客を取る店でも

あるまいし。

しかし、カイは顔色ひとつ変えなかった。

「以前、教わったのだ。掃除をしたあとは、本当に何も残っておらぬかどうか、必ず舐めて確認しろと……」

「……げ」

どんな教えだ、それは　それとも、竜の国では、それが「常識」としてまことしやかに通用しているのだろうか？

「なあ……それ、絶対^{ぜってー}おかしいって。誰に教わったんだよ、そんな妙なこと？」

「そうだな……遠い親戚と言ったところか」

ふと、記憶をたどるまなざしになってカイは答えた。

「事情があつて預けられていたのだが、そのこの当主の息子が、よくこのように床に食器をぶちまけてな。それを掃除するのが、私の日課のようなものだった……」

「……おまえさあ」

リクは、ありありと顔をしかめた。

「それって、もしかして……ってか、もしかしくなくても、はっきいきっぱり『いじめられてた』んじゃないね？」

「そうとも言っな」

あっさりと、カイは肯定した。その表情が、次の瞬間、何故かふつと緩む。

「そうか……やはりあれは『嫌がらせ』であって、『常識』ではなかったのだな。いや、自分でも、不愉快だとはいつも思っていたのだ。だが、もし、それが世の習いであって、万民が同じようにしているのであれば、私も我慢すべきなのだろうな、とも……しかし、そうではなかったのだな。良かった。あのような思いをしていたのが私ひとりだけであって……」

「カイ……」

微笑みさえ浮かべて迷懐する相手を、信じ難い思いでリクは見つけた。

「おまえ、相当なお人好しだな　そんなことから、つけ入れられていじめられたりするんじゃない？」

言いながら、心の隅に、妙な引っかけりを覚える。が、その「引っかけり」が何なのかを見極める前に、背後でどよめきが上がった。

「おおつ、こいつあすげえ！」

「まるで職人技みてえにぴっぴかじゃねえかー！」

「ウチにも掃除しに来てもらいたいぐらいだよ」

驚いて振り返ると、板前や下働きの女たちが揃って感嘆の声を上げていた。その中には、何と宿屋の主人の顔も見える。

「いやはや、思っていた以上の仕事ぶり、感心しました。その気持ちの印と言ってはナンですが、湯屋の掃除のとき、ついでに一風呂浴びてくれて構いませんよ　無論、追加のお代はなしでね」

「鍋釜も磨いてくれたら、あとで賄いも差し入れてやるぜ。さっきの詫びも兼ねてな」

横合いから、カイとぶつかった板前も口をはさむ。

「うわぁ、ほんとつすか!？」

たちまちリクは舞い上がった。食事と同様、宿屋備えつけの内風呂も、基本的には個室の客のもの。大部屋の客は別料金を払わねば入れないので、外の湯屋に行くのが当たり前だったのだ。それに、板場の賄いとはいえ、食事代が浮くのもありがたかった。

「よしカイ、それじゃ、まずは鍋釜から行くか!!」

張り切って、彼はカイを急ぎ立て……それっきり、「引っかかり」のことはすっかり忘れてしまった。

廁と湯屋でも大騒ぎ！

板場での作業が一通り終わると、二人は廁^{かわや}へ移動した。廁掃除も約束のうちであつたし、湯屋の方は、まだ人が使っている氣配がしていたので後回しにすることにしたのだ。

「……なあ」

先ほどと同じ調子で壁やら床やらをきゅつきゅ、きゅつきゅと拭き清めているカイを見やって、おもむろにリクが口を開いた。

「ひよつとしておまえ、食器の始末だけじゃなくつて、便所掃除も『日課のようなもの』だつたとか……？」

あの板前たちの言ではないが、カイの手つきときたら、まさに本職の掃除屋のようだったのだ。こうして見ている間にも、あつという間に、見違えるように何もかもがきれいになつて行く。

だから、実を言えばリクの出番は全くなかつた。それどころか、こんなお喋りをしている暇があつたら、先に湯屋に回つて、湯浴み客がいなくなる頃合いを待ち待ち、三助（風呂を沸かしたり客の背中を流したりする者）の手伝いでもした方が良いのではないかという氣もする。それなのに、何となくここを離れられずにいたのは、えらく不安だつたからであつた。

（だって、こいつのことひとりで置いといたら、今度は便器でも舐めかねえじゃなか！）

いくら眞実がわかつたとはいえ、一度身についた習慣はそうそう簡単に消えるものではない。ましてやこの男、茶屋の女将の一件で

もわかるように、筋金入りの堅物で、融通など全く利きそうにないのだ。

「いや、それは日課ではなかった」

その便器を拭き始めながら、淡々とカイは答えた。

「そっか」

思わずほんと、リクは吐息を漏らした。

「そうだよな、さすがにそこまでは」

「そちらは、三日に一度ぐらいで許してもらえた」

「そ、そうですか……」

としか言えずに、リクはポリポリと頭を掻いた。

予想通り極めて自然に便器を舐めかけたカイを大わらわで制止し、湯屋に向かったのは、それから半刻（約1時間）ほどしてからのことだった。

掃除してから自分たちが入っては、せつかくきれいにしたものをまた汚してしまうことになりかねないので、先に湯浴みをし、その湯を落としてつつ掃除をことにした。このあたりの湯はどうやら温泉の質を持っているらしく、傷めた足にじんわりと心地良さが広がって行く。

「あまり長いことは浸かるなよ。温めすぎて、腫れがぶり返してもしたら難儀ゆえな」

「ああ、わかってるって」

やはり医者様のような口をきくカイに、いささかうるさそうに應じると、リクは、湯の中で、うーん、と伸びをした。

「何っーか…… おまえって、案外『苦労人』だったんだな。いや、竜なんだから『苦労竜』か」

誰もいないのをいいことに、つい口が滑った。ところが、並んで浴槽に身を沈めたカイから返ってきたのは、意外すぎる反応だった。

「いや、前者で正解だ。苦労したかどうか、ということはともかく、少なくとも私は人として生まれ、人として育ってきたからな」
「……へっっ!？」

うつかり湯屋じゅうにこだまするような声を上げて、リクは慌てて首をすくめた。

「だ、だけど……その……」

「まあ、おまえが誤解するのも無理はないがな」

カイは苦笑した。

「先に、あの姿の私と出会ったのだから……恐らく、今のこの姿も『人に化けた結果』だと思っていたのだろう?」

「……はい。大当たりです……」

素直に認めて、ぶくぶく、とリクは口まで湯に沈んだ。

そんな彼を見やって、もう一度カイは苦笑した。それから、少しだけ迷うように視線を泳がせ……話しても構わぬかな、と呟いて、

さらに続けた。

「確かに私は、厳密に言えば、人だとも言い切れぬ　片親が竜なのだよ。つまり、人と竜との混血児あいのこだというわけだ。

しかし、私自身がその事実を知ったのは、ほんの半年ほど前のことだったのだ。頭の、ちょうど竜体だと角のある位置に何らかの形で触れると竜になってしまうのだ、ということもな。

それゆえ、そのような現象には少々不慣れで……実のところ、自分でもこの変化をいまひとつ制御しきれていないのだ。そのせいで、おまえにもあれこれと迷惑をかけてしまつて……」

……ばしゃん。

いきなり、カイは湯に顔をつけ、そのままぶくぶく……と水中に潜った。

「おい……？」

驚いて覗き込んだリクは、次の瞬間、はっとした。相手の肩が、昼間と同じように小刻みに震えている。何となく追求してはいけなような気がして、何食わぬ顔でリクは浴槽から出た。

ところが、ついでに床ぐらいは先に磨いておこうか、と浴場の隅に置いてある束子たわしを取りに行き、それを持って戻ってきたところで、異変に気づいた。湯の表面が、鏡のように鎮まり返っていたのだ。それは、潜っている者が一切の動きを止めたのだということに他ならなかった。すなわち……

「なっつにやつてんだよおまええ……っつ！！」

無我夢中で湯に手を突っ込むと、リクはカイの頭をぺしん、と叩いた。人よりは仔竜になっていた方が助け上げやすいと思ったのだ。たちまち水中に波紋が起こり、六尺超えの偉丈夫は、手のひら大のチビ黒竜に変化した。^{へんげ}恐れていた通り、ピクリとも動くことなく、ますます底へ底へと沈んで行く。

「ちょ、おいっ……！」

そんな相手を湯から引っ張り出し、逆さ吊りにしてその背をびしびし引っぱたいた。無論、いじめているのではない。飲み込んでしまった湯を吐かせて息を吹き返させるためだ。

「きゅ……びゅるるるーっ！」

ややあつて、甲高い啼き声と共に、湯が空中に弧を描いた。耳を近づけてみると、荒いながらも呼吸が蘇ってきている。

「やれやれ……ほんと、おまえってば騒ぎしか起こさねえのな」

リクは眉をひそめたが、その口調には確実に安堵が含まれていた。

『何やら、また面倒をかけてしまったようだな……』

手のひらの上から、恐縮した声が聞こえた。ひょいとその手のひらから飛び下りると、カイは自ら頭を叩き、再び人の姿に戻った。当然、全裸の男が現れるわけなのだが、今回の場合は湯屋なので何ら問題はない。股間を隠していた手拭いだけは湯の中に残ったままだったために、違う意味でリクに衝撃を与えてしまったことは別として。

（ま……しょうがねえよな。こんだけ体格差、あるんだし。……そ
おだよ、俺だつて、もうちょっと背が伸びれば、きつと、きつと……
っっ！）

必死になつて自分を鼓舞していると、ふう、と物憂げな吐息が聞こえた。見れば、カイは浴槽の縁に腰を掛け、窓の外に浮かんだ満月を振り仰いでいた。差し込んでくる月明かりが、端正な造作の上に絶妙な陰影を作り出し、あたかも一幅の絵のようである。

（つたく、全裸で、しかも溺れた直後だつーのに、何でこんなにキマつてやがんだよこいつは……！）

相手に負けないくらい陰鬱な表情にリクはなつた。絵心があつたら、このまんまの図描いて高値で売りさばいてやるとこだけだな、と、やつかみ半分で不届きな了見を抱く。

けれど、程なく彼は、それを心から後悔することとなった。

「実を言うと、『熱いもの』には全般的に慣れていないのだ」

物憂げな表情を崩さぬまま、カイは言葉を継いだ。

「例の親戚の家にいた時分は、食事も風呂も皆が終わつたあとの冷え切つたものを……という有様だったし、幸い今の屋敷ではそれなりに良くしてもらっているのだが、何と言つか……贅沢者と謗られそつだが、正直なところ『良くされすぎて』いると言つか……」

食事は毒見役を通して運ばれてくるので、私のところに来る頃には味すらよくわからぬほど冷え切っているし、風呂は風呂で、火傷でもさせたら切腹ものだからとか何とか言つて、湯冷めのしそうなほどぬるい湯しか使わせてもらえぬし……

そんなわけで、せつかく焼きたての団子を食う機会に恵まれても、すぐに舌を火傷するし、先ほどのような熱い湯に浸ければ、あつという間に湯あたりを起こすし……

……リク？ どうしたのだ、リク……？」

完璧にリクは固まっていた。

（な……何なの？ その「屋敷」とか「毒見役」とか「火傷でもさせたら切腹もの」とかって……）

そして、唐突に思い当たった 先刻感じた「引っかかり」の正体に。

（そう言や、あんどきも「万民」とか言ってたよな、こいつ……）

もともと、堅苦しい物言いをする男だとは思っていた。だが、ただ性格的に堅苦しいだけで、このような言葉がするりと口について出るものだろうか……？

（だいたい、「万民」なんつー言葉使ったり、その「万民」に思いを馳せたりするのって、王侯貴族だとか、いっぱい領民抱えてる御領主様、ぐらい、なん、じゃ……）

さあつ、と顔から血の気が引いて行った。さすがに王侯貴族が王都から十里も離れた場所を普通にうろついているはずはないだろうが、「御領主様」ならば十分にあり得る。例えば、領内の視察に出ている、「変化を制御しきれず」突然竜の姿になってしまい、さすがに領民にそれが知れたらまずいので、取る物も取りあえず逃げ出してきた、とか……

(だと、したら……)

親戚に預けられ、虐げられて育ったという幼い頃はともかく、今では、この男 否、「この御方」は、庄屋や村役人でさえ「ははーっ!」と地べたに這いつくばらせることができる立場にあるのだ。ましてや、リクのような、さらに格下の庶民にとっては、それこそ「雲上人」以外の何者でもないわけで……

(お…… おおお俺、そんな御方のこと「おまえ」呼ばわりして、したり顔で説教したりとか、「この大バカ野郎ーっ!」 「いっつまでぐずぐずしてんだよっ!」なんて怒鳴ったりとか……)

おまけに、頭引っぱたいて、宙吊りにして、背中ばしばし、とか

……

(どっ……)

全身から、一気に冷や汗が噴き出す。

(どどどどどどおしよっ~~~~~~~~!!!!!!……!!
!……!……!……)

絶体絶命！からの……

「これは……何だ？」

脱衣場に土下座したリクと、目の前に捧げられた短刀とを、カイは訝しげに見比べた。

「ははははいつ、ふっ、懐刀ですっ！　その、父ちゃ　いや、父の形見でっ……！！」

震える声で、リクは答えた。カイの方では文字通り「何だ」と尋ねただけなのだが、「相手は雲上人なのだ」という先入観が邪魔して、「どういうことだ」と責められているようにしか聞こえていない。

「しっ、知らなかったこととはいえ、これまでの数々の御無礼そっ、そのっ、お、お、御手打ちにされても、ぜ、全然、おかしくないか、とっ……！　だっ、だったら、せめて、父の、この刀でっ……！！」

「……それで、私に人殺しをせよ、と？」
「はひっ！？」

思ってもみない返しに、リクはますます縮み上がった。

（や、やべえ……かえって怒らせた！？）

彼の知っている「偉い御方」　村の庄屋や役人や大金持ちの商人たちは、こんな侮辱を受けたら、むしろ自分から率先して刀を振り上げ、相手に斬りつけることすら辞さない人々だった。その窮地

から逃れる方法は、ただひとつ　ひたすら謝り倒し、殊勝なところを見せ、できれば金一封も差し出して、相手の心変わりを誘うこと。だから、金一封は無理としても、せめて潔さを印象づけることで、何とか罪一等ぐらいは減じてもらえないだろうか、と思ったのだが……

（……って、そう言や、この御方って、そういう「常識」が通用しないんだっただ！）

今さら思い出して、リクは愕然とした。ああ、もうだめだ。「そんな小細工を弄して私の気が変わると思ったら大間違いだ！　だったら望むようにしてやろうではないか！　」とか何とか言われて、斬られちまうんだ……

ふう、と太いため息を漏らして、カイはリクの手から短刀を取り上げた。ちらり、と上目づかに窺ってみると、じっとその鞘を見つめ、矯めつ眇めつすがしている様子だ。「あ、それ、お気に召したんだったら差し上げますけど！　」と言いかけて、リクは慌てて言葉を呑んだ　いけない、いけない。ほかの「偉いさん」だったらいざ知らず、この御方の場合、「今、父の形見だと言ったばかりではないか！　それをそのように簡単に差し出そうとは何事だ！　」と逆に激昂されて、結局……

（ごめん母ちゃん！　こんなに早くそっちに行くことになっちまうて……！）

目を閉じ、体を固くしたそのときだった。

「杏に驚か　美しい文様だな」
「へっ？」

「鞘自体は古いが、かなりの業物だ。^{わざもの} 手入れも行き届いているこれは、おまえが？」

「え、い、いえっ、は、母が……」

「そうか」

相槌と共に、刀がリクの手に戻された。恐る恐る目を開けると、相手は穏やかに微笑んでいた。

「父御と母御の思いがこもった守り刀、というわけだな。羨ましいことだ。古来より、刀剣には魂が宿ると聞く。この先の道中でも、きつとおまえを守ってくれよう」

「……え？」

耳を疑ったせいで、一瞬反応が遅れた。

（この先の、道中……？）

と、いうことは……

「お、お赦し、いただけるの、で……？」

「赦すも赦さないも、おまえは私に、感謝されることはあっても責められることなど何もしておらぬだろうが」

呆れたようにカイは言った。刹那、その表情が一転して掻き曇る。

「それに……おまえは、人を斬り殺したことがあるのか？」

「え……」

ふるふるふる、と首を振って否定すると、「であろうな」と言って、カイはかすかに唇を歪めた。

「ないから、そのように軽々しいことが言えるのだ。だがな、あれは……地獄ぞ」

雷に打たれたような心地で、リクは相手を凝視していた。

ぎこちない時間が流れて行った。頃合いを見て、どちらからともなく湯を落とし、掃除に取りかかったのだが、全くとっていいほど会話がない。

「……そのように堅苦しくするな」

その掃除が終わりに近づいた頃、耐えかねたようにカイが呟いた。

「確かに、私は屋敷に帰れば当主として持ち上げられ、傳かすかれる立場にある。しかしな、それは、私自身の価値とは何ら関係がないのだ。

私の生母は王城の近くにある森の番人の娘で、妾しよとして屋敷へ迎えられた。屋敷には正妻がいて、息子も三人もあつた。私が他家へ預けられたのも、まあ、そのあたりの関係で……というのか？ その後、家を継ぐべき兄たちが不幸にも次々と亡くなり、私にそのお鉢が回ってこなかったら、恐らくは今も、預けられ先で奴婢ぬひ同然の暮らしを送っていたことだろうな。

しかも……私には竜の血が流れていると言ったであろう？ それは、母が、実は屋敷に入る前に竜と関わりを持ち、私を身ごもっていたからだっただ。つまり、私は――

「いいよ、それ以上は」

ようやく、リクが口を開いた。
遮ったのも、言葉づかいを元に戻したのも、無論、話の流れを読

んでのことだった。要するに、カイは本当はその屋敷の当主の血筋でも何でもなく、リクと同様に庶民の子であり、おまけに実の父親は人ですらなかったのだ。カイの立場からすれば、当然それは絶対に秘密にしなければならないことなのだろうし、それを知ってしまったなお「いいですよ、それ以上はおっしゃらなくても」といった喋り方を続ければ、かえって嫌味に聞こえてもしまっだろう。

「あのさ……ひょっとして、お屋敷を出たのもそのことがらみで、とか……？」

迷いながらも確かめてみると、こくりとうなずきが返ってきた。

「このままではいかんと思うたのだ。血筋についてはもはや如何ともし難いが、せめて中身だけでも当主にふさわしい者であらねば、と……」

それで、まあ……格好をつけて言うなら、『修行の旅』に出た、とでも言うのか？ それゆえに、そろそろ戻るつもりではおるのだ
いつまでも当主不在では、家の者も困ろうしな」

「そつ、か……」

リクはため息をつき……それから、急に目の色を変えた。

「だあから風呂の床なんか舐めちゃダメだつてっ！」

「い、いや……すまん。つい、癖で」

「何が『つい』だよっ！ まずこっから『修行』しろおまえはーっ
っ……」

もつとも、これをきっかけに、お互い 特にリクが 完全に
今までの調子に帰ることができたのだから、怪我の功名とも言えな
くはなかったのだけれど。

ともあれ、何とか掃除も終わり、二人は湯屋から廊下に出た。すると、あの板前が向こうからやってきて、

「おう！ 例のもんだけどな、大部屋に運んじまうと人目も気になるだろうと思つて、御主人さんとも相談して個室の方に運んどいたぜ。ちょうど空き部屋だったから、そのまんま泊まってもいいってさ。もちろん、御代も口八でいいってよ。ほれ、こっちだ」

どうやら、こちらの仕事が終わるの見計らつて、迎えに来てくれていたらしい。

個室は、大部屋とは別棟の平屋の建物の中にあつた。南側には大きな庭園もあり、ごちゃごちゃと人がひしめいているのしか見えないう大部屋とは雲泥の差だ。

ただし、リクたちに用意されていたのは、なるほど空いているのもうなずけるという趣の、北向きの小部屋だった。が、それでも何でも、相部屋の者たちを気にすることなくゆつくりできるのだから、贅沢の極みである。あらためて礼を言つて、その部屋の前で板前と別れると、リクは、わくわくしながら引き戸を開けた。

「うおお……すっげえ……っつ！！」

今朝、前の宿を出たときには想像もしていなかった豪華な料理が、四角い卓一面に並べられていた。煮込んだ肉と野菜、酢締めにした魚、網の上でじゅうじゅうと焼けている海老や貝……

「ほんとに賄いかよ、これ……」

もしかしくなくても、「賄い」というのは名目で、恐らくは板前自

身か、あるいは宿屋の主人が厚意で用意してくれたのだろう。

「こんなの見たの、マジ生まれて初めて」

そこで初めて、隣の男を見やって頭を掻く。

「って、コーフンしてんの俺だけか。ま、そうだろうな。おまえにとっちゃ、こんなもん、珍しくも何とも」

ところが、その言葉が終わらぬうちに、相手の口から素っ頓狂な声が上がった。

「うわ、うわあ、うわあーっ……!!」

こん肉、出来立て熱々じゃあ！ ナスビもナンキンも、ほかほか旨そうに煮えとる……！ 刺身も全然かぴかぴ乾いとらんし、こん貝なんぞ、まだ動いとるぞ！

なあ……なあリク、ほんまにええんか？ これ、皆オレらんもんなんか……！？ まさか、夢じゃ、ちゅうことはないろうな……？」

言いながらも、その双眸は料理に釘付けで、幼子のようにキラキラと輝いている。

（……な、何か、俺よりよっぽど感激しまくってねえか？ こいつ……）

しかも、またウナバル訛りがまじりまくりだ どうやら、心ここにあらずというときに口をついて出てしまうらしい。

そんなリクの様子の変化に気づいたか、カイは、はっと身じろぎし、小さくコホンと咳払いした。

「あ、いや……直そうと努力はしているのだが、何せ十七年もあちらにいたものでな。それに、食事に関してあまり良い思い出がないせいか、このような料理を見ると、わけもなく嬉しくなってしまうのだよ。旅に出てからは、熱々のものも生きの良いものも、それなりに食すようになったはずなのだがな。いやはや、恥ずかしいところを見せた」

「そんなことねえよ」

首を振って、リクは卓についた。

「おまえ、いろんな意味でカンペキすぎるところあるからさ、そんなにうまいの方がホツとする」

「……そうか？」

少しだけ間を開けてそう応じると、カイも向かい側に座った。その表情に、ちらりと影が走った。けれど、既に料理に夢中になっていたリクは、そのことには全く気づかなかった。

クウ、来たる

昼間、団子を食べたきりだったこともあって、それから四半刻（約30分）と経たないうちに、ほとんどの皿が空っぽになった。

「はぁ……食った食った！」

同時に全く同じ言葉が口をついて出て、二人は思わずふき出した。

「でもさ、ほんと旨かったよなあ！ それもこれも、みんなカイのおかげだよ。ありがとな」

素直にリクは言った。自分ひとりでは、たとえ全館津々浦々まで掃除をしたとしても、このような展開には決してならなかっただろう。

「いや……こちらこそ」

面はゆげな顔になって、カイは首を振った。

「おまえと出会えて、今までとはまた違った良い経験が数多くできた。それに……」

少しだけ考えるように視線をさまよわせてから、

「あのな、変な意味に取らずに聞いてくれよ？ 実を言つと、初めてなのだ。このように、同世代の、それも男の知己^{ちき}を得たのは。何しろ、虐げられるか傳^かしず^ずかれるかの両極端しか経験がなくて、いわゆる『普通の』というのか？ そんな人間関係を築く機会に全く

恵まれなくてな。あえて『友』と呼べる者を挙げるとするなら、十の年に、今の竜体の私ぐらいのちんまりした体で大怪我をしているところを助けた竜ぐらいのものだったのだが、これも、蓋を開けてみたら実兄で」

「ジツケイ？……兄さんだった、ってことか？」

「そうだ。早い話が、それをきっかけに、芋づる式に私自身の出生の秘密までわかってしまったのだがな」

肩をすくめて、カイは手元の茶を口に運んだ。酒の入った徳利も並んでいるのだが、そちらには全く手をつけようとしない。何でも、飲めない体質^{たち}なのだという。

だから、徳利の方は、リクがすべて空けていた。この国では数え十五が成人の年齢なので、既に飲酒歴は三年近くになる。それに、彼が育ったハクト村も含めた「北部」と呼ばれる地方では、冬の寒さをしのぐため、火を焚くことに加えて酒を飲むことでも暖を取るのが当たり前で、子どもの頃から酒をふんだんに入れた鍋物や酒粕を使った料理にも親しんでいる。結果、自然と「イケるクチ」となっていたのであった。

「おまえ……そんな水のように酒を飲んで、よく酔わぬな」

五本目の徳利を飲み干してもなお、顔色ひとつ変わらないリクを見て、半ば呆れたようにカイが慨嘆した。

「その体質、少し分けてもらいたいぐらいだ　私など、何が言うて酒席ほど気詰まりな『仕事』はないし、『男のくせにだらしない！』と連れにはどやされるし」

「ツレ？」

「ああ、そう言えばまだ話していなかったな」

聞きとがめたリクに、頭を掻いてカイは答えた。

「ゆえあつてはぐれてしまっているのだが、実は、私には同行者がいい」

ところが、その言葉が終わらないうちに、バタバタバタツ、と、けたたましい足音が響いた。

「ちょいとごめんよっ!!」

威勢のいい声と同時に、バンツ!と部屋の扉が開く。飛び込んできたのは、白地に紺の矢羽模様の入った着物をまとった、リクより若干年下に見える少年だった。

「ここに　あああああつつつつ!!!!」

問いかけが、たちまち絶叫に取って代わる。震える人差し指が指し示していたのは、もちろんリクのことではなく……

「何やってたんだよこのストコドッコイツっ!!」

「……げ!」

目を剥いたのは、言われたカイではなく、リクであった。少年ときたら、「何やってたんだよ」の「な」と同時に、カイの頬をバツチーン!とビンタしたのだ。

（こ、こいつ、天下の「御領主様」に何っちゅうこと……!）

かく言う自分だって、さんざん「バカ野郎」呼ばわりしてはいたのだが、それでも、この少年に比べたら全然ましな部類に入るだろ

う。道理で、あれだけ「寛大にお赦しただけた」わけである。

が、さすがのカイも、今度ばかりはカチンと来たらしい　引っぱたかれた拍子に、ぽんっ！と仔竜になってしまっただけに、なおさら。

「……きゅっ！　きゅきゅきゅきゅっきゅ　」

「ええい、うるさいうるさいうるさいっ！！　何するんだもかにするんだもないよっ！　昨日今日って、あたしがどんな思いであんたのこと捜し回ってたと思ってんだっっ！！！！」

負けずに少年は怒鳴り返した。ほええ、とリクは瞠目した。

（竜語と人語で、ちゃんと会話成立してるよ……）

たぶん、少年の耳にだけは、人語も重なって聞こえているのだろう。

（俺と竜のカイが喋ってるときも、はたから見たらこんな感じなのかなあ……）

しかも、ちらりと聞こえた一人称は「あたし」だった。

（女の子、だったんだな……）

あらためて見直すと、確かに男にしてはいささか線が細い。ざんばら髪を整え、小花模様の衣でも着せれば、「元気な女の子」で十分に通りそうだ。現実にごういう女性がいるからこそ、リクも、閑所ごとに「男装した女じゃないのか」と誤解されてしまうのだろう。

（とはいえ、しょうがねえか……男の俺だって、昼間みたいな目に遭ったらマジでビビるもんなあ）

すっかり記憶まで甦って、思わずげんなりしたそのとき、あ！と声を上げて彼女が振り返った。

「ごめんねえ、せっかく食事中だったのに、とんだ邪魔しちゃって！ あたし、クウってんだ。このバカ竜の兄さんから、こいつのお目付け役を任されてさ」

「きゅっ！？ きゅきゅきゅきゅ」

「うるさいね、バカをバカつつって何が悪いんだよっ！ ああ、いやね、このバカ、いわゆる『忍び旅』ってのをしてるんだけど、昨日、事もあるうに、それを知られちゃいけないヤツと鉢合わせしちゃってさ。大慌てで逃げてるうちに、あたしと離れ離れになっちゃまったんだよ。」

で、もしかしくなくても、あんたがこいつの面倒見てくれたんだよね？ いやあありがと！ ほんつとありがと！！ 大変だったでしょ、ド天然だわ何しでかすかわかんないわで……

でも安心しな、あとのことは、こっちでちゃあんとやつとくからさ。そうだ、たぶん金銭おかしだってあれこれかつたんだろ？ その辺のどこも、こいつからきっちり話聞いて、悪いようにはしないからね！」

異様なまでの早口でまくし立てるだけまくし立て、「じゃ！」とつまんだチビ黒竜ごと片手を上げると、クウはさっさと出て行った。いささか呆然とそれを見送って、はあ、とりくはため息をついた。

（な、何か……嵐みたいなひと、だったな……）

おまけに、一気に静かになったせいかな、部屋がえらくだだっ広く

感じられる。何となく手持ち無沙汰になって口にした酒も、どういうわけか、さつきまでほど旨くはなくて……

「……片づけっか」

あえて声に出してひとりごちると、リクは皿を重ねて盆に置き、何度かに分けて板場へ運んで行った。

その皿を全部洗って食器棚に返し、戻ってきたときにも、部屋は無人のままだった。

「しょうがねえ、先に寝とくか」

再びひとりごちて、リクは押入れから布団を出した。

「うつひょー！ さすが個室の物は違もんうぜー！」

金持ちが使うだけあって、掛け敷き総真綿の高級品である。普段使っている煎餅布団とは比べ物にならないほど温かく、触り心地も格別だった。

それをまず自分の分だけ敷き、相手の分にも取りかかろうとしたところで、その手が止まった。

（この分じゃ、もう帰ってこないかもな、あいつ……）

喋っていた言葉つきから推して、クウはリクと同じ庶民の子だ。加えて、異性でもある。にもかかわらず、あれだけ遠慮がない態度が取れるということは、たぶん「お目付け役」などというのは単なる名目。その実は、いわゆる「わりない仲」とやらなのに違いない。

その証であるかのように、クウが叫んだ言葉が脳裏に甦る。

『あたしがどんな思いであんたのこと捜し回ってたと……！』

相手に格別の思い入れがなければ、あのような物言いにはならな
いだろう。

（つたく、あいつらしいぜ。男友達よりも彼女の方が先にできちま
つてる、なんてさ）

そんな二人が思いがけず離れ離れになり、やっとのことで一両日
ぶりの再会を果たしたのだとしたら 朝まで一緒にいない方がお
かしいというものだ。

（……ってか、「家出」しちまった原因も、ひよっとするとそっち
なんだったりしてな）

あのカイのことだ、出生の秘密に悩んでいたことも、それゆえに
「修行の旅」に出たことも、決して嘘ではないだろう。けれど、実
際に屋敷を飛び出した直接のきっかけは、道ならぬ恋を周囲に反対
されたことだったのではあるまいか。想いを遂げるためには、手に
手を取って出奔するしかなかったから……

だからこそ、クウも男の格好をし、色気も素っ気もなく振る舞っ
ていたのに違いない。

考えてみれば、カイほど腕の立つ男と一緒にいるのだから、身の
安全は保障されているも同然だ。それよりも、あれだけ様子のいい
男と、女の姿のまま仲良さげに歩いている方が、別の意味ではるか
に「危険」だろう。下手に悪目立ちして「ねえ、あれってもしかし

たら、駆け落ちした二人なんじゃないかい」などと巷で噂にでもなれば、あつという間に屋敷の者に見つかって、連れ戻されかねないのだから……

(……つと、待てよ？ だとしたら、よろしくやってるどころか、とつくの間に、こっそり出立しまってる、とか……)

不意にそう思い当たって、リクは愕然とした。心の臓のあたりに、ぽつかりと穴でも開いたかのような心地に襲われる。

(……って、何動揺してんだよ俺)

むしろ、ここは、肩の荷が下りたと喜ぶべきところではないのか。本人も言っていたように、あとは全部クウに任せてしまえば良いのだから……

(……そうだよ、それでいいんだ)

自分は、道楽で旅をしているわけではない。王都^{みやこ}に行つて、大儲けして、自分と母を捨てた父を見返してやらねばならないのだ。厄介事ばかり起こして、何を考えているんだかも今一つよくわからなくて、おまけに竜で、そのくせ、とんでもなくバカ高い御身分でそんな、あらゆる意味で「めんどくさい」あの男などと、ここですっぱり袂を分かってしまった方が……

相棒は手乗り竜

しかし、布団に潜り込んでしばらくの時間が過ぎても、相変わらず心は晴れなかった。

(……寒！^{さみ})

ぶるる、と身震いして、リクは布団を胸元に掻き集めた。綿にくるまれているおかげで背中も手足もぽかぽかと温かいのに、何故か胸のあたりだけが、いつまでもうすら寒かったのだ。さつき穿たれたような錯覚を覚えた穴が本当に存在していて、そこから冷たい風が吹き込んでくるようで……

(湯たんぽ……欲しいなあ)

ふつ、とそんな思いが去来した。そうだ、こういうときには、湯たんぽを抱いているのが一番なのだ。懐^{ふところ}にちんまりと収まる大きさで、まるで犬か猫の仔みたいに、ふんわり、ほわぁっとほの温かくて……

「……きゅっ」

そうそう、ときどきそんなふうに鳴いたりなんかもする

「……ってっ！！」

がばり、とリクは跳ね起きた。

「お、おまえっ……いつの間に!?!」

『何を言っている。既に四半刻はここにいるぞ』

懐の奥からリクを見上げて、しれっと黒竜は言っただけだ。

『だいたい、おまえが寝言で頼んだのだろう。「寒くてたまらんから、懐に入ってくれ」と』

「……っ!!」

たちまち、かあつと頬が熱くなった。窓の外は、とつくに夜明けの気配を漂わせていた。つまり、リクは知らないうちに寝入っていて、よりによってカイ本人相手にそのような恥ずかしい寝言を発していたのだ。

「もういっぺん寝るっ!!」

黒竜を懐から放り出すと、リクは頭から布団をひつかぶった。ぽんっ、と音がして、相手が人にな変わった気配が伝わってくる。

もつとも、少し間を置いてそつと窺ってみると、カイは普通に着物をまとって座っていた。見慣れぬ巾着を手に、その中身を確かめている様子だ。

「ようやく荷物が我が手に戻ってきた」

リクの視線に気づいたのか、カイは巾着を振って、にっこりしてみせた。

「これで、おまえに着物代と宿代を支払える。替えの衣も何着か入っておるゆえ、今後の道中では、昨日のような迷惑をかけてしまうこともあるまい」

「へ……？」

再び、がばりとリクは跳ね起きた。金を支払ってもらえるのは無論ありがたかった。着物についても然り。もう、目のやり場に困るあの半裸を道端で拝まなくて済むのなら、それに越したことはない。が、

「『今後の道中』って……おまえ、あいつと一緒に行くんじゃないかなったの？」

「あいつ？ ああ、連れのことが」

やけに淡々と、カイは答えた。その淡々とした口調を保ったまま、さらりと続ける。

「あれなら、先ほど袂を分かってきた」

「は……！？」

まじまじと、リクは相手を凝視していた。

「何で」

「初めから決まっていたことだからだ」

至極明快に遮られて、自分の推測が大きく間違っていたことに気づく。これは、「手に手を取っての逃避行」などではない。「やがて来る別れを覚悟しての、思い出作りの旅」だったのだ。現に、カイも言っていたではないか。「いつまでも当主不在というわけにも行かないから、そろそろ戻るつもりだ」と……そこに、「クウを連れて」という選択肢は、恐らくないのに違いない。

（庄屋だとか大商人なら、おおあきんどそういうときはたいてい相手を妾めかけにして

たもんだっただけ……）」

こいつじゃ、それはあり得ねえな、と、すぐに考えを引っ込める。そつでなくとも四角四面すぎるほど四角四面なうえに、自分自身、妾の子としてさんざん辛酸を舐めてきたのだ。相手に生母のような苦勞はさせたくないだろうし、自分のような子ができることも望まないだろう。

「なあんか……御領主様つーのも楽じゃねえんだなあ」

「ああ、むしろ難儀なことばかりだ」

あつさり肯定して、カイはかすかに口角を上げた。

「ましてや、私の場合、カムナギ全土の領主だからな。その分、難儀さも段違いだ」

「ふうん」

何となく相槌を打ちかけて、ぎよつとリクは相手を見直した。「カムナギ全土の領主」つまり、中つ国のすべてを治めている、ということとは……

（そついえば……）

いくら半分以上居眠りをしていたとはいえ、歴代国王の名と来歴ぐらいは授業の中で聞き覚えていた。現国王は、末弟だったこともあって、幼いうちに下つ国・ウナバルへ「二国友好の証」として養子に行ったのだが、五年前、上つ国・ヘキギヨクとの間に起きた大戦で次兄と三兄が討ち死にし、三年前には、長兄の王太子と父の前国王も流行病で死去して、王位を継ぐ者がいなくなつたがために、呼び戻されて即位したのだ。名前は、ユアンⅡカイⅡハシム五世。

そして、目の前にいるこの男も、「カイ」と名乗り、ウナバルで十数年暮らしたという過去を持っている……

「……どうする」

今まで以上に淡々と、カイは 国王ハシム五世は問いかけた。

「また平伏して畏まるか？ 別に、それでも構わぬが 隔てられることには慣れておるゆえな」

吐き捨てるように続けられた言葉には、何もかもを諦め切ったような響きがあった。昨夜は、「畏まるな」と自分から頼んできたというのに……

その響きを、リクは心で反芻した どこかで覚えのある波長を感じたように思ったのだ。

『女男？ はっ、言うんなら言えよ！ こちとらなあ、んなこと言われんのに慣れっこなんだよっ！』

本当は、ちっとも慣れてなどいなかった。どころか、言われるたびに深く深く傷ついていて。けれど、そんなことを表に出したら、ますます女みたいだと言われるから…… 「男のくせに情けない」と母にも叱られるから、精一杯虚勢を張って、わざと荒っぽく啖呵を切って……

（こいつも……きつとそうなんだ）

本当は、嫌なのだ 「国王陛下」と畏まれ、遠ざかれることも、その立場ゆえに、惚れた女と添い遂げるといふささやかな幸

せすら許されないことも。でも、国王だからこそ、それを表に出すことはできない。出しようによっては、咎められるのはもちろんのこと、国の屋台骨を揺るがすようなことになつてなりかねないからだ。

下手に隔てをなくせば、逆に家臣や国民に舐められる危険性が出てくる。弱冠二十歳やそらの若さであるだけに、余計に。それで、肝心なときに国王命令が無視されるようなことにでもなれば、あつという間に国は乱れてしまうだろう。

それに、国王は、確かヘキギヨクの一の姫と婚約していたはずだ。五年前の大戦のおおいくさのようなことを二度と繰り返さぬよう、「二国間の永遠の和睦の証」として縁組が整えられたのだと聞いている。

彼の性格を考えれば、相手が同世代の姫だったなら、恐らく素直にこの縁を受け入れ、彼女を慈しむ努力も怠らなかつたはずだ。が、あいにく姫は数え七つの祝いもまだ済ませていない幼子だった。なればこそ、身近にいた同世代のクウに、つい心が動いてしまったのだろう。

けれど、だからと言って、その心のままに突っ走つてしまえば、その先には悲劇しか待つていない。自らの娘を愚弄されたと激怒したヘキギヨク王が、それを口実に攻め込んでくるであろうことは火を見るより明らかなのだから。そうなれば、結局また五年前のような戦が起こり、たくさんの人死にだつて出る。

『……それで、私に人殺しをせよ、と？』

『おまえは、人を斬り殺したことがあるのか？ あれは……地獄ぞ』

いくら人目がなかったとはいえ、一片の迷いもなくそう言い放つたこの男が、そのような結末を望んでいるとは到底思われなかった。

(……って、どう考えたって、こいつの方が背景重すぎじゃなか)

ただ、根底に流れている気持ちはきつと同じだ、という妙な確信だけはあった。

『初めてなのだ　このように、同世代の、それも男の知己^{ちき}を得たのは』

そう語っていたこの男の、どこか嬉しげな顔が脳裏に甦る。そのとき、恐らく本当に彼は　カイは幸せだったのに違いない。国のため、「万民」のため、すべての個人的な望みを諦め、本音を封印してきた彼にとっては、同じ年頃の友と戯れることすら、かなわぬ望みだったのだろうから。

だったら何で正体を明かしたんだよ、とは思わなかった。むしろ、だからこそ明かしたのではないかという気さえした。

あまりにも幸せすぎるとき、人は往々にして思うものだ。「夢なら醒めないでくれ」と。あるいは「醒めるんだったら、さつさと醒めてくれよ　その方が、現実に戻っても早く諦めがつくからな」と……

そして、カイの場合は明らかに後者だったのだろう。王都^{みやこ}に戻れば、嫌でも現実に戻らざるを得ない立場であるからこそ……

しばしの後、ぽんっ！と変化^{へんげ}の音が響いた。次いで、チビ黒竜の驚愕したような声上がる。

「きゅっ！？　きゅきゅきゅ　」

「ばあか、誤解すんな」

ぎゅっ、と衣の上から相手を抱きしめると、ぶっきらぼうにリク

は言った。

「ウチの家訓なんだよ 」「相手に心から信じてもらうには、百の言葉を並べるよりも、こうするのが一番なんだ」って」

これは今決めたわけではなく、母が生前よく言っていたことだったのだが。

「それにな、俺が出会ったのは、今の『このおまえ』なんだよ。真つ黒で、手のひらにのっかるくらいちゃんまりしてて、たまあに人へんげ変化しちゃあ厄介事を起こす、ヘンな竜 とりあえずは、そんていいじゃねえか」
「きゅ……」

何事か言いかけた相手の声が詰まった。次いで、「き……き……」と、何かをこらえているような音が漏れてくる。

「つたく、無理すんなよばあか！」

衣の内側に手を突っ込むと、リクは相手のぽわぽわした鬣たてがみをくしやくしやと撫でてやった。あえて衣を剥がさなかったのは、無論、武士の情けという奴である まあ、リク自身は武人でも騎士でもないのだが。

『……馬鹿馬鹿言っなあ、阿呆お!!』

ややあつて、ベソ掻き満載な人語が聞こえた。それを潮に、衣が小刻みに震え出す。最初は控えめに嗚咽が漏れ、それは、程なく激しい慟哭へと変わった。

季節外れの桜花

「どうしたんだい、こんなに……！」

素っ頓狂な声を上げて、宿屋の主人は、リクと彼が差し出した小判とを見比べた。

「昨日は素寒貧すかんぴんだと言ってたじゃないか」

「ああ、昨夜のうちにカイのお連れさんが来て、『迷惑料だ』って置いてったんだ。あんな豪華な飯も食わしてもらったしさ、遠慮なく取っというてよ」

用意しておいた答えを返すと、リクはニコツとした。本当は、カイ自身がそう言って支払いができれば良かったのだが、何しろさんざん泣いたあとである。泣き腫らした目を見られたら、またぞろ妙な誤解をされかねないので、今は仔竜になってリクの懷で丸くなっていた。

「ああ……そう言や、あのでっかい兄ちゃんを訪ねて、昨夜、娘っ子が来たっけね」

主人は、ようやく納得した顔になった。

「男の格好をしちやいたが、あの必死ぶり見たら、いいひと捜しに来た女だっけ丸わかりだったもんだ　そうか、それで、今はあんなひとりなんだね。さしずめ、兄ちゃん、いいひと先にいそいそ御出立か、逆にいまだ襦おしでしっぽりとってか？」

「ま、そんなとこかな」

適当に返事をする、リクはあらためて主人に礼を言い、あの板前にもよろしくと言付けて宿を出た。いったん反転して呉服屋へ向かう。ここでも同じような説明をして、着物代を支払う手はずになっていた。

『……何が「そんなとこかな」だ』

きゅきゅきゅ、という啼き声に重なって、重低音の人の声が響いた。

『というか、昨夜から少々気になっていたのだが、おまえ、もしかして、私と連れの関係を誤解してはいないか？ あれは、純粹に旅の連れだ。少なくとも、旅に出た時点では間違いなくそうだったのだ』

「まっ たまた ー」

言いかけて、リクは口をつぐんだ。相手の気性を、もう一度思い出してみる。そして、眉をひそめた。

「……マジで？」

『ああ、真面目に言っている』

それこそ生真面目に、カイは言い直した。

『知っておるかもしれんが、私には許婚がいてな。婚儀こそまだだが、あれこれ事情があつて、既に城に住まわせておるのだ。何分十五近くも年が離れているので、今のところは、妹か、場合によつては娘のような感覚で見られずにおるのだが、幼くして実家を出されて異郷の地へ送られ、二親と離れた淋しさに懸命に耐えている様子を見るにつけ、それが、かつての自分とぴたりと重なるように』

……だから、決してないがしろにしてはならぬと思うておる。一生かけて守り抜いてやろうともな。

そのような存在があるのだ、初めから女子おなことして意識している者を旅に同道させるわけなどなかるうが。ただ、旅の最中にはいろいろなことがあつて……その際、連れの存在に救われるような場面も幾度となくあつてな。正直なところ、今の気持ちは、旅に出た時点とはいささか異なりつつある。ゆえに、それが決定的なものにならぬうちに、潔く袂を分かつべきだと思つたのだ。……おかしいだろうか？ 私の言っていることは『

「い、いや……」

むしろ、いかにも堅物なこの男らしい物の考え方であり、けじめのつけ方だとさえ思つた。

「ただ……あの娘この方は、それで納得したの？ 世の中、おまえみたく理詰めで物を考えるヤツばつかじゃないんだぜ？」

殊に女性は それは、母ひとり子ひとりの家庭で育ち、母親と接触する機会が人一倍多かったリクが、それこそ理屈ではなく、体感してきたことでもあつた。

「うーん、『しなきゃしょうがなかった』ってのが正しいかな」

背後で、別の声が答えた。驚いてリクは振り返り……そこで、さらに驚いた。

「え、と……」

「何？ あたしの顔に何かついてる？」

くすりと笑つたクウは、昨夜とは違つて薄紫の女衣を身に着けて

いた。ざんばらだった髪もきれいに櫛で梳かれ、耳元には桜色の簪が飾られている。薄く白粉を刷き、頬と唇にもかすかに紅を乗せたその顔は、どこからどう見ても女性だった。それも、ほんのり色気すらまとった「大人の女」

「もう、男の格好をする必要もないんでね　あたしの旅は、ここですぐで終わるから。あっちこっち回ってはみたけど、やっぱり住み慣れた王都みやこになるべく近い方が、食べ物もんも水も合って落ち着くみたいだから、この街に住むことにしたよ」

その言葉は、どちらかと言えば、リクではなくその懐に向けられているようだった。それがわかったのか、「きゆるっ」と小さな相槌が懐から聞こえたが、顔を覗かせる気配はない　あくまでも、意思は固いようであった。

「……あのっ」

たまらなくなつて、リクはつい口をはさんだ。

「どうせだったら、王都みやこの木戸口ぐらいまでは一緒に　」
「それは、ダメ」

微笑んで、クウは遮った。

「あたしはね、この先には入っちゃいけないんだ　昔、いろいろとやらかしちまつてさ」

はっとリクは息を呑んだ。自分の思い込みが、いよいよ的外れだったことを痛感する。

「ご、ごめんなさい！ 俺、ろくに事情も知らないで、余計なこと……」
「いいんだよ、身から出た錆ってヤツなんだから」

鷹揚に、クウはかぶりを振った。その視線が、記憶をたどるように遠くの方へ注がれる。

「団子をね、恵んでやったんだよ そのひとつてば、こつそり城下に出てきたはいいけど、懷に金貨しか入れてなくって、小銭に両替することも知らなかったからね。」

そしたら、たぶんその礼のつもりだったんだろ、それからすぐにあたし、ドジ踏んで捕まっちゃったんだけど、ほんととは島流しになるか、下手したら獄門台に上んなきゃなんないとこを、所払い（追放刑）で済むように計らってくれてね。そのあとも、あたしの落ち着き先を探して、ずうつと一緒に旅してくれて……そ、もともとはね、この旅って、それがきっかけで始まったんだよ。そのひとつのこゝとだから、きつとあんたには、そんなことなんか一つ言も言ってないんだろうけどね。

こんだけのことをしてもらったんだ、もう十分に幸せだよ、あたしは そう思わなくっちゃ、バチが当たっちゃう。

だからさ、あたしのこと心配してくれるんだったら、その気持ち、そのひとの方に向けてやって。ほんと、危なっかしいひとなんだ。世間知らずだってのもそうなんだけど、優しすぎて、何でもかんでもひとりで背負い込んで、しまいいはそれに押しつぶされちゃうよ。うなとこがあるんだよ。あたしの代わりに、そうならないようにしつかり見張っててやってね」

「は……はいっ！！」

居住まいを正し、こくこく、とリクはうなずいた。

クウと別れて再び呉服屋へ向かってからも、足元が、どこかふわふわと落ち着かなかった。

『もう十分に幸せだよ、あたしは　そう思わなくっちゃ、バチが当たっちゃう』

『あたしの代わりに、見張っててやってね』

そんな彼女の言葉と、切なげな微笑とが、やけにくつきりと脳裏に焼きついてた。桜の花のような香りも、ずっと鼻孔にまわりついて離れない気がして……

『……何だ。あれに惚れたのだったら、おまえともここで別れて良いぞ』

「なっ、何言ってんだよっ!!」

どうやら、胸元に密着しているせいで、鼓動が速まったのに気づかれたらしい。

『おまえならば身分的に何も問題はなからうし、あれの過去を知る者も、このあたりまで来ればおらぬだろうし　そもそも、過去とは言っても、あれの場合、戦^{いくさ}で親を亡くし、生きるためにやむなく^{すり}胸摸に手を染めていただけだからな。私に言わせれば、ひとを奴婢^{ぬひ}のごとくこき使った拳句、床まで舐めさせた下^{しも}(つ国)の王太子の方が、よほど罪深いぐらいだ。

それに、別れで受けた痛手の一番の薬は新しい出会いだとも聞くならば、あれにとっても決して悪いことではあるまいよ。私も、自らの手で如何ともしがたいのなら、いつそ良い男と添うて幸せになつてくれればという気持ちであるしな　その点、おまえは機転が効き、世渡りもうまい。半人半竜の私をこのように受け入れてくれる度量もある。安心してあとを託せるというものだ』

さ、遠慮せずに行って参れ、と揶揄するように続けられて、リクは首まで真っ赤になった。

「や、その……って、ダメ！ ダメダメダメ！ 俺は王都^{みやこ}に行くのっ！ 行ってクソ親父に一泡吹かせてやんなきゃ、ここまで来た意味がねえんだからっ！！」

『……ほう』

カイの口調が変わった。

『それでは、父御は御存命ではあるのだな？』

「え……？」

聞き返したところで、昨夜、自分の懐刀を「父の形見だ」と説明していたことを思い出す。

「あ、や……それが、よくわかんないんだよね、実は」

正直に告白して、リクは頭を掻いた。

「俺は顔も知らなくって……母ちゃんも、死ぬまで親父のことなんか一度も話してくれたことなかったしさ。だから、まあ俺的には死んでるようなもんで、それで『形見だ』なんて言っただけど、もし生きてるんだったら、やっぱ一言言ってやりたいじゃない。『バカ野郎』とか、『何で俺と母ちゃんのこと捨てたんだ』とかさ」

そこで、ふと思いついた。

「なあ、カイ。あの刀、誰のもんだとか調べられる？ 多少時間が

かかったっていいからさ」

国内すべての王侯貴族を束ねるこの男なら、それも不可能ではないかもしれない　そう思ったのだった、が。

『いや、残念ながら無理だな。家紋でもあれば、話は別なのだが』
「え？」

耳を疑って、リクは聞き返した。杏に驚くとカイが表現した文様が即座に脳裏に甦る。

「あの模様って、家紋じゃないの？」

『違うな』

「そつ、か……」

やはり、地道に家々を訪ねるか、骨董品屋でも回るしかないか……
…そう思ったため息をついたとき、ちよいちよい、とカイが鼻先でリクをつついた。

『呉服屋。今通り過ぎたぞ』

「え？　ちよ……それを早く言えよっ！！」

慌てて、リクは踵を返した。

クウと気まぐれ白竜

呉服屋で支払いを済ませ、リクは今度こそ王都に向かって歩き始めた。多少出る時刻が遅くはなったが、このまま歩いて行けば、夕方には王都の外れの関所付近まではたどり着けそうだった。

その様子を、クウは物陰からそっと見送っていた。正確には、いまだ黒竜の姿でリクの懷にちんまり収まっているはずのカイを、と言つべきだったが。

『半年前……そなたがいなければ、私は義姉^{あね}上のあとを追っていたかもしれない』

昨夜、彼の腕の中で囁かれた言葉が、耳の奥に甦る。

『あの頃は、ほとんど何も食えなかったし、夜も全く寝つけなかった。そなたが懷に入れて守ってくれたり、折を見て、手ずから粥や白湯を与えてくれたりしなかったら、早晚、餓死するか、犬猫にでも取られて死に至るか、どちらかであつたらう。』

なればこそ……そなたには、この先、誰よりもつつがなく、幸せな人生を送つてほしいのだ。本当は 』

その先を、彼は口にしようとはしなかった。けれど、まるでその代わりであるかのように、明け方近く、こんな声を聞いた。

『もっと、もっと一緒に居りたい……許されるもんなら、こんまま、城に連れて帰りたい……』

そして、うなじを這い、胸元を乱す唇と指の感触。それは、い

まだにクウの体の奥の奥に、切なくも甘い痺れとなつて残っていた。

……ただ、こちらの方は明らかに夢であるとしか思えなかったのだが。

何故なら、その時刻よりはるかに前に、カイは自分の部屋に帰っていたのだ。「参ったなあ……おまえの懷に入れられて連れてこられたせいで、どう戻したらええかわからんが」と途方に暮れたような顔で訴えられて、「ああそうだったねえ、ごめんごめん」と、苦笑しつつわざわざ部屋の前まで送つてやつたのだから間違いはない。

それに、ふと気づくと、すべてが、見事なまでに寝る前の状態に戻っていたのである。乱れていたはずの布団も、胸元も、何もした記憶などないのにちゃんと整えられていたし、痛みすら覚えるほど激しく求められ、触れられたせいで、首筋や乳房にくつきりといってしまった赤い花びらも、一片たりとも見当たらなかった。布団や着物はともかく、肌に刻まれた痕跡まできれいさっぱり消えていたとなれば……

(……ま、今となつてはどっちでもいいけどね。夢だろうと、現(うつ)だろうと)

かたや一国の王、かたや一介の咎人。もう二度と、行く道が変わることはない。そもそも、こうして一度でも重なったこと自体、あり得ぬことだったのだ。ならば、すべてを「いい夢を見た」ということにして、新たな一步を踏み出すまで……

(あんただつてそう思うよね、カイ。だから、何かつてえと、ひと嫁に行け嫁に行けつてうるさかったんだろ……?)

耳元の桜色の簪かんざしに、クウはそつと手を触れた。もう豆粒のようにしか見えないほど遠ざかってしまった相手が、「嫁入りのときにも使え」と購あがなってくれた唯一の品。そのときは、「ひとの気も知らないで！」と憤慨しまくっていたものだったけれど……

しゆるしゆるっ、という音と共に、突然、傍らに何かが降り立った。普通の人間なら、ここでびっくりして悲鳴のひとつも上げるところだろうが、クウは全く動じなかった。早い話が、知り合いだったからである。振り返るより先に、彼女は苦笑した。

「何だよティエン、また仕事サボって息抜きかい？」

ティエンは、カイの話にも出てきた彼の実の兄だ。弟と同じく半人半竜なのだが、十年近く年長であるためか、竜になったときの身の丈は、およそ六尺（約180cm）と彼よりはるかに大きい。体の色も弟とは対照的に雪のように真っ白で、二本の角は輝くばかりの黄金色こがね。瞳は焰ほむらの如く真っ赤だった。

もつとも、そんな竜が現れたらすぐに大騒ぎになってしまうし、弟とは違ってちゃんまり懷に収まるような大きさでもないので、市中でのティエンはもっぱら人の姿を取っている。

人外の血が混じっているせいなのか、そろそろ三十路に差ししかかろうというのに、見た目は二十歳そこそこにしかならない。そして、その外見年齢と、血のつながった兄であるということとの双方が作用しているのだろう、人の姿をしているときのティエンは、面差しと言い、背格好と言い、カイと実によく似ていた。竜体りゅうたいのときの色合いを示唆するかのような、真っ白な肌と、銀色の髪と、赤い瞳を除いては。

しかも、肌はともかく、髪と目については、そのままではあまりにも目立ちすぎるので、何しろ、この近在では黒か茶色の髪と目

の者が九割方を占めていたから、父親から手ほどきを受けたという幻術を使つて黒髪黒目であるかのように見せていた。おかげで、ティエンは今やほとんどカイと瓜二つの容貌となっており、二人を見慣れているクウでさえ、時に見間違えてしまふほどだった。ありていに言えば、すぐに振り返らなかつたのも、半分はそれが理由だと言つていい。考えていたことがことでもあつたから、いろいろな意味で、まともに相手の顔を見られない気がしたのだ。

それはさておき、そんなティエンは、カイが不在の今、彼に乞われてその影武者を務めていた。そうでなくとも容姿がそっくりであるうえに、執務もそつなくこなしていたから、大臣から下働きの者に至るまで、いまだ誰ひとりとしてこのことには気づいていないという。

ただ、どうも性格的に飽きっぽいところがあるらしく、しばしば「廁へ行つてくる」と偽つて、こうしてクウの前に現れるのだ。ティエンは千里を見通せる「竜の水晶玉」を持っており、クウもその片割れを渡されているので、連絡ならば、それで十分に取れるはずなのに。

「あんたね、いくら竜になれば一瞬で飛んで来られるつつたつて

」

たしなめながら、ようやくクウは相手を見やつた。その目が怪訝にしばたたかれる。

相手の真つ赤な瞳が、呆然としたように見開かれていた。変化^{へんげ}後は牙となる八重歯の生えた口も、同じくぽかんと開かれている。やあつて、その口がおもむろに動いた。

「怖^{こえ}え……！　よくそこまで化け　つてえ……！」

「もつとほかに言いようはないのかよっ……！」

相手の向こう脛に蹴りを食らわせると、憤然とクウは噛みついた。

「ったく、あのおチビさんだって、もう少しマシな反応したってのに……兄弟揃って気が利かないったらありやしない！」

「俺まで一緒にすんなよ」

脛をさすりながら、ティエンはぼやいた。

「でも、ま……蹴りが出るようだったら、少しは安心、かな」

「え……？」

意味を取りかねて、クウは問い返し……次の瞬間、赤面した。相手の白くすんなりした指が、そつ、と目元に触れたのだ。

「ああ……まだちょっと腫れぼったいな。慣れねえ化粧なんかしたのは、これ隠すため……だろ？」

「なっ……」

何だよ、そういうところには氣い利かせなくつてもいいんだってば！　と言ってやりたいのに、口が動かなかった。相手の手つきが、あまりにも優しく。幻術で隠しているはずの瞳の中の焰に、すうと吸い込まれてしまいそうで……

（……って、いけないいけない！）

たぶん、この男が変にカイに似すぎているから良くないのだ。ついつつかり、カイにそうされているような気分になって、それで……

（そ、そうだ、さっきみたく顔を見なきゃいいんだよ！）

必死に自分にそう言い聞かせ、わたわたと視線を動かしたところで、いきなり鼻をつままれた。

「こーら、そやってまたカイのこと考えてる！」

ふごふごともがいているクウを、じとーっとティエンは睨んだ。

「あーあ、嘆かわしいなあ……お兄さん、おまえをそんなふうに育てた覚えはないよ？」

「育てられた覚えもないわっ！！」

やっとのことで相手の魔手から逃れると、クウはべえつと舌を出した。

「ってか仕事は！ だいたい、毎回毎回廁を理由に中座するなんて……あとでカイが『ナカグソ長糞陛下』とかあだ名つけられでもしたらどうするんだよっ！！」

「いや、それならもうとつくにつけられてっから」

「なっ……！？」

目を剥いたのと、ずしり、と何かが手のひらに載せられたのが、ほぼ同時だった。訝しげにそれを確かめたクウの目の玉が、さらに飛び出しそうにひん剥かれる。それはチビ竜のカイよりも大きな巾着袋で、中には、金銀銅貨と小銭が、これでもか、というほど詰まっていたのだ。

「何だよ、これ……」

「何だよって……報酬？」

飄々と、ティエンは答えた。

「先に言つとくけど、突つ返すなよ？　これは、カイも承知のことなんだからさ。っつーか、この旅の間、あんたがカイにしてくれたことだとか、ヤツがあんたにかけた迷惑だとか考えたら、むしろこんなんじゃ足りねえんじゃねえかとさえ思ってるんだ　俺も、それにカイもな。」

あとね、俺、今日は仕事ねえの。明日っから『^{かみ}上の荒熊（ヘキギヨク王の異名）』のオッサンと首脳会談なんつーもんをするんで、目下あつちの国目指して馬車で移動中なんだよね。おまけに『今後』の段取り検討してっから、俺がいいぞっつーまで絶対^{ぜってー}覗くなよ！』って厳命してあつから、ぶつちやけ動きたい放題っつてヤツ？　ってことで、これからあんたの家と仕事探しに行くぞ」

「へっ！？」

「へっ！？　じゃねえよ。保証人がいるとしないとじゃ、話の進み具合が段違いだろうが　ましてや、あんたは女なんだからさ。それに、たとえその金を持ってたとしても、仕事はしてた方がいい。何にもしねえでぶらぶらしてるくせに暮らしには困ってねえんじゃ、御近所に思いつ切り怪しまれちまうだろ？」

「それは、そうだけど……って、ちよつと！　何先にすたすた行っちゃまってるんだよっ！！」

^{みたび}三度目を剥くと、クウは慌てて相手のあとを追った。

クウと気まぐれ白竜（後書き）

中盤のティエンのセリフ「そやって…」は脱字ではありません、念のため。

白竜王の気がかり

「まったくもお……兄弟揃って、ひとのこと振り回してばっか！」
「だから一緒にすんなってば……！」

不満げな声をぶつけてきたクウを振り返ることなく、ティエンはひらひら、と手を振った。刹那、その唇に、かすかに苦笑が浮かぶ。

（ほんっと、見事なまでにあいつの「影」だよなあ俺ってば）

だが、もつと苦笑を禁じ得なかったのは、そのことに自分が思いのほか打ちのめされているという事実に対してだった。八つも年下の小娘だし、鼻っ柱は強いし、何かというと手足は出るし……どう考えても「やんちゃな妹」止まりだとばかり思っていたのに。

（畜生、てめえのせいだぞカイ……！）

まさに「男に惚れると女は変わる」を地で行くような変化であった。会うたび、会うたびに、あたかも芋虫が蝶になりなんとして一枚一枚皮を脱ぎ捨てて行くかの如く、どんどん垢抜けて、どんどん表情が艶めいて行って……

男の姿をしていたときでさえ、そのような有様だったのだ。女の格好をして化粧など施されてしまっっては、息を吞んで絶句するしかなかった。とつさに軽口を飛ばして相手に脛を蹴ってもらわなかったら、間違いなく本能に負けて、あの場で抱き寄せてしまっていたことだろう。

（つつーか、どっちみち早々にビンタ食らって終わるに決まってるんだから、やっちまったって良かったんじゃないやね？）

今さら気づいて、ティエンはがっくりと肩を落とした。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

ユアンⅡカイⅡハシム五世の乗っている　ということになっている　馬車とそのお付きの騎馬隊の一行が、上つ国・ヘキギョクとの国境線の目前までたどり着いたのは、その日の昼過ぎのことであつた。国境を越えてしまつてからは、そうそう気を抜くわけにも行かない。ここで昼食にしようということになり、一行は歩みを止めた。

しゆるしゆるつ、と一陣の風が吹き抜けた。風は馬車の窓の遮光布を揺らして車内に入り込み、やがてゆるゆると人の形を取った。

(やれやれ、どうにか間に合つたぜ……)

座席の背もたれに身をゆだねて、ティエンは額の汗を拭つた。いくら命令で誰も中を覗けないことになつていゝとはいへ、食事を取る様子ぐらひは見せない、確実に怪しまれるだろう。幸い、クウの家と職探しの方はつつがなく終わつていたので、戻ることにも支障はなかつた。ティエン自身が言つた通り、「兄だ」と称して彼がついて行つたことで、驚くほど早く話がついたのだつた。

ちなみに、幻術に長けているティエンは、変化へんげを解くたびに素っ裸になるようなことはない。身に着けている衣服も含めて、自在に姿を変えることができるからだ。

「おお、そろそろ昼餉の刻限か」

何食わぬ顔でそう言いつつ馬車から顔を出した姿は、誰がどう見ても王族服で身を固めた国王陛下本人にほかならなかった。

一枚の衣を帯を締める形で着流すか、働きやすいよう短い丈の上衣と袴の組み合わせを身に着けることの多い一般庶民と違って、王侯貴族の服は、詰襟で長い筒袖のついた上衣に筒型の長尺の袴というかつちりとした形をしていた。国に有事あらば、即座に先頭に立つて軍を率いられるようにということで、そのような体裁になったものらしい。

中でも、今ティエンが着ている濃紫こいむらさきの地に金系銀系で華やかな刺繍が施された王族服は、最上級の正装とされていた。国の命運を左右する大事な会談だというだけでなく、未来の舅殿である荒熊王に敬意を表して、という意味合いもあって、これを選んだのである。

頭に載せている黄金の冠も含め、普段自由すぎるほど自由に生きているティエンにとっては若干窮屈な代物ではあったが、微塵も表情には出ていない。それどころか、悠然と扇子を使いながら微笑んでさえている。天晴れなまでの影武者ぶり、と言いたところだが、理由は全く別のところにあった。

（ま、天空城あいつちでも十何年この手のカツコしてたからな……）

十年前まで、ティエンは天界において「白竜皇子はくりゅうのみこ」と呼ばれていた。というのも、彼とカイの父親は、天界の統治者「竜神王」だったからだ。つまり、カイは厳密には完全なる庶民の血筋ではなく、種族は違えど王者の血を引いていることに変わりはない、ということになるのだが、それはひとまず置くとして。

父は、まだ「青竜皇子^{せいりゅうのみこ}」と呼ばれていた皇太子時代、「人族殲滅」の大義を掲げる先代の竜神王に反発し、地上に下っていたことがあった。母とはその折に知り合い、所帯を持ったのである。

ところが、その母と、カムナギの先王ユアンⅡナスルⅡハシム四世が密通していた。

……と、少なくとも父は思った。

『見損なったぞ、ユアン！ それに、おまえもだ！ この恨み、いずれ必ず晴らさせてもらう……！！』

激怒した父はそう言い放ち、ティエンを連れて天界に戻ってしまった。その邪推が生まれるきっかけには実のところティエン自身も大いに関わっているので、あまり偉そうなことは言えないのだが、そこを差し引いたとしても、やはり短慮であつたとティエンは思う。

当時八つだつたティエンは、ハシム四世と母の傍らにあつて、彼らのやり取りの一部始終を見聞きしていた。そこには、父の勘繰っていたような内容は全く含まれていなかった。母はそのとき、どういうわけか半狂乱状態になっており、ハシム四世は、そんな母を幼子をなだめるような感じで抱き寄せ、頭を撫でていただけだったのだ。今思えば、このとき母の胎内にはもうカイが宿っていたはずで、つわりやそれに伴う気鬱に苦しんでいたのかもしれない。

それに、ハシム四世自身、他人の妻を略奪するような人物ではないともティエンは思っていた。何故なら、地上に下りた際に怪我を負った父を、何のためらいもなく手当てし、あたかも以前からの親友であるかのように遇してくれたのが、ほかでもないハシム四世だと聞いていたからだ。

そこで、ティエンは何度もそれを伝えようとした。けれど、父は全く聞く耳を持たなかった。

『御自分だつて、一時は竜と人との融和を望まれておられたのでしように！』

『あの二人は、竜である父上を恐れることも蔑むこともなく受け入れてくれたかけがえのない存在だったのではなかったのですか……！！』

そう突っ込んでみただけで、結果は一緒だった。父にしてみれば、なまじ一度心から信頼を寄せた相手だっただけに、裏切られたという思いばかりが強まって、かえって頑なになってしまっていたのかもしれない。

『貴様……息子の分際で父にたてつくとは何事か！ ましてや、憎にくきあやつらをかばうなど……！！』

遂にそう咆哮した父はティエンを拷問にかけ、それでも考えが翻らないと見るや、城の地下牢に投獄した。このままでは死を待つばかりだと悟ったティエンは脱獄を敢行したが、「殺しても構わぬ」という父の非情の命により、追っ手が容赦なく攻撃をかけてきたこともあって、あつという間に満身創痕となり、真つ逆さまに下界へ落ちた。落ちた先が下つ国・ウナバルの王宮の庭であり、そんな彼を拾い上げたのが実の弟のカイだったのは、天の配剤であつたのかはたまた運命の神のいたずらであつたのか

（ま、後者だろうな）

何しろ、落ちたときの衝撃で、ティエンは自分の名すら思い出せ

なくなってしまったのだ。ようやくすべての記憶が戻り、兄弟の名乗りを上げられたのは、ほんの半年ほど前のことであつた。

ともあれ、そんなわけで、ティエンは、幼い頃から、いずれは竜一族を統べる者として徹底的な帝王教育を施されてきた。忌憚なく言つてしまえば、三年前に突然王位を継ぐことが決まり、王太子としての経験も積みぬまま即位してしまったカイとは、踏んできた場数が違うのだ。

だから、もしカイにとって今の立場が本当に重荷であつて、すべてを捨ててもクウと添い遂げたいという意思もあるのなら、このまま何食わぬ顔で玉座に座り続けてやってもいいかな、とも思わないではなかつた。カイのため、というよりは、クウのあんな「無理した」姿を見なくて済むのなら、という理由の方が大きかつたのだが。

（ただ、なあ……）

それをやつてしまうと、あの父の思う壺に完全にはまってしまう予感がする。実際、ティエンが時たまカイの影武者をしていることなど、執務室に設えられた巨大な水晶玉を通して、とつくの昔に知られてしまっているのだ。「このまま王位を奪つてしまえ。さすれば中つ国一國が労せずして手に入る」と囁かれたことも一再ならずあつた。そんな父が、ティエンが本当にカイに代わつて国王になつたなどと知つたなら……

『ようやつたぞ白竜！ これを足掛かりに、次は「そなたの」婚約者の実家である上つ国を狙うのだ』

「誰がするかよ馬鹿！！」

「……陛下!？」

折しも手水鉢を捧げ持ってきた侍従のひとりが、ぴきん、と顔を引きたらせて硬直する。

「あ、いや……その」

げふげふげふ、と咳払いすると、ティエンは、あはは、とごまかし笑いをして見せた。

万が一にも刺客に狙われるようなことがあつてはならぬので、食事は車の中で取らされた。例によって、毒見役を何人も通した末の冷えた菜ばかりだが、半日歩き回って空腹になっていたせいか、それなりに順調に箸は進んだ。

(つつーかあのチビ……)

もきゅもきゅと口を動かしつつ、ティエンは、ふと眉をひそめた。

父のそれよりはるかに小型とはいえ、ティエンの持っている水晶玉とて玩具ではない。昨日のうちに、だいたいのことは把握していた。カイが突然同行することを決めた「リク」という少年のことも、二人の間に何が起こったのかということも。

リクが「父の形見だ」と言って持っていた懐刀の文様は、カイが言った通り家紋だというわけではなかった。が、「御印^{みしるし}」ではあった。それも、国王かその嫡子だけが持つことを許されている品にしかつけられないという、まさに「国王または王太子であることの証」なのである。

無論、それだけでは模造品を所持しているという可能性もなきに

しもあらずなのだが、ティエン自身の記憶が、そうではないのだということはつきりと証明していた。天空城にあった頃、例の巨大水晶玉を通して見たことがあったのだ。リクに極めて面差しが良く似た男の姿を。深紅の王族服に身を包んだ彼は、皆から「ユアン」「リク王太子殿下」と呼ばれていた……

(……しかし、カイは何を考えてやがんだ)

ティエンほど確固たるものではないにしろ、あの懐刀を見た以上、カイにも推測ぐらいはついているはずだ。リクこそが、本来なら、王太子亡きあと王位を継ぐべきであった人間なのではないか、と。

幸い、リク本人はそのことには全く気付いていない様子だった。ならば、何かしらの理由をつけて、さりげなく離れるか、いっそ故郷に帰るよう促すべきではなかったのか。そうでなくとも、十数年を異国で暮らしてきたカイの即位については賛否両論あったのだ。何かの加減で、王宮の事情。殊に故王太子の顔をよく見知った者が、リクの姿や、彼の持っている懐刀を見たりしたら。しかも、その「誰か」が、実は「反・ハシム五世派」であつたとしたら……

王都到着！

「……ちよつと待ちなさい」

「はぁ？」

露骨に嫌な顔をして、リクは立ち止まった。

（んだよ、珍しく役人には止められなかったのに……）

王都と各街道との境の木戸口には、王都から見て最初、街道から見れば最後の関所が設けられていた。どうせまた女と間違えられてすったもんだするんだろう、と覚悟していたのだが、そこでは驚くほどうすなりと「通つてよし」と言われたのである。なのに、まさかその直後に、こんなケチがつくことになるうとは……

行く手に立ちはだかっているのは、白髪の老人であった。年の頃は六十前後か。着ている衣と、鼻と顎の下にそれぞれ生やした立派な髭から察するに、それなりの身分の者と見える。

（けど、そうやってひとのこと舐めるみたくジロジロ見てる時点で、カンペキ、ドン引きってヤツだよなぁ……）

はぁ、と大きく嘆息すると、リクは渋々「いつもの台詞」を口にした。

「あのねじいちゃん。俺は、こつ見えても男」

ところが、思いがけず、相手は真顔でうなずいた。

「それはわかっておる」

「へ？」

「噂に聞いたのだ。私が捜している御方に良く似た偉丈夫が、昨夜、おまえのような少年と同じ宿に泊まっていたと……それで、先回りして、おまえが通りかかるのを待っていた次第なのだ。」

頼む。教えてくれ……！ その者は、どこにいるのだ？ もし途中で袂を分かったのなら、どのあたりでその者と別れた……！？」

「え……」

がしり、と両肩をつかまれ、取って食わんばかりの勢いで尋ねられて、リクは目を白黒させた。

（えーっと……それって、たぶんカイのこと、だよな……？）

自問したところで、あ、と思い当たる。

昨夜、クウは、カイと離れ離れになってしまった理由を「知られちゃいけないヤツと鉢合わせた」からだと言っていた。その「知られちゃいけないヤツ」こそが、この老人なのではないだろうか。恐らく老人は、「国王陛下」に極めて近いところにいる大臣か、お付きの誰かなのだらう。それで、カイは、大騒ぎになるのを避けたくて、早々に竜に変化^{へんけ}して逃げ出した……

（……っと待てよ？ 「捜してる」っつーことは、こいつ、カイのこと捕まえて、そのまんまお城に連れて帰るつもりなんじゃ……）

そういえば、懐の中の黒竜も、心なしが身を固くしているように思える。きつと嫌なのだ。せつかくの「修行の旅」が 自由に行きたいところへ行き、身分を気にすることなくさまざまな人々と触れ合い、あたたかい食べ物も存分に堪能することができる機会が、こんな形で強制終了してしまうなど……

(……させるかよ！)

即座にリクは決意した。どのみち、こうして王都に入ってしまった以上、旅が終わるのは時間の問題なのだ。ならば、せめてあと一両日ぐらいは好きなように過ごさせてやったって、罰は当たらないではないか……！

「……ああそうそう、確かに、昨夜はえらくガタイのある兄ちゃんと一緒に宿に泊まったよ」

ややあつて、リクはおもむろに口を開いた。

「だけど……そいつって、ぶっちゃけ、竜だよ？」

「何……！？」

たちまち相手の目が三角になった。

「貴様、ふざけたことを」

「ふざけてなんかないさ。だって、頭触ったら、ぼんっ！って竜に変わるんだもん。おまけに、朝になったら、いつの間にかどっかに消えちまってさ　おかげで、俺、二人分の宿代払わされて、迷惑だったらありやしなかったよ。」

「っつかさ、だいたい『御方』　っつかからは、じいちゃんが捜してるのって、かなりの偉いさんなんだろう？　そんな人が、俺ら庶民と一緒に宿に自分から泊まるわけなんかなくね？」

「だからさ、そう、あれだよ。たぶん、竜がその御方に化けてたんだ　ほら、キツネやタヌキが人を化かすみたたくさ」

「なるほど……」

眉をひそめて、相手は考え込んだ。

「確かに、おまえの言う通りかもしれない。そもそも、へ　いや、あの御方は、ずっとおし　お屋敷にいらしたのだ。先日、湯治に出かける際にも、面と向かってご挨拶申し上げたはずだし……それなのに、あのような場所で御姿をお見かけするなど、面妖なことだとは思っていたのだ。しかし、それもこれも竜めの仕業とあらば……いや、妙なことを聞いて申し訳なかったな。このことは、忘れてくれ　儂も、『じいちゃん』などと無礼な呼び方をされたことや、ぞんざいな口をきかれたことは見逃してやるゆえ。そうとわかれば早々に戻らねば……！　いつまでも、副宰相に何もかもを任せてはおけんしな」

ぶつぶつ呟きつつ、そそくさと老人は去って行った。

「フクサイシヨウ……」

同じくぶつぶつと、リクは口の中で呟いた。

「ってことは、あのじいちゃん、もしかして　」

『ああ、ハクロウは我が国の宰相だ』

懷の中から重低音の声が答えた。

『それはそうと、済まなかったな。私とて、決して戻らぬつもりはないのだが　』

「わかってるって。要するに、『連れ戻される』んじゃなくって、『自分の意思で帰りたい』んだろ？」

ぼんぼん、と衣の上からリクは相手の背を叩いた。

「それに、こつちこそごめん。迷惑だとか言ったり、キツネやタヌキと同列扱いにしちまったりしてさ。でも」
『わかつている。ああでも言わなければ、相手が納得せぬと思ったのであるう？』

遮り返して、黒竜はきゅきゅきゅ、と小さく笑った。

『その見立て、決して間違つてはあらぬぞ　ハクロウは、一度言
い出したらよほどのことがない限り引かぬからな。』

あの男は、私が即位するよりずっと前から、さまざま大臣を歴任
していてな。私などよりはるかに政務に通じておるゆえ、即位当
時には、政のイロハまごころからあれこれと教えてもろうたのだ。

ところが、少しでも私が妙な答えを返すと、自分の思う通りの返
答になるまで、何度も何度も同じことを問うてきてな。おまけに、
ほんのわずかでも下（つ国）の訛りが混じると、これまた何度でも
言い直させられて　あれには、まこと往生させられたものよ。

まあ、だからと言って、決して悪い人間だというわけではないの
だが……私のことも、良くも悪くも非常に公正に評価してくれるし
な。厳しい教えも、国のため、良き政のためを思うゆえであつたの
だろう。何しろ私は　』

そこで、突然カイは言葉を切った。

『いや、これ以上はよそう。つまらぬ繰り言になりそうな気がする
それよりも、ちいと腹がすかんか？　団子でも食いに行こうで
はないか』

「ええつ　」

また団子かよ、と言いかけて、リクはそれを呑み込んだ。思い出

したのだ　カイにとっては、団子とは、クウとの出会いの思い出につながる特別な食べ物だったのだ、ということ。ましてや、王宮に戻ってしまえば、もうそれを気軽に食べに行くこともできなくなる……

「ったくしょうがねえな。ま、夕飯時までにはまだ間もあるし、付き合ってやつか」

「きゆるるーん!!」

懷の中から、歡喜の声が上がった。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

「いやあ食った食った!」

それから半刻はんとぎ(約一時間)後。リクはすっかり満足して、その屋台をあとにした。

『ここの御店主はな、老舗の和菓子屋で、のれん分け寸前まで行っただという技うで量の持ち主なのだ。私が団子を食いに城下へ行きたくなつたのも、視察中、この屋台から流れてきた匂いに、どうしようもなく心惹かれたからだだったのだよ』

団子が焼き上がる前から、カイはそう言って絶賛しまくっていたのだが、その言葉に違たがわず、出された団子はどれも、外はカリッと香ばしく、中はふんわり柔らかで、甘辛いたれにしる、餡子にしる、これまでにリクが食べたどんな団子とも違う、うっとりするような味わいだった。

しかも、王都へ来た理由を問われるままに店主に話したところ、こんなことまで言ってもらえたのだ。

『なるほど、お父^とつつあんをねえ……そういうことなら、ウチで手伝いとして働いてみねえか？』

いや、別に団子屋になれつつつてるわけじゃねえんだぜ。ただ、人搜^{みやこ}したって、王都は見ての通り広^{ひろ}えんだ、一日二日で終わるもんじゃあんめえ？ だったら、食い扶持ぐれえはどつかで稼^{かせ}がねえとだろ？ おまけに、さつきから、でっかい兄ちゃんが、「頼む！ そうしてやってくれ！」ってな目でじいっとこつちを見てるしよ 俺^{おいら}あ、兄ちゃんに初めて会ったときから、どうもその目に弱^{よわ}えんだよなあ。

ってことだからよ、落ち着き先が決まったら、いつでもまた訪ねてきな。そうだ、ナンだったら塹^{ねくら}の方も、ウチの長屋の大家に口きいてやるうか？』

無論、リクにとっては願^{ねが}ったりかなったりの話である もっとも、カイは、それを見越したうえで、わざわざ店主とリクを引き合わせたのかもしれないが。

「ほんと、おまえに付き合^あって団子食^{たんし}いに行^いって良かったよ。ありがとな」

懷^{こころ}の中で、はたはた、と尻尾を振る気配があつた。

直接帰着の挨拶をしたい、ということもあつて、店主の前では人の姿をしていたカイだったのだが、今は、またチビ黒竜に戻^{かえ}って、リクの懷^{こころ}にちんまりと収^{おさ}まっていた。これは、団子屋に行く道すがら、二人で話し合^あって決めたことであつた。王都から十里以上も離

れた湯治場でさえ宰相と鉢合せたのだ、王都の市中とあらば、「国王陛下」を見知っている者と出会う確率はさらに高くなるだろうと思われたからだ。

このような形で長時間隠れていなければならないのは、「人」として育ったカイにとつては、かなり窮屈であるはずだった。が、それでも「城に戻る」とは言い出さなかったところを見ると、やはりまだ旅を終えたくないのだろうとリクは見ていた。

だから、団子屋で働くことが本決まりになったとき、一瞬「ほんとはこのまんますぐに手伝いに取り掛かった方がいいんじゃないかな」と思いはしたものの、結局は当初の予定通り、引き続きカイと行動を共にすることにした。店主には、幾重にも礼を述べたうえで「これから王都^{みやこ}見物もしたいし、今夜はカイと到着祝いに飲みにも行きたいんで、明日また来ますね」と言い置いてきていた。

『こちらこそ……またしても何やら気をつかわせてしもつたようで、申し訳なかったな』

自分から言つて、カイはくるん、と蜷^{こむ}局を巻いた。程なく、ずしん、とその体が重くなる。腹が膨れて眠くなつたのか、ここ数日の疲れがどつと出てきたのか……

「ま、俺は勝手にその辺見て回っから、ゆつくり寝てな」

そつと懷をつついてリクは相手に語りかけ……再び顔を上げたところ、ぎくりと立ちすくんだ。

V S・白竜！？

「カツ……！？」

そこから先が続かない。思わず交互に見比べる　目の前に立っている男と、自分の懷を。

少し癖のかかった黒い短髪。浅黒くて均整の取れた長身。まさに「目元涼しい」という形容がぴったりの切れ長の目。役者のようにスツと通った鼻筋に、程よく引き締まった唇　着ている濃紫の王族服を若干薄汚れた着流しの麻衣に変え、髪を長く伸ばして後ろで結べば、彼は、まさにリクが知っているカイ以外の何者でもなかった。

（けど、あり得ねえよな……）

今も、懷はずっしり重いままなのだから。ちらりと覗いてみると、黒くてふさふさした鬣たてがみが規則正しく上下しているのも、はつきりと見て取れる。

「……そうか！」

突然閃いて、リクは身構えた。カイは、血のつながった兄がいると言っていた。兄弟ならば、顔が似ていても不思議はない。そして、もしかすると……

「あんたもカイを連れ戻しに来たのかよ！？」

「『も』？ ……ああ、そう言や宰相のオッサンに絡まれてたっけな、おまえ」

ひょい、と相手は肩をすくめた。

「そうね、ま、そんなとこかな　俺はティエン。おまえの懷ん中
にいるちんまりした生き物の賢くて素敵なお兄様にして、有能な影
武者様だ」

「影武者……？」

「ああ。だって、国王陛下がいきなりいなくなっちゃったら、城も
巷も大騒ぎになっちゃまうじゃねえか。だから、俺がカイのふりして
やってたってわけ。宰相も言ってたろ？　カイは城にいて、湯治に
出かけるときに挨拶だってしたはずだって　その挨拶の相手は、
実は俺だったのさ。

だけど、本人がこうして戻ってきた以上、もはや俺は御役御免
つか、こんな窮屈な仕事、むしろこっちから御免こうむりたい
です一刻も早く、みてえな？　ってことで、さつさとそいつをこっ
ちによこしな。んでもって、おまえもさつさと故郷に引っ返した方
がいい」

「だあれが……！」

叫んで、リクは着物ごとぎゅっとカイを抱え込んだ。

「つつーか、『賢くて素敵なお兄様』なんだったら、もっと弟の気
持ち汲み取ってやれよ！　このまんまトンスラするようなヤツじゃ
ねえことぐらい、あんたにだってわかるはずだろ？　なのに、何で
あの四角四面なじいちゃんみたく、無理やり連れてこうとするんだ
よ……！　おまけに、どさくさに紛れて俺にまで妙な命令しやがって

……あのな、俺は」

「親父さんだったら、この王都にやいねえよ」

「……え？」

「カイから聞いたかどうか知んねえけど、俺、千里を見通せる水晶

玉つてのを持ってるんだよね　何せ、竜の息子なもんで？」

ふふん、と鼻を鳴らすと、ティエンは口角を上げ、牙を思わせる八重歯を見せた。

「だから、おまえとカイが出会ったときから今までのこともだいたいのところは知ってるし、おまえの親父さんらしき人が玉に映ったのも見たことがあるのさ」

「なっ……」

愕然と、リクは相手を見つめた。

「じゃ、じゃあ、あんたは、俺の父ちゃんが　」

どこの誰か知ってるのか、と聞きかけた、そのときだった。

だしぬけに、黒い影が懷から飛び出した。影はティエンめがけてまっすぐに飛んでいき、がぶり、とその腕に噛みついた。たちまち、ティエンの口から悲鳴が上がる。

「いっつ、てええゝゝゝっつっ！　ちょ、カイ、おま、何やつ……
……ってててっつっ！！」

「キイツ、キイツ、キイーーーーッッ！！」

ティエンの腕に噛みついたまま、黒竜は甲高い警戒音を発した。黒くて丸い目が、真っ向から相手を睨みつける。その目にうるうるとした光が宿っていることにリクが気づいたのと、ティエンがハッとした顔になったのが、ほぼ同時だった。

「……わかったよ。だったら好きにしろ！」

吐き捨てるように言うと、ぷいとティエンはそっぽを向いた。

「その代わり、何があっても知んねえからな俺は!!」

「きゆるっ、きゆるるるっ!!」

噛みついていた口を離すと、毅然とした声で黒竜は答えた。ティエンに向けられた言葉だったからか、リクには人語の方までは伝わってこなかったが、恐らく「ああ、わかつている」とか「無論、覚悟のうえだ」とかいったようなことを言ったのだらう。

「何だあ? あれ」

「真っ黒で、羽なんかついてやがるぞ」

「コウモリか……?」

悲鳴が響き渡ったせい、まわりがざわついてきた。チツと舌打ちして、ティエンはパチンと指を鳴らした。とたん、カイの姿が黒い猫に変わり、「にやうん!」と一鳴きしてリクの懷に飛び込んだ。さらにもう一度パチンと指が鳴ると、今度はティエン自身が真っ白な一本の煙となって、しゅるしゅるっ、と大空高く立ち上った。

雲の上に出たところで、ティエンはすかさず白竜に変化し、一直線に北を目指した。その先には、明日からの会談の場になっているヘキギョク王宮がある。本当は、カイを引き取ってそこまで連れて行き、宿泊のために用意された部屋で彼と入れ替わるつもりでいたやはり、荒熊王には「本物の婿殿」に会ってもらうに越したことはない。それに、当初から覚えていた「本来の王位継承者」リクが王都に腰を据えてしまうことに対する懸念も、どうしても拭えなかった。なればこそ、朝から何度もの変化と移動で正直くたくたになっていた体に鞭打って、何千里もの距離を飛んで戻ってきたのである。

が、もちろん、そのようなことはティエン以外の誰も知る由もない。

「な、何だ、手妻（手品）か！？」

「幻術師だ！ あれは絶対幻術師に違いないぞ……！！」

さっきまでカイに向いていた人々の視線は、今や上空のみに注がれていた。その隙に、急ぎ足でリクはその場を逃れた。結局ティエンに救われた形となってしまうたのが、若干悔しくはあったけれど。

「……さてと、気を取り直して、王都見物再開すつか」
みやこ

ようやく人だから離れたところで、そう言っただけで懐を見下ろすと、カイは、またしてもこくこくと船を漕いでいた。それこそティエンの見せた一瞬の幻術だったのだろう、黒猫だったその姿は既に黒竜に戻っている。

「あれま、よつぽどくたびれてたんだな、おまえ」

リクは苦笑した。

（ほんととは、聞いてみたかったんだけどなあ……「おまえも、もしかしたら父ちゃんのこと、知ってたんじゃないかね？」って）

ティエンが知っていたということは、その可能性は大いにある。なのに黙っていたのだとすれば、その裏にはよほどの仔細があるのに違いない。ならば、包み隠さずに教えてほしかった。だって、クウに頼まれたのだから。　「何でもかんでもひとりで背負い込んで、

しまいにはそれに押しつぶされちまうようなところがあるんだよ。あたしの代わりに、そうならないようにしっかり見張ってやってね」と。

（ああ、でもあれかな、俺があんまり張り切ってたもんだから、「王都にはいない」なんて言えなかったのかな……）

ふっとそんな思いが頭をかすめたとき、いきなり背後から荒っぽい声が響いた。

「どけどけどけどけいっ！」

「うおっ！？」

慌てて飛びのくと、荷物を満載した大八車が恐ろしい勢いで走り抜けて行った。大八車だけではない。牛車も馬車も、人波を縫うようにして何台も走っている。牛車にしろ、馬車にしろ、月に一度通ればいい方だったハクト村とはえらい違いだ。

（つつーか、ナンもかもが全然違えよな……）

大通りには、村の全員よりはるかに多い人間がひしめいているし、その通りの両側には、見上げるだけで首が痛くなるような高い建物が所狭しと立ち並んでいた。きらびやかな着物や反物をこれでもか、というほど並べた呉服屋。食欲をそそる匂いをぶんぷんと漂わせている飯屋。リクの顔ほどもある大きな錠前ががちりとかかった米蔵や金蔵。路地の奥の暗がりからは、そこはかとなくなまめかしい芳香も流れてきていて……

ぽかん、と口を開けた状態でそれらの光景を見て回っているだけで、あっという間に時間が過ぎて行った。いつしか日はとっぷりと

暮れ、通りの店屋にも、ひとつ、またひとつと明かりが灯り始める
そのうちの一軒の軒先に一膳飯屋の提灯を認めて、腹の虫がぐ
うっと音を立てた。思わずリクは赤面した。

（あんなに団子食ったのになあ……）

ま、育ち盛りだもんな、と自分で自分に言い訳して、のれんをく
ぐる。いらっしやい、と威勢のいい声に迎えられ、店の隅の席に座
った。

「何にしましょ？」

「そうだな……じゃあ、握り飯と粕汁と鶏の煮しめちょうだい。そ
うそう、握り飯と煮しめは、もう一人前作って包んでくれる？ も
う少ししたら宿屋で連れと落ち合うことになってさ、そいつに食
わしてやりたいんだ」

言い添えたのは、懐の中のカイが相変わらず目覚める気配がなか
ったからだだった。この分なら、夜中あたりに目が覚めて、「腹が減
った」と騒ぎ出すのに違いない。

刺身や焼き魚と違って、あらかじめ用意してある煮しめは出てく
るのが早い。それをわしわしと掻っ込み、もぐもぐと握り飯を頼張
っている、先ほど注文を取りに来た女将と常連客らしい連中との
やり取りが、聞くともなしに聞こえてきた。

「しかし良かったよなあ、ここの立ち退きの話がなくなって」

「ほんとだよ。これも、国王様が悪徳地主たちをとつ捕まえて下す
ったおかげだねえ」

それを皮切りに、ひとしきり「国王陛下の政^{まつりごと}」についての評判が

飛び交う。やれ税金を下げて下さった、だの、歩きづらかった道を整備して下さった、だの、前の戦で身寄り^{いくさ}を失った子たちのために、寝泊まりできる場所や、手に職をつけるための学校を増やして下さったおかげで、子どもの掬摸^{すり}やかっぱらいが目に見えて減った、だの……

「いやあ、あの若さで王位を継いで、おまけに外つ国人^{とびと}も同然だつたろ？ 最初はとうなることかと思っていたが……なかなかどうして、やってくれるじゃねえか」

「上下^{かみしも}との国境の警備も、前と比べてかなり手厚くなったらしいしな　これで、この国もすっかり安泰だな！」

ずずず、とリクは粕汁を飲み干した。その椀の陰で、知らず知らず笑みが浮かぶ。

(……そっか。良かったな、カイ……)

本人は「万事に不慣れで」などと謙遜していたが、見る者はやはり見てくれていたのだ。どれほどカイが頑張つて政務をこなしていたのか。どれほど「万民のため」を思い、心を砕いていたのか……

(つたく、こんなときに限って爆睡しまくりやがって)

それだけが、何とも残念だった。けれど、だからと言って、ぐっすり眠っているのを叩き起こすのも忍びない。

(あとで、ゼーんぶ話して聞かせてやろうつと)

耳の穴をくるくる、とほじくると、リクはさらにじっくりと話に耳を傾けた。

我悩む、ゆえに我

夕餉^{ゆづげ}を取った飯屋の程近くに小体^{こてい}な宿屋もあったので、そこへ逗留^{とゆう}することにした。無論、今夜は昨夜のようなわけには行かないから、泊まるのは、いつもの如く一番安い大部屋である。

部屋の隅に積んであった煎餅布団を窓際に敷き、ゴロリと横になると、リクは相部屋になった客たちに背を向けて死角を作った。懷からカイを出して、そっと布団の上に置いてやる。かすかにカイは身じろぎしたが、目はつぶったままだった。気持ち良さげに一伸びだけして、またくるりと蜷局^{とくろく}を巻く。

（やれやれ……もしかして、朝まで寝る気かよ）

もつとも、苦笑したそばから、リク自身も、ふわあ……とあくびを漏らした。ほぼ一日近く街道を歩き、王都の市中も歩き回って、すっかりくたびれ切っていたのだ。またたく間に、体が鉛のように重くなって行く。カイが起きたら一緒に湯屋に行って、今日の汗と垢とをきれいさっぱり洗い流すつもりでいたのだが、

（やっべ……無理だわ）

目が覚めたとき、カイが匂いで食べ物があるとわかるよう、その鼻先に飯屋から持ち帰った菜^{さい}を置くと、リクは、とぶん、と眠りに落ちた。

リクがすすうと寢息を立て始めたとき、黒竜が再び身じろぎし、うすく片目を開けた。まるで見計らったかのようであった。それもそのはず、カイが本当に眠り込んでいたのはティエンが来る前までで、そのあとはずっと、目を閉じたまま起きていたのである。

『おまえも、もしかしたら父ちゃんのこと、知ってたんじゃない？』

ティエンの言を聞いたリクが、そう問うてくるであろうことは、カイにも予想がついていた。そして、確かに、リクの懐刀を見たときから、彼の父親は自分の亡き長兄ではないかと思ってもいた。ただ、確信を持つまでには至っていなかった。実際にユアン・リク王太子の姿を見たことがあるティエンとは違って、懐刀以外の判断材料が全くなかったからだ。

生まれてすぐにウナバルへ送られてしまったので、長兄の顔など当然のことながら覚えていない。肖像画でもあれば話は別だったのだろうが、あいにくカムナギでは、国王のものしか描かれないのが慣例となっていた。国王そのものを神格化する、という意味合いもあったし、病死や戦死等が原因で、嫡子が何度も変わったり、今回のカイのように想定外の王子がいきなり王位を継いだり……といったようなこともままあったので、下手に「王太子」と銘打った絵は残せない、といういささか現実的な理由もあつてのことだった。

そんなこんなで、昨日、文様のことを尋ねられたときにもはぐらかさざるを得なかったし、今回も、軽々しく「その通りだ」という返事はできなかった。かと言って、「知らなかった」というのも嘘になる。それで、寝たふりをして答えること自体を回避したのであった。

だから、飯屋では、ここで目が覚めた体を装おうかなとも思っただの。ちょうど小腹もすいてきており、煮しめや焼き魚煮魚の匂いも、しきりと食欲をくすぐっていた。

ところが、目を開けようとした刹那、その食欲が一気に減退した。「国王陛下の御評判」が、耳に飛び込んできたせいであつた。

（あれは……「私の」功績などではない……）

すべては、カイが旅に出ていたこの半年の間になされたことだった。つまり、影武者を務めてくれていた兄・ティエンの手腕によるものののだ。

（私は……）

本当に、「あの」あとを引き継げるのだろうか

ティエンにしてみれば、特に他意もなく、自らにできることをしたまでなのだろう。だが、同じことを、果たして自分はなし得るのだろうか。

……否、実は「同じ」ではいけないのだ。暮らし向きが良くなれば、さらに良き暮らしを望むのが人の常。その期待に、自分は応えられるのだろうか……

（……難しい、だろうな……）

「そのような御了見で、一国の王が務められるとお思いか！」「その程度の御判断、何故瞬時にお出来になりませぬ！ 事が事ならば、一村すべてが飢えて死にかねませんぞ！」 宰相・ハクロウにも、何度……否、何十、何百度、そんな叱咤を受けたかわかりはしない。決して自分という個人への攻撃ではなく、国のため、民人のためを思つてのことだと理解はできたから、必死にそれに応えようとはするのだけれど、そうやって気負えば気負うほど、ますます頭の回転が鈍って行つた。まして、そのような折にウナバル訛りのことなど指摘されれば、さらに頭が真っ白になってしまつて……

（リクならば、きっと、そうではないのだろうな……）

数刻前、彼がとつさに見せた機転が、鮮やかに脳裏に甦る。あの判断力に加え、育ちも育ちだ。一般庶民の心の内を察することなどお手の物だろうし、それだけに、下すであろう決断もさぞかしの確なのには違いない。

加えて、「王家の嫡流」でもある　まだ不確定だとはいえ、テイエンのあの物言いから推して、恐らく、ほぼ間違いはないのだろう。

（私とは、大違いだ……）

本当は王家の血など一滴も流れてはおらず、それどころか、人外の　それも「災いのもと」であるとされる竜の血筋ですらある、この自分とは。

（やはり、彼を連れてきて良かった……）

明日にでも、リクを伴って城に戻ろう。そして、彼を、特に長兄を良く知る古い家臣たちに引き合わせ、「確かにこの方は、ユアン・リク殿下のお子様かもしれません」という声が上がれば、潔く王位を明け渡すのだ。無論、最初は不慣れで戸惑うこともあるが、テイエンを説得して自分の姿をしたまま摂政になってもらい、政界の重鎮であるハクロウと共に補佐してもらえば、リクのことだ、すぐに持ち前の才覚を発揮して、良き国王となるのに違いない。

（さすれば、この国はもっと良くなる……）

少なくとも、単に戸籍上王家につながっているというだけの理由で「無能なよそ者」が玉座を占めているよりは、ずっと、ずっと……

「……っ！」

キリキリ、と胃の腑が痛み、吐き気がこみ上げた。矢も盾もたまらず、カイは布団から、そして大部屋の窓からも飛び出した。ほとんど落ちるように路傍の茂みに飛び込み、激しく咳き込む。空腹だったのが幸いして、出てきたのはわずかな胃液のみであった。が、吐き気は一向に止まらなかった。仔竜の小さな体であったのも良くなかったのだろう、どんどん体力が奪われて行き、だんだん目の前がかすんでくる。

「ぎゃうん！」

唸り声に我に返ったのと、左肩から右脇腹にかけて鋭い痛みが走ったのが、ほぼ同時だった。

「ぐるっ、ぐるるるる……」

狩人の目になった虎猫が、じいっとこちらを見下ろしていた。痛みをもたらししたのは、その両の前肢の爪だった。黒竜の小さな両肩をしつかりと押さえつけ、地面に繋ぎ止めている。人の姿をしていれば払いのけるなど造作もないが、相手の頭ほどこしか大きさがなく、しかも消耗し切っている状態では、いかんともしがたかった。カイは、じっと相手を見返し…… ゆっくりと目を閉じた。

『殺^やるんなら、早^{はや}うしいや』

口をついて出たのは、使い慣れたウナバル言葉であった。

（そうだ…… 思えば、あそこにいた頃から私には「居場所」などなかったのだ）

そんなものなど、求めてはいけなかった。中下両国の和睦の「証拠品」。しかしながら、ひとたびその約定が破られれば、あつけない首を落とされる、まさに「捨て駒」それが自分の立場であり、「分」でもあつたはずだった。ならばいっそ、この猫に食われてその血肉となった方が、「捨てられ甲斐」だつてあるうというもの……

ふつと体が軽くなった。一瞬、人の姿に戻ったのかと思つたが、そうではなかった。

何事もなかったかのように悠然と、猫は立ち去ろうとしていた。ピン、と上げた尻尾が、ふん、と嘲笑うように揺れる。

（猫に取られる価値すらなしか、私は……）

ズキリ、と痛んだのは、果たして体の傷だけだったのか……

『おのれユアン＝カイ＝ハシム……！　よくも我が弟を……！』

今度は、半年前、とある山中で聞いた怨嗟えんさの言葉が、くつきりと脳裏に甦よみがえった。翻る銀の刃、脾肉を絶つ嫌な感触、血しぶきと臓腑の飛び散るさまも……

刃を向けてきたのは、ウナバル王の一の姫で、政略結婚によって長兄の妻となつていたユナ妃であった。

さらにさかのぼること半年前、カイは、ユナ妃の弟であり、長年の因縁の相手でもあつたウナバル王太子を斬った　ことになつてゐた。本当は、その原因となる国境紛争が起きたとき、カイは流行病に臥ふせていて、例によつて影武者として代わりに戦場に出たテイエンが、「よくもカイに無体なことばっかしやがったな！」とばかりにばっさりと斬り捨てたのであつたが、そんなことなど知らない

いユナ妃にしてみれば、カイこそが弟の仇であることに他ならない。それで、どこで聞き知ったのか、旅先までカイを追いかけてきて、親しげな素振り（ひとけ）で人気のない山の中へ誘い込み、斬りかかってきたのだ。

だから、返り討ちにした。

あのときは、それもしかたがないと思っていた。国王たるもの、国のため、民のために、たとえ相手を斬っても生き延びねばならぬのだ、と。だが……

（義姉様……）
あね

仰向けのまま見上げた夜空が、ぼんやりとかすむ。

（やはり、あのとき……あの瞬間、喜んであなた様の御手にかかっておくべきだったのですね……）

ユナ妃は、「用事で北部へ行くところなのです」と言っていた。これまでは、それはただの方便だったのだろうと思っていたのだが

……

リクも、北部の出だ。団子屋の店主との世間話の中で、本人が「北部のハクトって村から来た」と言っていたのである。ということ、もしかするとユナ妃は、夫の忘れ形見の存在を知って、迎えに行く途中だったのではないだろうか。カイの義母の王太后がそうであったように、本来ならば妾腹の子など迎え入れたくはなかったのだろうが、「弟の仇」にのうのうと玉座にふんぞり返っているよりは、まだましだと考えて……

だと、するならば。

（死ぬべきだったのは、やはり私だ……）

そうすれば、リクは何の問題もなく父親の後を継げたのだ。ユナ妃も、長兄との間に恵まれた二人の姫君と共に、今も健やかに……憎きユアン「カイ」への仇討ちも見事なし遂げて、心晴れやかに過ごせていたのであるうちに……

「かん、にん……」

堪忍してな、義姉様……その呟きを最後に、小さな黒竜は、ぴくりとも動かなくなった。

ババア降臨！？ 伏魔殿への正体！！

それから、一刻（約二時間）ほど後。

「うーん……」

「ごそごそとリクは身を起こした。飯屋で粕汁をお代わりしたうえに、厠に寄らずに寝てしまったので、今頃になって尿意と便意を覚えたのだ。」

その手が偶然、菜の包みに触れた。そこで、はたと我に返る。

「あれ？ カイ……？」

包みの傍で寝ていたはずのカイが、いなくなっていた。包みを開いた形跡もない。

（あいつも、便所かなあ……）

しかし、厠にも彼の姿はなかった。おかしいな、入れ違ったのかなと訝りつつ用を足すと、リクは再び大部屋の布団に戻った。あらためて掛布団をめくり、敷布団の下まで覗いてみたが、やはり、黒竜の羽一本さえ見当たらない。

（まあ、荷物も一式ごっそり置いてあるし、そう遠くへは）

そこまで考えて、ギクリとする。

（ちょ、待て……それって、むしろヤバくね！？）

荷物の方も、リクが置いたそのまま、カイが人に戻って着替えた気配は全くなかった。ということは、彼は黒竜の姿のまま街へ出たのだ。そんな状態で、万が一、何かの加減で変化^{へんげ}が起こってしまったら……

「ちょっと出かけてくるから！」

宿の帳場に断って、リクは荷物小脇に、もう一度夜の街に飛び出した。

もう真夜中も近いというのに、相変わらず通りは人であふれ返っていた。ここに全裸の男がいきなり出現すれば、昨日以上の大騒ぎになってしまうのは必定だろう。

それに、ここは何と言つても「国王陛下のお膝元」。騒ぎを聞いて駆けつけてくる捕り方だって、みんな「本物の陛下」を見知っているはずだ。そうしたら、あつという間に正体が露見して、そのまま王宮に連れ戻されて……！！

「カイ？ カイ……！？ カーイ！！」

叫びながら、リクはその辺一帯を走り回った。けれど、反応はなかった。

（何せ、あのちっちゃえ翼だ。いくら時間が経ってるつつたつて、せいぜい二つ三つ先の角ぐらいまでしか行けねえはずだけど……）

もしかして、ティエンを呼んで、自分から王宮に戻ってしまったのだろうか。

「でも、それだったら、カイのことだ、一言ぐらいあってもおかし

くねえよな……?」

半ば自分に言い聞かせるようにひとりごちたそのときだった。横合いから、ぐいっと袖をつかまれた。そのまま、路地に引きずり込まれる。

「何だよカイ、どこほっついてうおああーっっ!？」

最後まで言えなかったのは、心底からぶったまげたからだった。

そこにいたのは、カイではなく。

……というか、男ですらなく。

(な、んなの、こいつ……)

ありとあらゆる化粧品で極彩色に塗りとくられた顔。

でっぴりした腹に、ヒョウ柄の派手な着物。

活火山と見まごうほどに高々と盛り上げた真っ金金の髪

(何これ、新手の化け物!?)
もん

それとも、悪魔の化身か何かだろうか……!?

死んだ母に「お年寄りのことは、ちゃあんと尊敬するんだよ」と教え込まれて育ったから、女性の年配者の呼び方はたいてい「おばあさん」。どんなに親しくても、せいぜい「ばあちゃん」止まりだったのだが、今回に限っては、そのどちらでも呼べそうにない。

(ほんつと申し訳ねえけど、マジ「ババア」としか言いようねえわ……)

「ど派手ババア、ここに降臨!?」 そんな瓦版の見出しが浮かびそうな勢いである。後光ならぬ金ぴかの髪の毛の光で、頭がくらくらしそうだ。

しかも、「恐怖体験」は、そこで終わりではなかった。

「……ク……」

わなわなわな、と唇を震わせたかと思うと、ババア もとい老婆は、いきなりリクに抱きついてきた。そして、おんおんと声を上げて泣きじゃくり始めたのだ。

「おおお、リク…… ユアン!! リクう~~~~っ!!」

「……はい!？」

穴のあくほど、リクは相手を見つめていた。

(何こいつ? 何で俺を「リク」って……)

一瞬混乱しかけたところで、ん?と眉をひそめる。

「あの、人違いなんじゃ……俺、確かに『リク』ですけど、ただの『リク』ですから! 『ユアン』?とかいうのはくっついてませんから……!!」

肖像画が描かれないのと同じ理由で、王子たちの名前も世間には公表されていなかった。国王となって初めて「御名」が明らかにされ、学校でも教えられるのである。王子たちの側近にだけは名が知らされてはいたものの、その彼らでさえ、本当に名を呼ぶ必要があ

ると認められたとき以外は、「王太子様」だとか「二の君（第二王子）様」だとかといった呼び方をするよう厳しく教育されていた。つまり、リクにとっては、「ユアン＝リク」とは、

（つか、誰だよそれ……）

という存在にすぎなかったのである。もう少し平静であつたなら、「ユアン」がカイの名前の一部と一致していることに気づけたかもしれないが、何しろ、妖怪変化のような生き物にがちりと抱きつかれたままなのだ、とてもそこまでは気が回らない。

そんな時間が永遠に続くのではないかと暗澹たる気分にとらわれ始めた頃、ようやくバタバタバタ、と別の人間の足音が響いた。

「姫様……姫様っ!!」

姫様？ 思わずきよろきよろとリクはあたりを見回した。無論、絵草子に出てくるような可憐で楚楚とした「お姫様」を想像してのことだ。が、そんな人物はどこにもいなかった。代わりに、白髪をびたりと七三に撫でつけ、針金のように細い体を渋茶の上下衣で包んだ老翁が、慌てふためいた足取りで駆け寄ってくる。

「ああ、申し訳ありません！ 姫様が失礼なことを」

「……は？」

ぎょっとして、リクはいまだ自分に抱きついていてる老婆を見直した。

「あの……姫様って」

「はい、その御方にございます」

何の迷いも見せず、老爺は肯定した。

「確かに、そう呼びするには畏れながらいささか臺^{とう}が立ちすぎて
いるくらいはございますが、十代の頃から執事としてずっと御傍に
お仕えしております私にとりましては、やはりこの御方は『姫様』
にほかなりませぬので」

「そ、そう、っすか……」

としか返しようがなく、リクは、あはは、と引きつった笑いを浮かべた。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

「息子さんを亡くされた……?」

「ええ、三年前の流行病で」

ドウタクと名乗った老爺は、牛車を御しながら応じた。その横に
リクが座っているのは、後ろの座席にどっかりと鎮座ましましてい
る「姫様」が、どうしてもリクを屋敷へ連れて行くのだと言って聞
かなかったからであった。

「そして、あなた様は、そのお坊ちゃまの若かりし頃に大変そつく
りでいらっしゃるのです。ですので、姫様は、お坊ちゃまがこの世
に甦^{よみがえ}って来られたかのように錯覚してしまったのでしょうか。」

聞けば、お名前もよく似ていらっしゃるとのこと、これも何かの
御縁かもしれませぬ。私からも、お願いいたします。今夜はぜひ私
どもの屋敷へお泊まりになり、明朝、お宿の方に戻られては……お

召し物も随分と汚してしまっただけです。お洗濯もさせていただきますし」

お宿の方にはこちらからご連絡させていただきますので、お友達が戻られても大丈夫だと思いますよ、と付け加えられれば、そうですね、と答えるしかないだろう。本当は「ちゃんと『戻られ』るかどうか」自体が気になってならないのだが、この流れでそんなことを口にすれば、「だったら、お友達も捜してお連れしましょうか」などという話になりかねない。その結果、どういうことが起こるか……少なくとも、吉報がもたらされるとは到底思えなかった。

（ごめんな、カイ……朝には絶対帰るからさ）

心でそつと謝ると、リクはその申し出を受け入れた。

屋敷は、王都の西の端の山中にあった。

「では、妾は部屋着に着替えてくるゆえ」

どっしりした腰を振り振り、「姫様」は早々に自室へ消えた。

「さ、リク様も御召し替えを」

ドウタクに促されて、リクも、相手のあとについて歩きだした。その口から、程なく感嘆のため息が出た。

（しっかし広えなあ……厠が最低十か所はなきゃ、確実に漏らしちゃうんじゃない？）

おまけに、ドウタクの話では、ここは「姫様」の実家の別荘で、

もとは、王都の中心近くの、もっと広くて立派な屋敷に住まっていたのだという。

「ところが、お坊ちやまが亡くなられ、そのあとを継いだのは、姫様にとつてはなさぬ仲の……それで、姫様は、その者に追い出されるような形でこのような田舎に」

本当に、お坊ちやまさえお元気であつたなら……悔しげにそう呟いて、ドウタクは目頭を拭った。それから、はっと居住まいを正し、面映ゆげに付け加えた。

「ああ、申し訳ございません！　あまりお坊ちやまの在りし日を思い出させてもと、姫様のいらっしやる前では極力このような話題は避けているのですが、その分、ということなのでしょうが、今のうちに姫様が御傍にいらっしやなくなると、つい本音が出てしまつて……」

さて、ここから先が、お客様のお泊まりになるお部屋になります。今宵はこの一番手前のお部屋へお泊まり下さい。お召し替えもこちらでお願いいたします。脱いだお召し物は、扉の傍の籠にお入れ下さい。新しいお召し物は、部屋にあるものどれでも好きなものをお選びになつて構いません。では、私はお茶のしたくがございますので……頃合いを見て、お迎えに上がります」

「は、はあ……」

戸惑いながらもうなずくと、リクは部屋に入つた。言われた通りに脱いだ着物を籠に入れ、衣裳戸棚を開けたとたん、その表情が、ますます戸惑いの色を帯びる。

（何だよ、この着物……）

「姫様」などと呼ばれていて、これだけの屋敷に住まっ
ていて、しかもそれが「田舎の山荘」だというのだ、それなりの家柄なの
だろうとは思っていた。

（けど……これって、ぶっちゃけ王侯貴族の服じゃんか）

数刻前、カイに扮したティエンが全く同じ形の服を着ていたの
を見たばかりだから、間違いはない。それに、寺子屋や中等学校で
見た歴代国王の肖像画でも、王たちは皆、この手の衣裳を身に着
けていた。

ちなみに、この肖像画、いまだに先代王のものまでしか描か
れていない。王太子と国王の両方が立て続けに亡くなったので、
その分、喪に服す期間も延ばしたからだと聞いている。リクがカイ
の正体に気づくのが遅れたのも、そのためだったのだが……

（……っと待てよ？ カイって言やあ……）

彼が妾腹なのにもかかわらず王位を継承することになったのは、
王太子が亡くなり、ほかの王子たちも既に鬼籍の人となっていたか
らだった。一方、この家では、「姫様」の息子が亡くなったために、
妾腹の子が後継者になったという。これは、単なる偶然なのだろ
うか？ それとも……

ウソだろマジかよ信じらんねえ!! 再び

「……って、ふんどし一丁で悩んでてもしょうがねえ、か」

あとでさりげなくドウタクに探りを入れてみよう、と決めて、リクは衣装戸棚の中では一番地味そうな紺無地の服を身に着けた。

（えへへへ、ちょっと偉くなったみてえな気分？）

こんな服装ができることなど、今後の人生ではまずあり得まい。だったら、せいぜい楽しまねば……そう思い直して、鏡の前で役者のように格好をつけたり、くるりと回ったりしているうちに、コンコン、と部屋の扉が叩かれた。

「お支度は整いましたでしょうか？」

そう言いながら入ってきたドウタクは、リクの姿を見るなり絶句した。

「ほ……本当に、よく似ておられる……」

しばしの間を置いて、ようやくそう呟くと、まるで気分を切り替えようとするかのようにそそくさと汚れ物の入った籠を持ち上げる。ところが、そこで再び彼は唸った。

「な、何と……!」

「あの……どうかされましたか？」

「どうかしたところのお話ではございません!」

今度は間髪入れずにドウタクは答えた。そして、やけに厳しいまなざしで、じっとリクを見据えた。

「正直にお答え下さい　この籠の中の懐刀、どちらで手に入れられたのです？」

「へ？　……あ！」

言われて初めて、リクは脱いだ服と一緒に懐の中身まで籠に入れてしまっていたことに気が付いた。

「いやあ……すみません！　俺、こんな立派な部屋に入るの初めてで、すっかり緊張しちまって……親父の形見なのに、すっかりそれ、洗濯に出しちまうとこだった」

無論、場を和ませようと、あえて冗談めかして言ったのである。しかし、ドウタクの表情は変わらなかった。

「お父様の形見……それは、まことなのでございますね？」
「え？　あ、はい……」

わけがわからずうなずくと、さらに畳み掛けるように聞いてくる。

「それで、あなたさまのご出身は」
「……は？」

ますますわけがわからず、リクは目を白黒させた。

「ご出身、って……えーっと、北部のハクト村　」

「その前は」

「はい？」

「先祖代々、ハクト村とやらに住まれていたわけではないのでは？
お母様は、どちらからいらしたのです」

「母ちゃ いや、母、ですか……？」

何でそんなことまで詮索するんだ、とは思ったものの、答えねば
次に進ませてもらえそうにない。

「えーっと……そういえば、俺が生まれるちょっと前まで、もっと
北の、カ……カノ……？」

「カノへ村、ではないですか？」

「ああそうそう！ ……って」

さすがに、疑いの眼を向けざるを得なかった。

「ヒツジさん。何で、そんなこと知ってるんです」

「……シツジ、でございます」

律儀にドウタクはリクの北部訛りを訂正した。それから、だしぬ
けに籠を放り出し、リクの前に跪いた。

「よくぞお戻り下さいました、新王陛下！」

「しん、おう……！？」

ナニソレ、オイシイノ？ そんな埒もない思いが頭に去来する。

「あ、あの……言っている意味が……」

「そのまま、にございます」

跪いたまま、ドウタクは応じた。

「あのような格好で街に出られていることが知れるといろいろと面倒ゆえ、あえて口をつぐませていただいていたのですが……姫様こそ、前王妃様（おきのぎ）にして、現在の王太后陛下。そして、あなた様は、王太后陛下の実のお孫様。今は亡き王太子ユアン＝リク殿下の忘れ形見に間違いございません！ その懷刀と、御母君の王太后陛下でさえ見間違われたほど殿下そっくりのお顔が何よりの証にございます……！！」

沈黙が流れた。リクは、相手の言葉を二回、心で反芻した。そして、三回目の反芻が終わった瞬間、素っ頓狂な叫びを上げた。

「嘘、だろ……！？」

*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*

……嘘では、なかった。

それから間もなく、応接間に通されたリクは、一通の書状を手渡された。

『父上様、母上様。』

私は、もう長くはないでしょう。世を去るにあたって、唯一の心残り、ユナとの間に男子をもうけられなかったことです。これで王家嫡流の血筋が絶えてしまうかもしれないと思うと、お二人にはまこと申し訳なく、胸ふさがれる心地であります。

しかし、実を申さば、全く希望がないというわけではありません。父上はご存じの通り、そして母上も、もしかしたらお聞き及びかしれませぬが、私は十五年ほど前、まだユナと婚姻する以前に、北

方戦線はカノヘにて、村の娘イツチとの間に契りを結びました。この結果、子ができていて、それが男子であつたとするなら……

イツチには、形見だと言って私の懐刀を渡し、もし男子が生まれし折には私の名の一部を取って「リク」と名付けよと記した書付を預けてあります。私に万一のことあらば、イツチを捜し出し、男子が生まれていれば、何卒この子を私の後継とお定め下さい。イツチのことも、側室待遇で快く王宮に迎え入れていただきたく……

お二人には、あれこれと思うところもおありかとは存じますが、王家存続と繁栄のため、曲げてお聞き届け下さりますよう、伏してお願い申し上げます。

大陸歴907年冬 カムナギ国王太子ユアン「リク記す」

紙には、リクの懐刀の文様と同じ杏と鷲の透かしが入っていた。それに何より、本来なら王太子のような立場の者が知るはずのない母の名がはつきりと記されていたことが、その書状にある「男子」が紛れもなくリク自身であることを物語っていた。

「これは、昨年末、王宮内で大掃除が行われた際に、殿下の使われていた御机の文箱の中より出てきたのです。そこにも書かれてあります通り、殿下と奥様のユナ妃殿下の間には姫君様しかお生まれにならなかったもので、恐らくは、病を得られた際に、お世継ぎのご心配されてお書きになられたものの、ご両親様にお渡しになれるには至らなかったものでございましょう」

そう説明して、ドウタクは目頭を押さえた。

「私どもは、狂喜いたしました。これも先ほど いろいろとぼかしながらではございますが お話ししました通り、今の国王陛下は王太后陛下とはお血が繋がっておられませんで……なさぬ仲の常にて、どうしてもわだかまりは避けられず、王太后陛下は新国王

の即位式後間もなくお城を出られたのです。ご主人様を亡くされたユナ妃殿下も、そんな王太后陛下を気づかれ、姫様たちと一緒にこのお屋敷に移られて……

ですが、もしユアン・リク様の直系の男子が見つかり、ご遺言通り、今の陛下に代わってその男子が王位を継ぐことになれば、お二人は、晴れて再びお城にお戻りになることができます。そこで、まずはユナ妃殿下が、御自らあなた様のお母様に会いに行かれたのです。ところが、慣れぬ北の地で無理でもされたのでしょうか、しばらくして病にて身罷られたという知らせが……

それで、もはや希望はついたものとはかり思っていたのですが……まさか、このような形であなた様にお会いできるとは！」

これも亡きお父君のお引き合わせでしょうか、と言い添えて、遂によよと泣き崩れたドウタクを、呆然とリクは見つめた。

（俺が……この俺が、国王に、だって……？）

カイに出会う前だったら、きっと「すっげえ……究極の大出世じゃん！」と単純に喜んで、さつさと首を縦に振っていたことだろう。けれど……

（あいつみたいに強くて真面目で賢くて立派なヤツだって、ああして何もかも投げ出して旅に出たくなっちまうぐらい大変な稼業なんだろう？　王様って……）

それを、カイほど腕が立つわけでもなく、賢いわけでもなく、王宮での暮らしも、王族としての立ち居振る舞いも、全く、かけらさえも知らない自分が、ただ血筋が直系だというだけの理由で、ましてやカイを押しつけてまで……

(や！ いやいやいやいや……！！)

母が生きていたら、きっと横っ面のひとつもひっぱたかれて、こう言われるだろう。

『人にはね、「分」ってもんがあるんだよっ！！』

というか、だからこそ、母はリクに父のことを何も知らせずにいたのではないか。庶民の子として育った者がいきなり分不相応な立場になっても、何もいいことなどありはしないから、と……

(つつーか、だいたい、そうなたらカイはどうなるんだよ！？)

物心ついたときからウナバルで人扱いすらされずに育ち、やっと帰ってきた祖国でも苦勞続きで……そんなカイを、また別の場所へ追い出そうというのか。

(まあ、全く行き場がないってわけじゃないんだろっけどな……)

国王という身分がなくなれば、クウとだって堂々と一緒になれるだろうし、ティエンと一緒に暮らす手だってある。が、だからと言って、「追い出された」という記憶まで帳消しになるわけではない。しかも、その後釜に座るのは、事もあるうにリクなのだ。

『俺が出会ったのは、今の「このおまえ」なんだよ。真っ黒で、手のひらにのっかるくらいちんまりしてて、たまあに人に変化しちやあ厄介事を起こす、ヘンな竜 とりあえずは、そんでいいじゃねえか』

そう言って、あるがままの自分を受け入れてくれたはずの相手。

初めてできた、掛け値なしの友だとはかり思っていた相手　その相手に、手のひらを返されたように自分の地位も居場所も奪われてしまったら、カイはどれほど傷つくだろう。どれほど哀しい思いをするだろう……

すれ違う思い、暴走する思惑

「無論、事が事でございますので、すぐに諾とおっしゃって下さいとは申しませぬ。ただ、お祖母様のお気持ちと我々お付きの者の思いもどうか御考慮に入れていただいて、何とぞ前向きに……」

そう言い置いてドウタクが去って行ってから、リクはまだ、座っていた長椅子を動けずにいた。

（つつーか、今の物言いからしたら、「嫌だ」つつー選択肢はなしってことじゃねえかよ……）

こんなことなら、ここに来ること自体、何が何でも断るんだった後悔が心を去来したそのとき、そっと肩に手が置かれた。

「済まぬな、ドウタクが無理を言うて。そのように困らせることになるのなら、招待などするのではなかった……」

「いえ」

応じかけて、リクは目を瞠った。

その声には、はつきりと覚えがあった。でつぶりとした腹回りにも。だが、そこに立っていたのは、あの派手派手な物の怪のような「姫様」ではなかった。落ち着いた藤色の地に、裾の部分だけ銀糸で季節の花々が刺繍された衣。ゆるやかにひとつに結ばれた、ふんわりと癖のかかった銀髪。薄化粧を施した柔和な顔……リクの反応を見ても気分ひとつ害した様子もなく、にっこりと微笑んださまは、まさに「貴婦人」と形容するにふさわしかった。

「あのような面妖な格好、妾^{わらわ}として好きでやっておるのではないのじ

や。ただ、ほかの歴代の王妃と違って、妾は外^とつ国の王家の出ではなく、この王都で生まれ育ったゆえ、存外、市井^{しせい}に知り人も多くての。そういった者と万が一にもすれ違うのを心配したドウタクが、あのような変装を考え出して……気持ちばまことありがたいのじゃが、化粧のしかたと衣や鬘^{かつら}の選び方には、正直もちつと工夫をしてくれたら良いのにも思わぬではないの」

リクの隣に腰を下ろしながら、もう一度くすりと王太后は笑った。それから、ふと表情を引き締め、声を潜めた。

「ドウタクの話じゃがな……断って一向に構わぬのじゃぞ」
「え？」

耳を疑って、リクはまじまじと相手を見直していた。

「で、でも、ドウタクさんは……」
「あれは真面目な忠義者なのじゃが、少々一本気すぎるところがあつての。今回のことも、当人は、妾のためを思っているつもりなのであろうが……」

ふう、と王太后はため息をついた。

「妾は、決して五世殿　そなたらが今『国王陛下』と呼んでおるユアン・カイ・ハシム五世殿に追い出されたわけではない。妾の方から、顔を合わせるのを遠慮したのじゃ。なさぬ仲とは厄介なものでな、顔が合えば、余計なことがいつ口からこぼれ出るとも限らぬ現に、恥ずかしながらその昔は、そのせいで五世殿にもその御生母にも随分と酷い仕打ちをしてしもうた。ゆえに、二度と同じ轍を踏まぬよう、あえて離れて暮らし、一切互いに関わらぬ道を選んだのよ。」

しかし、妾がどんなにそう言うても、ドウタクは一向に聞く耳持たず、『たとえそうであったとしても、引き止めるのが当たり前と言うもの。それをしなかったのだから、やはりこれは五世殿の落度である』の一点張りで……それゆえに、そなたが現れたことで、これで五世殿に一矢報いられるとすっかり舞い上がってしまったのであろう。

じゃがの、妾は、何もそなたに、何が何でも五世殿の代わりに王位についてほしいとは願うておらぬのじゃ。五世殿が悪政を行っているというのならばいざ知らず、我が国は現在、内外共に近年稀に見るほど安定しておる。そのようなときに、いきなり上に立つ者が替わっては、かえって世の乱れに通じるといふもの。それに何より、そなたは、今の今まで何も聞かされることなく、平民の子として自由闊達に過ごしてきたのであるう？ そんなそなたをせまい王宮に閉じ込め、望んでもおらぬことをさせるなど……実の祖母なればこそ、孫にそのようなことを強いとうはないのじゃ」

鳶色の瞳が、ひととリクを見つめた。

「しつこうて申し訳ないようじゃが、ほんによう似ておる……今、いくつになる」

「へ？ あ、えっと……数え十八、ですが」

「そうか……そなたの父がそなたのお母御と出会ったのは二十歳のときであつたから、だいたい同じぐらいの年頃じゃな。北方戦線で深手を負い、お母御に助けてもらうたのが縁であつたらしい。実は既に祝言も挙げておつてな、本人としては、そのまま平民となつて添い遂げるつもりであつたようじゃ。ゆくゆくは一国の王となる者にそのようなわがままなど許されぬと、無理やり王宮へ連れ戻したのじゃが……どのみち王位も継げぬ運命さだめだったのじゃ、いっそ望みに通りにさせてやれば良かったのかもしれぬのう。さすれば、親子三人、今も平穩無事に暮らせていたかもしれなかったものを……」

懐から手巾を取りだし、王太后はそつと目元を拭った。そうか、とリクはようやく得心した。その後悔をずつと胸の内に抱えていたからこそ、このひとは、こんなことを……

「あの……ありがとうございます」

少し考えてから、リクは言った。

「俺、ほんと言うと、父ちゃ 父には捨てられたんだつてずうつと思つてて、心ん中じゃ、憎んでさえいたんです。こうして王都^{みやこ}に出てきたのも、商売を始めて、大成功して、父に目に物見せてやろう、なんて思いがあつたからで……

でも、さっきの手紙を見て、王太后様のお話も聞いて、決して父は俺や母を見捨てたわけじゃなかったんだなつてわかつて……嬉しかったです、すごく。だから、ほんとなら、父の思いに応えなきゃならないのかもしれないんですけど」

「わかつておる」

皆まで言わせず、王太后は深く首肯した。

「それに、商売をするというのもなかなか良い考えじゃぞ。それこそ、血筋も血筋じゃからの」

「血筋……？」

「妾の父は、もとは両替商だったのよ。それが、先々代の三世陛下に商才を認められて、勘定方を任されることとなった。ところが、平民の立場では国政に携われぬゆえ、特別に貴族に列せられたのじや。実際、妾も、幼き頃は、商家の娘として街なかを普通に遊び回つて育つたものよ。縁あつて先代王に嫁いだ際に、言葉づかいも立ち居振る舞いも、姑であつた当時の王太后様にしごかれて徹底的に

矯正されたゆえ、今では妾が平民の血筋であると思う者などほとんどおらぬがな」

「そうだったんですか……」

確かに、あのカイ以上に時代がかった喋り方だとは思っていたが、それは、先々代の王家で使っていた百年近く前の言葉を強制的に仕込まれた結果だったのか……

そう考えると、この王太后も、カイに負けず劣らず苦勞が多かったのかもしれない。もしかすると、突然現れた側室とその子であるカイに「酷い仕打ち」とやらをしてしまったのも、それゆえだったのではあるまいか。自分はこんなに大変な思いをして王妃を務めているというのに、横合いから「おいしいところ」だけを掻っ攫って行って、という思いに駆られてしまつて……もちろん、だからと言って、それが許されることなのかと問われれば、是非もないわけなのだが。

「とまれ、そなたには王家の血だけでなく、王都随一の大商人の血も流れておるのじゃ。もしそなたがそちらの才を受け継いでおつて、自身でもたゆまず努力を重ねれば、曾祖父様の再来になるのも夢ではないかもしれぬぞ」

自分から話を元に戻すと、王太后はつと立ち上がり、部屋の隅に置かれた書き物机に移動した。慣れた様子で紙と筆を用意し、さらさらと何事か書き付け始める。

「あの、それは……」

「紹介状じゃ」

「紹介、状……？」

「親族は、今も城下で商売をやつておる。妾の立場が立場ゆえ、中には寄合の取締役だとか称して幅を利かせている者もあるらしいか

ら、そなたが何を始めるにせよ、必ずや挨拶に行くことになるう。
その折に、多少なりとも助けになればと思つてな　そなたにして
みれば、このような手など借りずとも良いと言いたいところじゃろ
うが、使える物は賢く使うのも商いの極意のひとつぞ」

一瞬だけ「商人の娘」^{あきんど}の顔に戻つてにんまりと口角を上げると、
王太后は、書き上がった紹介状にふう、ふうと息を吹きかけた。完
全に乾いたところで、厚手の紙に包んで封をする。

「さ、これを持って、早々にここを去るが良い。事情が事情ゆえ送
ることもできぬが、くれぐれも気をつけてな」

「ありがとうございます！」

押し戴くようにリクはそれを受け取り……懐にしまおうとしたそ
のとき、手に固いものが触れた。この応接間に来る前に、籠から出
して隠しに戻した父の形見の懐刀であった。

「……あの、これ」

書状と入れ替わりにその懐刀を引っ張り出すと、リクはそれを王
太后に差し出した。

「俺は、もう持つてる必要ないんで」
「持つていて良いのか？ ……妾が」

王太后の両眼に驚きが宿った。ややあつて、それはうるうるとし
た光に変わった。まるで我が子ユアン・リク自身であるかのように
ぎゅうつと刀を胸に掻き抱くと、またしても王太后はおんおんと号
泣した。

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

それから間もなく、リクはこつそりと客用寢室に戻った。

もう王太后の前に出ることもないのだから、畏まって王族服を着ている必要もない。荷物の中にあつた洗い替え用の普段着に着替えると、王太后からもらった書状と銭の入った巾着袋だけを懷にしまつて、再び忍び足で廊下に出た。雨合羽だとか、カイの着替えだとかも置いて行くことになつてしまつが、ドウタクに黙つて密かに出て行くことを考え、動きやすさを最優先したのだ。

（ま、たいていのもんは金さえ持つてりやまた買えるんだし、カイのことなら、お城に帰るまでずっと竜のまんま懷に入れといてやつてもいいんだし……）

街へは、多少遠いがほぼ一本道だと王太后から聞いていた。ならば、一晚中歩き続ければ

「……どこへ行かれるのです、リク様」

ひんやりした声が呼び止めた。げ、と硬直してリクは立ちすくんだ。

「や、ちょ、ちよいと、かわや厠に」

「そんな巷にでも出る格好をなされて、ですか」

さらに冷ややかに、ドウタクは指摘した。その声音が、一転、低くドスの利いたものになる。

「勝手なことをされては困るのですがね」

どこかで見たような……と思ったら、芝居によく出てくる悪代官の顔つきだった。その顔つきのまま、相手は何気ない様子で手を伸ばし……

「……がはっ！」

みぞおちを突かれたのだ、とわかったのは、腹を抱えてうずくまったあとだった。

（何だよ、こいつ……ジジイとは思えねえ攻撃りよ　　）

心中での突っ込みが終わらないうちに、今度は首の後ろに手刀が炸裂する。

「……っっ!!」

声にならない呻きを上げて、リクは床に転がった。すうつと暗くなって行く景色の彼方で、これでもか、というほど冷酷な薄ら笑いが閃く。

「あなたには、ぜひとも王位を篡奪^{さんだつ}していただかないと。王太后陛下のためにも、そして……この私の名誉回復のためにもね」
「なっ……」

こいつ、何を　　そう思ったところで、完全に目の前が真っ暗になった。

戻れない！

窓から日の光が差し込んで、ティエンの顔と、銀色に戻った髪を照らした。

「ん……もう朝か……」

ぼんやりとした眩きと共に、まぶたの奥から赤い瞳がゆっくりと姿を現し……

「やべっ……！」

叫んで、ティエンは跳ね起きた。昨夜、最後にカムナギの王都に行き、何百里もの距離を飛んで、このヘキギョク王宮へ戻ってきたところで、とうとうドツと疲れに襲われた。そのまま寝台に倒れ込み、「そうだ、寝る前にもう一度あいつらの様子見ないと」と思っ……思っただけで、何もせずに爆睡してしまったのだ。

（まあ、一晩だけのことだし、たいしたことは起こっちゃいねえだろうが……）

半ば自分に言い聞かせながら、首にかけた小さな袋を引っ張り出す。銀地に紺の市松模様の入った縮緬の袋で、もともとは亡き母が守り袋として作ってくれた、いわば形見の品であった。今は、そこに爪ほどの大きさの水晶玉をいくつも入れている。そのうちのひとつを取り出し、ふっと息を吹きかけると、たちまち手のひら大に膨らんだ。カイとリクの姿を念じながら、透明な球体に気を送る。こうすることで、本当に見たいものだけを、確実に映し出すことができる。

はずだった、のだが。

「う、そだろ……!？」

球体の中には、この部屋の景色が透けて見えていただけだったのである。

（まさか、疲れすぎで神通力出なくなっちまった……!？）

恐る恐る、念ずる対象を変えてみる。すると、今度は、既に起き出して甲斐甲斐しく朝餉の支度をしているクウと、まだ寝台ですやすやと休んでいるカイの婚約者・ユイファの姿が、いずれもはつきりと映し出された。ということは、神通力そのものに問題が起こったわけではないのだ。

（だとしたら……何であの二人は映んねんだよ!？）

考えられる理由は二つ。水晶玉が映し出せる範囲から出てしまっただか、ティエンの神通力を凌駕するほどの何らかの力を持った者に、どこかへ拉致されてしまったか。だが、千里四方が見渡せるのだ、前者である可能性はまずないだろう。

（とすると、拉致説濃厚ってか？ ……つつーか、まさかあのクソ親父の仕業じゃねえだろうな）

決してあり得ない話ではなかった。父・竜神王は、カイが血を分けたもうひとりの我が子であることをいまだに知らず、「憎き^{にく}人^{ひと}族のひよっ子王」だという認識しか持っていない。それゆえに、隙あらばカイを亡き者としてカムナギを我が物にしようと狙っているし、

一度など、実際に刃を向けたことさえあったのだ。その折には、カイもまだ相手が実の父親だとは知らず、全力を振り絞って戦ったので、今も竜神王の左の目には、カイの短剣に刺された傷跡がくつきりと残っている。

（ただ……）

あの父のことだ、もし本当にそんなことをやらかしたのであれば、眠っているティエンを叩き起こしてでも、意気揚々とその旨報告してきたはずだ。

（ってことは、幻術が使える別の誰か、か……？）

となると、それはたぶん「反・ハシム五世派」の者なのに違いな^{はかじ}い。自分たちの陰謀が万が一にも露見しないよう、特殊な結界を張って、その中に二人を誘い込んだのではないだろうか。もちろん、その目的は、カイの命を奪い、リクを「新王・ハシム六世」に仕立て上げること……

（だとしたら……こうしちゃいらんねえ！）

急いでティエンは窓辺に寄った。まずは、昨日同様、風に姿を変えて、一路カムナギへ向かおうと思ったのだ。

ところが、窓を開け放ち、頭に触れようとしたそのとき、とんとんと扉が叩かれた。

「陛下。お目覚めになられましたでしょうか？ 上^{かみ}（つ国）の国王陛下が、朝餉を一緒にと……」

「……げ」

あまりの間の悪さに、ティエンは露骨に顔をしかめた。けれど、舅殿のお招きとあれば、たとえ体調が悪かったとしても断るわけには行かない。つまりは、「ちょっと腹具合が悪いので廁に……」とか何とかごまかして……という手も使えない、ということだ。

「わかった。すぐ参る」

白竜の代わりに黒髪黒目のユアン「カイ」ハシム五世に変化^{へんげ}すると、ティエンは身支度を整え始めた。はるか彼方のカムナギに心を残しつつ。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

だが、本当は、ティエンはもっと竜神王を疑ってかかるべきだったのかもしれない。そうして、水晶玉を通じて相手に問い合わせてみるべきだったのだ。そうすれば、少なくともカイの居場所だけは判明し、一緒にリクを助けに行けたかもしれないからだ。

「……きゅっ!？」

目を開けたとたん、カイは悲鳴を上げて硬直していた。

どうやら、傷の痛みのでいで、いつの間にか気絶していたらしい。そこを、運良く救われたのだろう。よく見ると、傷もきれいに手当てされ、寝心地の良い寝台に寝かせてまでもらっている。

……のは、良いのだが。

（何故、その「救いの神」が、よりによって……）

豪華絢爛な細工の施された天井にまで届きそうな巨大な体。

立派な顎鬚がたくわえられた、青銅色の角張った顔。

たてがみ鬣の如く長い黒髪の間に見える、緑青色の二本の角。

恐らく前の対決でカイにつけられた傷跡を隠すためなのだろう、真っ黒な眼帯に覆われた左の目

どう見てもそれは、「竜人体」とでもいうべき姿となった竜神王の姿にほかならなかった。天空にあると伝えられし竜の国の帝王であり、カイの本当の父でもある男……

一方、カイといえば、いくら半分は竜の血が流れているとはいえ、今現在の立場は紛れもなく「人族の王」であり、竜神王にとっては「敵国の将」でもあった。おまけに、相手は、よもやカイが半人半竜で、かつ我が子でもあるなどとは夢にも思っていない。どこるか、「生意気にも自分に真っ向から立ち向かい、左目を傷つけました不屈き者め……！」と、新たな憎悪まで燃やしているかもしれないのだ。

（そんな、いわく因縁ありすぎな私を、どうして　　）

そう思いかけて、カイは、自分がまだちゃんまりとした竜体のままであつたことに気がついた。

（ということは、彼は私をただの竜の子どもだと思つて……？）

その推測を裏付けるかのように、竜神王は、見えている方の目を、まるで孫に対する老爺の如く優しく細めてみせた。

「おお、目が覚めたか。傷が膿んで、三日三晩生死の境をさまよっておったのだぞ。どうだ、気分は？ 何ぞ欲しいものはあるか……？」

青くゴツゴツとした手が伸び、カイの鬣たてがみをわしゃわしゃと撫でる

「……きゆるっ！？」

カイは、再び悲鳴を上げていた。万が一、その手が角に触れてしまったら、自分は……！！

……ところが。

「どうした？ そのように怖がらずとも良いのだぞ」

慈愛に満ちた語りかけとともに、なおもわしゃわしゃと鬣を撫で続ける手は、確かにカイの二本の灰色の角に触れていた。

……はずなのに。

カイの体は、相変わらず、ちんまりした仔竜のままだった。

「何故だ……」

思わずカイは呟きを漏らし……次の瞬間、愕然とした。その言葉が相手に通じてしまった。からではない。その逆だった。カイの発した 発した「つもりだった」言葉は、文字通り「きゆるん……」という「音声」にしかならなかったのだ。慌てて言葉を継ぐうとするも、

「きゅっ！ きゆるきゆるきゅるっ……！？」

「おおそうか、腹でも減ったのかな。どれ、何か滋養のつくものでも作らせよう」

やはり、見事なまでに通じていない。恐らく相手の耳には、カイの声は、赤子が発する意味を持たぬ喃語（なんご赤ちゃん言葉）のようにしか聞こえていないのだろう。

（何ということだ……）

呆然と、カイは心でひとりごちた。

（私は……私は、いったいどうなってしまったのだ……！？）

我が名は「きゆるるん」!?

結局、竜神王の庇護のもと、カイはこの場　天空城にとどまることとなった。人に戻ることもかなわず、事情を説明する言葉すら奪われてしまった状態では、それ以外に選択肢がなかったのだ。

「ここは息子の部屋なのだが、今は誰も使ってはおらぬゆえ、自由にしていよいよ、きゆるるん」

今一度カイの頭を撫でると、竜神王は微笑んだ。

(そうか、この部屋はティエンの……)

思わずしみじみとカイは室内を眺め……ふと眉をひそめた。

(今、最後に何やら妙な言葉が聞こえなかったか……?)

確か、「きゆるるん」とか……

(まさかとは思うが、それは……)

嫌な予感と共に相手の顔を窺うと、至極あっけらかんとした反応が返ってきた。

「何だ『きゆるるん』、変な顔をして」
「きゆるーっ!?!」

完璧にカイは目を剥いた。

『嘘、じゃろ……！？ そげなごつい外見なりしといて、「きゆるるん」……？ あり得んがなほんま！』

驚愕と動揺のあまり、ウナバル言葉が口をついて出てしまうもつとも、幸か不幸か、それはやはり「きゆるきゆる、きゅっきゅっ」といった音声にしかならなかったのだが。

「ん？ どうしたきゆるるん。……そうか、もしかこの呼び方が不満なのか？」

ようやくカイの心中を悟ったのか、竜神王が、カッカッカッと哄笑した。

「だが、しかたがあるまい？ 『きゆるるん、きゆるるん』ばかり言うて、名がわからんのだから。かと言うて、そちにも親からもらった名があるのだろうから、こちらで名付けをするわけにも行かんだろう？」

「きゅ……」

言われてみれば、確かにその通りではあるのだが……

そんなカイの困惑をよそに、竜神王はさっさと家臣を呼びつけ、自分の食事とカイの分らしい粥の支度をさせた。

「おお、良い具合に煮えておるぞ。しかし、まだ少々熱いようだな。どれ、ふう……ふう……ふう……うむ、こんなものだろう。ほれきゆるるん、『あーん』せい」
「……きゅっ！？」

ぴきん、と音でも立ちそうな勢いで、カイは固まっていた。

「な……な……何しよんぞ貴様！？」

通じないと知りつつ、再びウナバル言葉で叫んでしまつ。相手が何をしたいのか、全くわからなかったのだ。何故、自ら粥を冷まして差し出したりなどする？ まさか、毒でも仕込んであるのではあるまいな……！？

「……何だ何だ」

粥をのせた匙を持ったまま、竜神王は苦笑した。

「だから、そのように怖がらずとも……儂を親だと思つて、存分に甘えて構わんのだぞ」

オ、ヤ……？

とたん、フツと体から力が抜けた。

（そう、か……親とは、こういうことを子にするものなのか……）

そういえば、遠い記憶の中で、ウナバルの王太子が乳母にそのよ
うなことをしてもらっていたのを見たような気がする。

……そう、「してもらっていたのを見た」だけ。

すべての者の目が自分に注がれていなければ気が済まなかったの
だろう、王太子は、乳母をはじめ、周囲の者たちがカイに少しでも
関わろうとすると、烈火の如く激怒した。だから、カイは常にほっ
たらかしにされていた。食事のときには、無造作に目の前に乳や菜
の入った器が置かれて、それでおしまい。飲むのも食べるのも、す
べて見よう見真似でひとりで覚えた。

それが、こんな年齢としにもなつて、このような形で、しかも、こんなにも慈愛に満ちたまなざしと共に、食事を与えてもらえる機会に恵まれるとは……無論、これとて所詮はかりそめの関係。何かの加減でこちらの正体がわかれれば、あっけなく霧散してしまうたぐいのものではあるうが……

「きゅ……」

こみ上げた何かと共に、ごくりと飲み下した粥は、どこか塩辛い味がした。

「おお、済まぬ済まぬ。わしが不用意なことを言つてしもつたから、かえつて親が恋しうなつたか」

いささかの外れな言と同時に、ひょいと体が持ち上げられ、相手のたなこころの掌に包みこまれた。

「よしよし、もう泣くでない」

わしゃわしゃと頭を撫でた太い指がまた角に当たつたが、依然としてカイは仔竜の姿のままだった。が、今は、それがありがたかつた。むしろ、夢なら醒めないでくれとすら思つた。

「……おや、眠うなつてきたか」

おとなしくなつたカイを見て、竜神王はまた何か誤解をしたようだった。

「良い良い。寝つくまでちゃんと抱っこしておるゆえ、何も心配は要らぬぞ」

ダッコ……？ 怪訝に首をかしげたとき、体が相手の胸元に押しつけられ、ぎゅっと抱きしめられた。

（なるほど、親が子をこのように抱擁することを「ダッコ」と称するのか……）

そんなことも知らないほど、その手の経験とは縁遠かったカイであつた。

（しかし、何やら不思議な気分だな……）

抱擁されたという経験自体は、ないこともない。各国要人との挨拶にはこの行為がつきものだし、ティエンにも、落ち込んだときなどに、何度か肩を抱いて慰めてもらったことがあつた。

が、今覚えている感触は、そのどちらとも微妙に違う。あたたかくて、心地良くて……強いて言えば、懐の中に通ずるものがあるだろうか。ただ、懐がふんわりと包み込むような心地良さなのに対し、こちらは、がっしりと支えられているという安心感に根ざした心地良さ、というのか……

「思い出すのう……ティエンのやつも、かつてはこのようであつたわ」

問わず語りの呟きが降ってきて、あ、とようやく思い当たる。

すると、これが。

これが、親の 父親の……

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

次に気づいたときには、室内に日が燦々と差し込んでいた。心地良すぎて、いつしか本当に眠ってしまっていたのだ。

執務にでも出かけたのか、竜神王の姿はなかった。それを幸いに、カイは布団を深くかぶって自分で角を叩いてみた。けれど、相変わらず微塵の変化も起こらなかった。

（本当に、どうということなのだろう……）

天意というものがあるのならば、何のために、自分にはこのような試練が……

体の痛みはほとんど引いていた。カイは恐る恐る翼を動かし、飛べると認識できたので、室内をあちこち見て回った。

ティエンが暮らしていたときそのままの状態であるのか、衣装をしまつてある戸棚には、彼のものと思われる王族服が、きれいに洗濯された状態で掛けられていた。背の方に翼と尾を出す穴が開いているところがいかにも竜族の着物といった趣だが、仕様自体は詰め襟の上衣と細身の長袴の組み合わせで、大きさも含めて、カイが普段着用しているそれとさして変わらない。もし人に戻っても、これを借りれば何とかしのげるだろう。

続いて目に留まったのは、壁一面にしつらえられた本棚だった。

（何なのだ、この蔵書の多さは……！）

しかも、帝王学はもちろんのこと、政治学、経済学から、民俗学や、カムナギを含む、竜族にとっては外^とつ国にあたる国の本まで、

実に多岐にわたっている。

うんうん唸りながら、適当に何冊かを引つ張り出して見たのだが、どれにも確かに読んだ形跡があった。紙の端の部分が折ってあったり、重要な部分に線が引かれてあったり、時には細かい書き込みがあったり……すると、これらは決して「書棚の飾り」などではなく、すべてティエンに読まれたものなのだろうか。

（こんなにも勉強熱心だったのか、ティエンは……）

全く知らなかった　カイの前では、そんな素振りなど全く見せたことがなかったから。

カイとは違って竜の姿と人の姿を自由に使い分け、幻術も使いこなせるティエンは、日頃から、王宮と巷ちまたを気ままに行き来していた。そして、そんな彼を、カイはいつも羨ましいと思っていた。あのような政治手腕を発揮できるのも、そうやって市井しせいを好きなだけ見て回れるからなのだとばかり……

（しかし、それだけではなかったのだ……）

それ以前に、こうして勉学を積み、王族としての基礎固めをしたからこそ……

（それに引きかえ、私は……）

ウナバルにあったときは、確かに書物は読んでいたが、あくまでも、家庭教師が持ち込んできて「お読み下さい」と言われたものだけにすぎなかった。

人質ゆえのはばかりがあつて、書庫になど入れないゆえ……自分ではずっとそう思っていたのだけれど、もしかするとそれは、ただ

の言い訳だったのかもしれない。どうせ捨て駒として死に行くか、飯に生き延びられたとしても養父であるウナバル王の命に従うだけの「人形」にしかねない運命ならば、必要以上の勉強などしても無駄だ。それよりも、目に見えて「強さ」が実感でき、時には稽古という形を借りて、あの意地悪な王太子に一矢報いることさえできる武術の鍛錬に精出した方がずっと良い　心のどこかで、そう考えてはいなかったか。

一方、故国に戻ってからは、いきなりついた王位に慣れるのが精一杯で、読書どころではなかった。……と、これも思い込んでいたのだが、その思い込み自体、実は間違っていたのではないか。

時間は与えられるものではなく、作るものだと言ったことがある。勉強する時間とて、作るうと思えばいくらでも作り出せたのではないのか？　例えば、これでもか、というほど毒見を重ねて、延々とした時間をかけて運ばれてくる食事をいささか苛立った思いで待っている間であるとか、視察に出かける際に乗る輿こしの中で、「いくら暗殺の危険を避けるためとはいえ、少しは窓を開けて外を眺めたくて良いではないか」などと不満たらたらに考えている間であるとか

……

「……何と、言葉も喋れぬのに本を読むのか、きゆるるんは！」

感じ入ったような声に我に返ったときには、既に窓の外は夕焼けになっていた。どうやら、読書に没頭する余り、時間を忘れてしまっていたものらしい。

「明日からは、読みたい本があつたら、執務が始まる前に儂わに言いなさい。棚から取ってから出かけるゆえ」

相好を崩したまま続けると、竜神王はカイを手のひらにのせ、く

しゃくしゃと鬣^{たてがみ}を撫でた。

「しかし、よりによって政の本^{まつりごと}を選ぶとは……人を捨ててもなお、王としての矜持までは捨てておらんだか」
「きゅ、る……！？」

はじかれたように、カイは相手を見直していた。

（この男、今、何と……！？）

戻れぬ理由

「……これ！ これ待たんかユアン〃カイ！！」

「きゅるっ、キイイーツ！！」

構わず甲高い警戒音を発すると、カイは相手に向かって頭から突っ込んで行った。

「キイツ、キイツ、キイイーツ！！」

悔しい！

悔しい！！

悔しい……！！！！

最初からこの男は、こちらの正体を見抜いていたのだ。現に今、ぼろりと「ユアン〃カイ」と口走ったのが動かぬ証拠。この分なら人に戻れずにいることも、とうにお見通しなのだろう。見通したうえで、「きゅるるん」などと小馬鹿にした名などつけ、心中ではさんざん嘲笑っていたのに違いない。

（それなのに、私ときたら、ほんの一瞬とはいえ、こんな輩に「父親のぬくもり」など感じて……）

あまつさえ、気を許して眠り込んだりまでして……！！

二本の角が熱を持ち、雷の力が溜まってきたのがわかる。

「キイイイーーーーツツツ！！」

さらに一声叫ぶと、カイは一気にその力を放出し……バーン！という衝撃と共に、唐突に意識を手放した。

自分の発した雷に自らまで打たれてしまったのだと気づいたのは、再び意識を取り戻したときのことだった。

「……まったく」

竜神王の苦笑する顔が見えた。

「存外、考えなしに突っ走るところがあるのだな……まあ、何しろ儂^{わし}の子なのだから、しかたがないといえしかたがないのだろうが」
「きゅっ……！？」

「意識が戻らなかった三日三晩の間、何度かそなたは人に戻っていたのだよ。竜であり、人でもある おまけに、色を除けば十年前のティエンと瓜二つだ。認めぬわけには行くまい？」

驚愕したカイに向かって、相手はあっさり種を明かした。それから、つと立ち上がり、手ずから茶を淹れ始めた。自分とカイの二人分ということなのだろう、円卓の上に大きな湯呑みと小さな猪口を出して茶を注ぎ、ひょいとカイをつまみ上げて、猪口の前にちょこなんと座らせる。そして、カイの目を覗き込み、再び苦笑した。

「何故、今の今までそのことを言わなんだか、と言いたげだな。いや、儂とて迷いはしたのだぞ。だが、そなたを『そなたと認めて』しまえば、立場上、そなたをここに留^{とど}め置くわけには行かぬ 国王自ら『敵国』の王に必要な以上の情けをかけたとあつては、臣民に対して示しがつかぬからな。それに……ふと思つたのよ。もしかして、そなた自身も『そなたではなくなることを望んでいるのではないか、とな』

怪訝に、カイは首をかしげた。私では、なくなること……？

「人の姿になったとき、そなたはしきりと呟いておった。『自分が死ねばよかった。あねさまの代わりに逝けば良かった』と……そう、『このままティエンに王位を継いでもらった方が、国のためにもなるのではないか』とも言っておったか」

記憶をたぐるまなざしになって、竜神王は続けた。

「何があつたのかは知らぬが、そなたは『人族の王・ユアン』カイ『ハシム』であることに耐え難くなっていたのではないか？ そして、いつしか『人であること』自体をやめたくなくなってしまった意識が戻ったとたんに竜から人へ戻れなくなったのも、もしかするとそのせいかもしれぬ。ほれ、ティエンが十年の間、そなたに竜の姿ばかりしか見せておらなかったのを覚えておろう？ ちょうど、あれと同じように……」

その表情が、ふとほろ苦く歪む。

「まあ、あやつも一度は自害しようとしたゆえ、そう思うだけなのかもしれぬが」

カイの瞳が見開かれた 彼自身も、その場には居合わせていたからだ。

記憶を失っていたティエンがすべてを思い出したのは、例の竜神王とカイの対決のさなかであつた。最初、竜神王は、自ら手を下すのではなく、神通力を使ってティエンの心を操り、彼にカイを倒させようとした。皮肉にも、そのとき加えられた刺激が記憶を取り戻

すきっかけとなつたのである。

そして、竜神王の言う通り、カイに出会ってからその瞬間までの十年の間、ティエンは、九割方の時間を竜の姿で過ごしていた。カイの影武者を務めたり、街へ遊びに行ったり……といった目的で人に変化^{へんげ}することはあつたが、それは、あくまでも「第三者に変化している」だけ。「ティエン自身」の姿を見せたことは、一度たりともなかったのだ。カイにとっては、それは「ごく当たり前」のことであつたし、「以前のことは覚えていなかったのだから」「白髪灼眼のままでは目立ちすぎると思つたのだろう」という頭もあつたので、さして気にも留めていなかったのだが……

言われてみれば、ティエンも抱えていたのだった。「心の闇」を。

地上界にあつた頃、竜神王は、幻術を用いて角や尾や翼を隠し、カムナギ王宮に程近い森で森番をして暮らしていた。妻・ナナリの父親がもとと森番だったので、その仕事を引き継いだのである。それに、森ならば、うっかり幻術が解けてしまったとしても、そう誰かに見つかることもない。

二人の間にティエンが生まれたのは、結婚後七年が過ぎた頃だった。懐妊の兆候が表れたとき、夫婦はもちろん大喜びしたが、生まれてきたティエンを見て、一転、言葉を失った。

サラハン大陸の人々は、天空界に住む者たちを単に「竜」と称しているが、厳密に言えば、そうではない。彼らもまた、もとはといえば「人」であり、カムナギとウナバルの国境に位置する山間^{やまあい}の里に、小さいながらも一国を構えて暮らしていたのだ。

ただ、彼らは、生まれながらに変化^{へんげ}や幻術や飛行といった特殊能力を持った種族であり、寿命も百年単位と桁違いに長かつた。このため、他国の「持たざる人々」から恐れられ、徒党を組んで攻撃さ

れた拳句、故郷を追われてしまったのである。

四方を敵に囲まれ、逃げる場所は空の上しかなかった。が、そこで彼らを待ち受けていたのは、地上に比べてはるかに過酷な環境だった。いわゆる「竜」の特徴を持つようになったのは、この環境下でも生きていけるよう、体が適応した結果だったのだ。

それゆえに、彼らは「竜（族）」と称し称されながら、実際には、竜の姿よりも、今の竜神王の如き「角と尾と翼を持った人」の姿をしていることの方が多かった。そして、高速で移動する必要や地上と行き来をする必要ができると、竜体に変じて空を飛ぶのである。

ところが、ティエンは、そんな竜族の赤ん坊とも、さりとて人族の赤ん坊とも違っていた。形としては人に近いのだが、髪の毛一本に至るまで全身真っ白で、額と背中と尾てい骨の、ちょうど角と翼と尾にあたる部分に妙に目立つ瘤ができている異形の体。人族の間でも竜族の間でも滅多に見ることのない真っ赤な瞳。額の瘤に触れてみると、竜体に変わることは変わるのだけれど、大人の親指ほどの大きさしかない。その後だんだんに、角が生え、尾が伸び、翼が生じ、竜体の方も、親指大から手のひら大になり、犬猫の大きさを経て、やがては六尺余りにまで成長することになるのだが、その時点では、そのようなことなど予測できるはずもなかった。

『この子は、人の間でも竜の間でも生きては行けまい。私たちが守ってやらねば……』

そう誓い合った夫婦は、以前にも増して、自分たち一家の存在を必死に隠し続けるようになった。だから、ティエンが友だちを欲しがる年頃となり、たまに森に遊びにやってくる子どもたちを見て、「一緒に遊びたい」とせがむようになって、頑としてそれを認めなかった。

だが、幼いティエンには、その親心がわからなかった。それで、

短絡的に思ってしまったのだ。この森を焼いて、その隙にここから逃げ出そう。そうすれば、自分もあの子たちと同じように「自由」になれるのに違いない、と。そして、八つになったある日、とうとうそれを実行に移してしまった。風の向きや強さも災いして火は瞬く間に燃え広がり、森の大半を焼き尽くした。

この火事の責任を取る形で、竜神王は捕縛された。と言っても、彼の親友でもあった先代王ユアン・ナスル・ハシム四世は、彼の普段の熱心な働きぶりをよく知っていたので、せいぜい数日ほど拘留するだけで済ませるつもりでいた。また、よもやティエンが火付けの犯人だったなどとは思いもなかったため、「父親が不在では何かと心細かるう」と、ティエンを母親のナナリともども王宮へ呼び、面倒をみることにした。

しかし、この気づかいが裏目に出た。王宮に入る際、ティエンの姿を人目に晒しては、と、ナナリは彼を仔竜の姿に変えて懐に入れていた。このため、周囲の人間には、ハシム四世がナナリだけを迎え入れたようにしか見えなかった。結果、「国王が妾を作った」というまことしやかな噂が立ってしまったのだ。

やがて、その噂は、王宮の地下牢につながれていた竜神王と、同じ王宮の最上階で暮らしていたハシム四世妃、双方の耳にも入った。激怒した竜神王は脱獄し、ナナリを離縁して、ティエンを連れて天界へ戻ってしまった。一方、ハシム四世のもとに残されたナナリは、嫉妬に駆られた王妃にあの手この手の嫌がらせをされて心身共にぼろぼろになり、カイを産んでもまもなく世を去ったのであった。

『悪いのはすべて私なのです。私があんな短慮をしなかったら、父上も母上も、きっと今でもここ人界にあって仲睦まじく……』

心を操られた際、姿の方も竜人・白竜皇子はくりゅうのみこに変えられていたティエンは、白皙おもとの面に苦悶を浮かべてそう呟いた。そして、ためらい

ひとつ見せずに短刀を手にし、自害する素振り^{そぶり}を見せたのである。とつさにカイがその頭をひっぱたいて竜体にしてやらなかったら、確実にそのまま命を絶ってしまっていたことだろう。

「あれは……本当は十年前からずっと、あやつが心の奥底で願っていたことだったのかもしれん」

ほろ苦い表情を崩さぬまま、竜神王は湯呑みを取り上げ、茶をすすった。

「あのようなことをしてしまったせめてもの罪滅ばしに、必死に儼を説得し、ユアンたちと和解させようとしていた。だが、とうとう叶わなかった。それで、絶望してしまっただろう。しかし、たとえ半竜であつても、並みの地上人^{びと}に比べたらはるかに丈夫な体だ、天界から落ちたぐらいでは死にはしなかった。だから、代わりに過去の自分を自分で消してしまったのだ。その結果、記憶が消え、ただの竜になってしまっていたのだろうな。」

なればこそ、儼は、正体不明の竜の迷い仔として、そなたを扱うことにしたのよ。あのときのティエンと同じように、今のそなたもこれまでの己の一切合財を捨てたがっておるのではないかという気がしてならなかったのだな」

そうしておるうちに、そなたが再び人に戻る気力を取り戻さば、仇敵^{くひ}の首級^{くび}を取るまたとない機会を得ることもできようし、と不敵に笑って付け加える。しかし、それはあくまでも建前であつたらう。何故なら、その双眸には、いまだ「父の慈愛」が確かに宿っていたから……

竜神王の提案

「ともあれ、そなたのその反応からすると、ティエンとは違って、記憶まで失っているわけではなさそうだな」

どうやら、それを確かめるために、竜神王はあえて鎌をかけるようなことを言っただけだった。

「だとするなら、あとはそなたの心の持ちよう次第なのだろう
まあ、実家に静養にでも来たと思って、焦らず時を待つことだ」

こくり、とカイもうなずいて、ようやく程良く冷めた茶をすすった。

かくて、それからカイは、「迷い竜・きゆるるん」という立場のまま、天空城で暮らし続けた。

政のことも、挨拶ひとつせず^{まづい}に別れた形になってしまったリクのこと、気にならないと言ったら嘘になる。けれど、この姿のまま王宮に戻ったとしても、誰も国王ユアン「カイ」ハシム五世だとは思えない。それどころか、「よりによって国王陛下のお住まいに『災いのもと』が現れるとは！」とか何とか言われて、家臣・使用人総出で追い出されるのが関の山だ。

一方、リクと行動を共にする道を選んだとしても、相手に迷惑をかけることにはなるまい。このようなことになってしまった以上、リクを王宮に連れて行って、次期国王として推挙することは不可能だ。ならば、リクは、本人が予定していた通り、商売を始めることになるだろう。それなのに、「災いのもと」がいつまでも傍にいては、商いにも大いに差し障ってしまうに違いない。

朝になると、竜神王がやってきて、約束通り、カイが鼻先でつついて「読みたい」という意思を示した本を出して行ってくれる。

昼間は、もっぱらその本を読んで過ごした。その中には、王位についたばかりの頃、宰相ハクロウに無理やり読まされたものも混じっていた。ある程度国王としての経験を積んだ状態で読み直してみると、以前は単なる文字列でしかなかった記述が、驚くほどすんなりと、頭に　　というより、心に落ちて行くのがわかった。「ああ、あの案件はこの法をふまえて処理すれば良かったのか」とか、「あの陳情は、このような見地からも受理してしかるべきものだったのだ」とか……今さらそのように得心できたところで、果たしてこれを活用できる日は来るのだろうか、と時に暗澹たる思いに駆られることもあったが、できるだけすぐに打ち消すように努めた。竜神王の言う通り、人に戻れぬ理由が自分自身の心持ちにあるならば、そういうった負の感情も持たないに越したことはない。

宵の口になると、竜神王が再び顔を見せる。執務はもちろん、夕餉^{うけ}も終えているらしく、その懐からは必ず小皿一杯分ほどの食べ物が出てきた。これが、その日のカイの夕食と、翌日の朝・昼の食事となるのだ。一見すると、「これだけ?」という印象なのだが、ちなみに、あまり空腹感を覚えるということがなく、この分量だけでも十分、時には余ってしまうほどだった。

「ちゃんと食わねば、治るものも治らぬぞ」

皿に食べ物が残っているのを見るたびに、毎度毎度心配げに諭していた竜神王も、やがてその可能性に思い至ったらしい。

「そなた、体がなまっておるのだろっ」

カイの傷が完全にふさがると、そう言っ彼を懐に入れ、湯浴みに連れて行くようになった。

さすが竜族の王が使っただけあつて、国王専用の浴場は、彼が竜体となつてもなおゆつたりと入れるほど広く作られていた。その、さながら大池の如き浴槽に、体を洗い終えたカイを放り込むのである。

最初は何事かと驚いたが、そこはカイも西国の育ち、泳ぎなら心得たものだ。というか、いつ、あの意地悪な王太子に、それこそ湯の中やら庭の池やらに沈められるかわかつたものではなかつたから、心得ておかざるを得なかつた、というのが本当のところだつたのだが……

何にせよ、広々とした湯の中で泳ぎ回るのは、思つていた以上に心地良かつた。最初からカイを泳がせることを想定して沸かさせていたのか、湯自体もそれほど熱くはなく、前にリクと入つたときのように湯当たりを起こすこともなかつた。少しくたびれてくると、動きを止め、腹を上にしてぷっかりと浮いてみる。揺れる湯に身をゆだねていると、心にしまい込まれていたすべての憂い事が、すうと湯に溶けて消えて行くような気がした。

そうして三月みつき近くが過ぎたある日、いつものように湯の中を泳ぎ回つてから、ぷかりと水面に浮かっていると、竜神王が、感じ入つたように言つた。

「いや、見事なものだな。古来、竜は川や水をつかさどると言われているが、まさに水の化身とも言つべき泳ぎぶりよ」

ひょいとカイの体をすくい上げ、耳元に口を寄せて、こそつと囁く。

「ここだけの話だが、ティエンは全くの金づちでな」

「きゆるっ!？」

意表を突かれて、カイは相手を見直していた。「あの」ティエンにも、苦手とするものがあつたのか……

「ほお、そんなにも意外であつたか」

そんなカイを鼻先まで近づけて、竜神王はにんまりと牙を見せた。

「まあ、あやつは弱みを見せることを良しとせんからな。

ただでさえ地上人^{ひと}との混血、しかも、そのせいだったのか、体の成長も同年輩の者と比べてかなり遅くて……『父方の血筋が直系だというだけで次期国王になるとは生意気だ』『貴様など皇太子でなければただのクズだ』などと、特に王位継承権に近い親せき筋の者らに、やつかみ半分に言われては、随分といじめられてな。そんな連中を見返してやろうと必死に勉強に励み、武術や幻術の鍛錬にも精出し……そうして、連中にぐうの音も言わさぬ力を自力で手に入れたのよ。

あやつがそなたの目に『万能』のように映るのも、いわばその結果。内実は、案外、そなたに侮られぬよう、懸命にあれこれと取り繕うておるのかもしれんぞ。実は水練が苦手だったのだということを、ひた隠しにしていたのと同じようにな」

どうだ、少しは肩から力が抜けたか、と、からから笑う。

「はい、おかげさまで」

素直にカイはうなずいた。実際、「少し」どころか、かなり気が楽になっていた。ティエンもまた、自分と似たような過去を持っていたのだ。そして、血のにじむような努力を重ね、そこから這い上

がつて来た　　決して「すすいと要領良く」ではなく。

（そんな努力なら、愚直さだけが取り柄の私にもできるやもしれぬ）

諦めずにそれを積み重ねて行けば、あるいは……

「そうか、それは良かった」

竜神王は、満足げにもう一度笑った。それから、彼らは同時に顔を見合わせた。言葉が……通じた！？

「そなた、ちよいと角を触ってみい」

いささか急いた口調で言うと、竜神王はカイを再び湯に浮かべた。

「ここなら、人に戻ったとて何も不都合はあるまい」

「い……いかにも……」

何しろ風呂の中である。いきなり全裸の人になったとて、何ら違和感はない。しかも、竜神王は全くお付きの者を伴わずに入浴していたから、誰かに見咎められる心配もなかった。

「で……では、御免」

ちよこんと頭を下げると、その姿勢のまま、カイは両方の角に手を触れた

……が。

ぼんつ、という音ひとつ、風呂場には響かなかった。

「……うつむ」

ややあつて、竜神王が唸った。

「何かはまだ足りんということなのだろうな」
「御意……」

ため息をついて、カイも脱力した。たちまちぶくぶく、と沈みそうになり、慌ててぱちゃぱちゃと体勢を立て直す。

竜神王が風呂から上がって着替え終わるまで、彼らは互いに無言でいた。手拭いで体を拭いつつ、カイは、さらに何度か角に触れてみたが、結果は同じであった。

「どれ、戻るか」

きゅ、と寝間着の帯を締めると、竜神王は、カイをひよいと懷に放り込んだ。

「明日から、執務にも連れて行ってやる」
「え……？」

またまた虚を衝かれて、カイは頓狂な声を上げていた。まるで世間話でもしているかのように相手は言っているが、これは明らかにゆゆしきことだ。

「良いのですか？　いくら今は迷い竜となつてしまっているとはいえ、いつ『敵国の王』に戻らぬとも知れぬ私に、貴国の政の内情を

「

「戻らねば良いだけの話だろう」

「は……！？」

「まったく、どこまでもクソ真面目なやつよの、そなたは。普通ならば、むしろ敵国の内情を探れる千載一遇の好機と喜ぶだろうものを、そのように、いの一番にわしに気を遣うて……」

衣の上からカイを撫でて、竜神王は苦笑した。

「だが、そのような好男子だからこそ、再び敵に回すには惜しい。そこで、考えを変えてみたのよ。思えば、中つ国は既に『ティエンの国』のようなもの。ならば、そなたには、今後もずっとここへ留まってもらい、正式に儂の第二子としてまわりにも紹介して、この国の『王位を継いでもらったらどうか、とな。』

さすれば、人族の征服という我らの大義も果たせるばかりか、この国の王家も安泰。そなたにしても、無理に人に戻らなくとも良いいざとなったら、『人の片鱗すら持たぬ、生粋の竜』という触れ込みにすれば良いだけの話だからな。むしろ、その方が民心とてつかみやすかるう。どうだ、双方にとって良いことづくめではないか？」

「なっ……！？」

愕然と、カイは相手を凝視していた。

迫られし選択

記憶が甦^{うす}ってからも天空城には戻らず、地上に骨を埋める決心をしたティエンに、竜神王は「人族と馴れ合った罪により、竜族から永久追放する」と申し渡していた。もともと、それは立場上そう言うしかなかったというだけのことで、本音では、そんな形で息子の罪　いろいろな意味で　をこっそり赦してくれたのだらうと、カイも、それにティエン本人も思っているのだが……

「あれ以来、皇太子の座は空位になっておつてな」

戸口へ向かつてのしのしと歩きながら、竜神王は言葉を継いだ。

「皇太子がするべき公務は、代行という形で弟にやつてもらつておるのだが、あやつにはあいにく子がなくて、その先を引き継ぐ者がおらんのだ。さりとて、ティエンをさんざん侮辱したような者どもの誰かに、待つてましたとばかりにその椅子に座られるのもシヤクで……」

親馬鹿だと笑われるかもしれんが、と竜神王は肩をすくめたが、カイは笑わなかった。

自分が彼だとしても、同じように考えただろう。後継者に誰を選ぶかによつて、国の命運は大きく変わるからだ。親馬鹿ならずとも、信頼できぬ者になど引き継いでもらいたいはずはない。カイ自身にはあとを継がせるべき子はないが、例えば、半年もの間、のほほんと「巷での修業の旅」などにうつつをぬかし、今もこうして天空城で人に戻れる時を待ち続けていられるのも、影武者に立てたのがティエンだったからこそであつて

「…………あの」

不意に嫌なことに思い当たって、恐る恐るカイは確かめた。

『「このままティエンに王位を継いでもらった方が、国のためにもなるのではないか」とも言っておったか』

『思えば、中つ国は既に「ティエンの国」のようなもの』

ティエンに代理を務めてもらっていることは、カイの意識の中では既に当然のこととなってしまうていたので、うつかり聞き流していたのだが……

「ここに来た頃に私が口走っていた、その、うわ言、と言いましょ
うか……それは、その、どの程度……というか、貴殿は、どこまで
……………というか……………」

いくら高熱に浮かされ、朦朧としていたとは言え、自らの口から
今玉座に座っているのがティエンであると暴露してしまったのだ
としたら。また、それ以外の国家機密に関しても、万が一、べら
べらと喋り倒してしまっていたとしたなら……仮に人に戻れたとし
ても、王位に返り咲くどころか、その場で腹掻っ切って全国民に詫
びねばなるまい。

だが、すっかり血の気の引いてしまったカイの頭の上から降って
きたのは、あのからからとした哄笑だった。

「心配せずとも良い。先だって言った以上のことは何も聞いてはお
らんよ。まあ、だからと言って、全く何も知らぬというわけでもな
いのだがな。ただ、それを知ったのは、そなたの口からではない。
自分の水晶玉を見ておったからよ」

「水晶、玉……？」

言われて、カイも思い出した。ティエンも、小さな水晶玉を持っていた。それを持った者には千里四方が見渡せ、その千里の先からでも、対となる水晶玉を持った者に自らの声と姿を伝えることができるという、摩訶不思議な「竜の水晶玉」

「地上の動向に目を配るのも国王の大事な務めなのでな、折に触れてあちこちの国の様子を水晶玉に映しておるのよ。特に、各国の王が何らかの動きを見せるときにはな。

その姿を見れば、自ずと知れる。ほかの者には全くの同一人物にしか映るまいが、少なくとも生まれてから成人になるまでの間ずっと、父親としてティエンに接してきた儂の目はごまかせんよ。

して、今回の『取り替えばや』はどちらの意思なのだ？ たまには玉座に座ってみたいというティエンの遊び心か……いいや、玉座に座っておることに疲れたそなたを、あやつが兄として見かねた、というのが正解かな」

「恐れ、入りました……」

ちんまりした体を、カイはますます小さく縮めた。

少々長話になりすぎたのだろうか、外から、湯当たりを心配する声がかかった。

「大丈夫だ、今出る」

大声で答えると、竜神王は衣服の上からばんぽん、とカイの背を叩いた。

「先に儂の部屋に寄るぞ。今話した水晶玉を見せてやる。ティエン

ンのものなどとは比べ物にならんほど大きくて、よく見える代物をな」

「水晶玉を……？」

驚いて、カイは相手を見上げた。確かに、興味はある。竜族の王者が持つ水晶玉とは、いかなるものなのか……

「しかし、それは、もしや門外不出の秘匿品では」

「どのみち、そなたに引き継ぐものだ。今から見ておいても構うまい？」

「は、はあ……」

……参ったな。

心中で、カイはため息をついた。どうやらこちらの意思とは関係なく、竜神王の頭の中では、既にカイが後継者であると決定してしまっているようだ。

人に戻れるという確たる証がない今、それを否と突っぱねられる理由は、実のところ全くなかった。だいたい、どこにしようとして、自分は所詮「代わり」なのだ。人界にあつては、先代王及び王太子の代わり。それが、「ティエンの代わり」になった。ある意味、それだけのことではないか。それに、今度はいきなり国王になるのではなく、まず日嗣ひつぎみの皇子みこから始めるのだ。経験を積む時間も、人脈を築くゆとりも、十二分にある。無論、特に後者については、決して容易な道ではないだろう。何しろ、敵たる人族の血が半分入っているのだから。しかし、それなら今までとて同じようなものだった。ウナバルにあつてはカムナギの、カムナギにあつてはウナバルの間者呼ばわりされ、陰口を叩かれて……それが、今度は「人族の」に変わるだけの話だ。

にもかかわらず、強烈な違和感が心をとらえて離さなかった。自分分は、ここにいてはいけない　あたかも警鐘の如く、そんな思いが明滅して……

『いやあ、あの若さで王位を継がれて、最初はどうなることかと思っていたが……』

『まったく、あの男が国王になってから、どうもやりにくくて困る誰か、あいつに「中つ国の流儀」ってやつを教えてやってほしいもんだね』

『やれやれ、三日も待たされて、やっと謁見の順番が回ってきたよ。前の陛下のときには、こんなことなかったのにねえ。あれかい？　言葉がよくわからなくて、はいもいいえも決めかねてるのかね。それとも、実はおつむそのものがトロいとか……？』

『何であんなのが王位にいたりなんかしたのかねえ……それともあれかい、もしかして、前の陛下や王太子様が立て続けに亡くなられたのって、あの男が』

『しいつ、滅多なことを言うもんじゃないよ！！』

自らが思うほど、「いなければならぬ存在」ではないというのに。

『おのれユアンⅡカイⅡハシム……！！』

……むしろ

『あなたさえいなければ……あなたにここで死んでもらえれば、すべてがうまく行くのです……！！』

むしろ……

突然、ふわりと体がつかまれ、懷から出された。大きな左手の上

にカイをのせると、竜神王は、反対の手でそつと彼の目元を拭った。

「めっ………面目次第もっ………」

恐縮して、カイは思わずくるん、と丸まった。自分でも気づかぬうちに、涙してしまっていたらしい。

「何、恥じ入ることなどない」

竜神王は、しかし、鷹揚に微笑んだ。

「子どもは泣くのが仕事、思う存分泣かせてやるのは親の仕事
それを怠ると、ろくなことになる。現に、儂ら夫婦は、それを怠
ったがために、ティエンを火付けに走らせるほど追い詰めてしも
うた。まあ、そなたはもう子どもという年齢としではないが、見ていると、
どうも子どもらしい子ども時代を送ってきていないようだからな。
そして、それもまた、明らかに儂の責任だ。儂さえ短気を起こさ
ねば、そなたは最初から儂の子として生まれ、実の両親に思う存分
甘え、兄と遊んだり、ときには喧嘩したりなどしながら、『ごく普
通に』成長できたはずだったのだから……」

大きな両手が、カイをふんわりと包み込んだ。意識を取り戻した
あの日と同じように、ぎゅっと胸元に抱き寄せられる。

「よう聞け、ユアン!! カイ。そなたはな、決して『いなくとも良い
存在』などではないぞ。記憶を失っている間、ティエンは、そなた
にあたたく受け入れられ、友として遇してもらってあったことに、
どれほど救われておったか……さもなくば、記憶が戻りしのちもそ
なたと共にある道を選ぶはずはない。ましてや、自らの利になるわ
けでもないのに、わざわざそなたの代わりを務めておるはずなどな

かろう？ 儂とて、このような形で再会できたおかげで、長年ユアン・ナスルとナナリに抱いておったわだかまりが解け、ようやっと『まっとうな心』を取り戻すことができたのだ。それに……」

しかし、そこで竜神王は言葉を切った。

「……この続きは、部屋に行ってからの方が良いな。何と言っても、自らの目で確かめるのが一番であろうよ」

水晶に映りしもの

もう一度竜神王の懐に入って、相手の執務室へ向かった。やがて、人払いを命ずる声と共に、ギギイ……と古びた音を立てて扉が開く。

「もう出ても良いぞ」

言われてカイは、ぴよこんと懐から顔を出し……息を呑んで目を瞠った。

「これは……」

サラハン大陸全土、それにその周囲を取り囲む海までもがそこにあった。正確には、部屋の半分を占めようかというほど大きな大きな水晶玉の中に。

夜のことで、全体的に薄暗くはあるのだが、ヘキギョクとカムナギの王都は、恐らく繁華街の明かりゆえであろう、かなりはつきりと見て取れる。西の方のウナバルに至っては、^{かた}どうやらまだ日暮れの時刻であるらしく、街も村も海も美しい夕焼けに彩られていた。

「この玉はな、普段はこうして広域を俯瞰して映し出しておる。普通の水晶玉が映せるのは、よく言われておる通りだいたい千里四方だが、この玉に限っては、時間と天候に恵まれれば、海の方の、そなたらにとっては未知の島々まで見ることもできるぞ」

誇らしげに竜神王は胸を張った。

「そして……このような使い方もできる」

両手の指をいくつかの形に組み合わせ、印を結ぶ。再びカイは息を呑んだ。映っていた大陸の一部が、どんどん拡大され始めたのだ。「こうして見たいものを念ずるとな、そこに焦点が合うようになっておるのだ」

そう説明を受けているうちにも、見たことのある建物がぐんぐんと近づいてくる。住み慣れた　と、ようやく思えるようになってきた　カムナギ王宮であった。

王宮にはいくつか庭園があるのだが、宮殿の二階の屋根の上にも小体^{こてい}な庭が作られていた。建物正面から見ると裏側にあたるそこは、最上階にある国王とその家族の居室から直接出られるようになっていて、いわば、彼らの専用庭と言っても良かった。

その「裏庭」に、松明の灯に照らされて、二つの人影が浮かび上がっていた。既に執務を終えたのだろう、王冠を脱ぎ、くつろいだ部屋着姿になっているカイそっくりの男と、その腕に抱かれて散策を楽しんでいる幼い少女　カイの許婚、ヘキギョク王の一の姫のユイファであった。

透き通るような白さの肌に艶やかな黒髪、愛らしく整った顔立ち。弱冠五歳にして古今東西の書物のほとんどを諳んじってしまったという聡明さ。まわりの者は、一様に「まさに三國一のお嫁様ですね」と口を揃える　「あと十五年も経てば」という暗黙の条件付きではあったが。

このような場合、普通は婚約のみ整えて、婚儀は姫が年頃になってからあらためて執り行うもののだが、ユイファは婚約の時点でカムナギにやって来て、そのままこちらに留まった。これは彼女の実家であるヘキギョク側の希望で、実のところ国力はあちらの方が若干勝つていたので、「そうですか」と受け入れるしかなかった

のだが、ひょんなことからその理由が判明した。

ユイファは、盲目だったのである。しかも、見えない目を補うべく、まわりの風景や人の気持ちを心で感じ取るという人外の力まで備わっていた。ユイファ本人の話では、それゆえに、故国では二親にすら「気味が悪い」と遠巻きにされ、たまに口をきいてくれたかと思えば、

『目が見えないことと、奇妙な力を持っていることは、誰にも言うてはならぬ』

……つまり、ヘキギヨク側としては、政略結婚にかこつけて、ていの良い厄介払いをした、といったところだったのだろう。

そんな彼女の境遇は、カイのたどってきたそれと、どこか通ずるものがあつた。だから、カイは

「まだ陛下はお戻りにならないのね、ティエン」

ユイファの澄んだ声が、カイを現実に取り戻した。

「いやあ、姫さんの『心眼』にはかなわねえな」

あはは、と笑って、ティエンは腕に抱いたユイファを揺すり上げた。客人を通すこともあるほかの庭とは違って、裏庭には国王一家以外の者の立ち入りは禁じられ、警備の者も、建物の窓越しに目を配っているだけだ。それゆえに、ユイファは遠慮なく「本物のカイ」の居所を尋ね、ティエンも誰憚ることなく「国王陛下の仮面」を外したのだろう。

「結構気合い入れて、あいつっぱい『気』をまもって見たんだが、

「やっぱバレバレか」

「だって、ティエンの『気』には邪念が多すぎるんだもの、すぐわかるわ」

ませた口ぶりで返して、ユイファはふふふ、と笑った。

「真面目な陛下の真似ばかりしていて、息が詰まっているのでしょう？ わたくしは構わないから、たまには街で遊んで来たらいいのに」

「……おいおい、あんたほんとにまだ七つ（数え年）の祝いもまだなのかよ」

ティエンの目が丸くなった。

「こりゃ、カイのヤツと十五近く離れてて逆に幸いだったかもしれないな。下手に年齢が近かつたら、間違いなく尻に敷」

「何ですって？」

「い、いえ、何でもないっす……」

……確かに、一理あるかもしれない。

「……しっ、しっかしアレだな、ほんとうがねえよなカイのヤツも」

旗色が悪くなったティエンは、どうやらカイを悪者にすることで難を逃れるつもりらしい。

「あれほど『半年経ったら戻れ』って念押ししたのによ。いったいどこをほつつき歩いてんだか……」

すると、ユイファの表情が、スツと変わった。否、厳密には、「
なくなった」 思わずカイは竜神王の懷を飛び出し、玉を覗き込
んでいた。覚えがあつたのだ。それは……その顔つきは、かつての
カイのそれそのものだったから。どのみち、望んでもかなえられる
わけなどない そう自分に言い聞かせ、何もかもを諦めてしまつ
た末の無表情……

「大丈夫。さみしくはないわ」

むしろ自分自身に言い聞かせるように呟くと、ユイファはいつも
持ち歩いている熊のぬいぐるみを、ぎゅ、と抱きしめた。

「いつも、カイと この子とお話ししているから、さみしくはな
いの」

ゴン、と水晶玉に頭がぶつかったのにも構わず、カイは身を乗り
出していた。ティエンは、決してユイファに「さみしいのか」と聞
いたわけではない。にもかかわらず、自然にそのような言葉が出て
きた それは、本当はさみしくてたまらないのだ、と暴露してい
るのと同じことではないか。

それに、カイが旅に出る前まで、あの熊には名などついていなか
った。

『わたくしの大事なくまちゃん』

確かユイファは、そう呼んでいたはずだ。だが、今は「カイ」と
自分と同じ名をつけて……

（ひょっとして、ユイファはあの熊を私に見立てて、さみしさを紛

らわしていたのだろうか)

それほどまでに、私を……私の帰りを……

ズキリと胸の奥が痛んだ次の瞬間、さらに、とどめの一撃が飛んできた。

「それに、陛下は約束して下さったもの　わたくしを守って下さるって」

だから、少しぐらい遅くなっても、きつとここへ帰ってきて下さるわ。そう付け加えて花が咲いたように笑ったユイファを、呆然とカイは見つめた。

(そう、だった……)

目のことをカイに知られたとき、ユイファは、

『わたくしは……実家^{さと}に帰されてしまうのでしょうか』

と不安もあらわに尋ねてきた。「帰されてしまふ」「帰れる」ではなく。彼女にとって、故国へ戻ることは、決して喜ばしいことではなかったのだ。自分を化け物呼ばわりし、心中ひそかに恐れ蔑む人々と再びまみえねばならない。ましてや、一度破談となった娘を再びもらってくれるような国はそうそうないだろうから、恐らく、そのまま宮中に幽閉されるか、あるいは病死と見せかけて……

だから、カイはきっぱりと請け合った。

『大丈夫だ。このことは誰にも漏らさぬ。たとえ誰かが知ったとし

ても、何も心配はない。この手で、必ずそなたのことは守ってやるから　だから、もうそんな顔はするな。安心して、ここに居って良いのだぞ』

そうだ。

そうなのだ。

あれは、決して「安請け合い」などではなかった。あのとき、カイは心底から思っていたのだ。彼女を守れるのは自分しかない、と。似たような境遇を持った自分だからこそ、誰よりも共感してやれる。同じ孤独を知っている自分だからこそ、誰よりもその孤独を理解し、癒してやれる、と……

どんなに政に精通したテイエンにも、「本当の王家の血筋」を継いだリクにも、これだけは、決してではしらない。なのに……それなのに、何故自分はこんなところで蹴躓いているのだ。ユイファの孤独を埋めてやるどころか、あんな哀しい顔までさせておいて、さも自分ひとりが居場所を失った不幸者であるかのように嘆き悲しみ、拳句にこのようになっていたらくにまでなつて……！！

「……竜神王、殿」

水晶玉の上で、カイは両の拳を握りしめた。

「申し訳ありません。私は……私はやはり、ここに留まるわけには行きません。帰ってやらねば……たとえどんな姿であつたとしても、たとえ再び王位につけなかったとしても、帰って彼女に深く詫び、あの約定を果たすことだけは……！！」

答えは返ってこなかった。代わりに、ふあさり、と背中に何かが

掛けられた。ティエンの上衣であった。

「まったく……こういうときには幻術で衣服のひとつも出せるようにせんと、目のやり場に困るだろう」

その上衣をさらにしっかりとカイに着せかけ、あちこちを整えながら、竜神王は嘆息した。

「本当なら、その稽古もつけてやりたいところだが……それでは、あの姫君をますます待たせることになってしまうからな。ま、ティエンにでもきちんとかわっておくことだ」
「え……？」

カイは目をぱちくりさせ……あらためて自分を顧みて、さらに仰天した。ちんまりとしていたはずの両腕が、元に戻っていたのだ。否、腕だけではない。浅黒い胸板も、武術の鍛錬の成果で八つに割れた腹筋も、上衣からはみ出す形ですらりと伸びた両脚も……

「ほれ、ちゃんと鏡でも確かめてみい」

顎をしゃくって、竜神王は、水晶玉の反対側に設えられた姿見を示した。

「そのようなものを見てしまったては、正直、ますます手放し難いのだがな」

「は……？」

怪訝にカイは問い返し……姿見を振り返って、またまた驚愕した。

父との別れ

「行きなさい。そなたの言う通り、そなたの居るべき場所は、ここではない」

姿見に映った竜神王が、深くうなずいて言い切った。

「その姿なら、自力で地上にも戻れよう」

……そう。カイは、厳密には、人に戻ったというわけでもなかったのだ。姿見には、二十年間見慣れた人としての自分の顔が映っていた。けれど、その額の生え際あたりには、以前はなかった灰色の角が二本、によきつと突き出ている。上衣の裾からは、黒くて長い尾がしゅつと伸び、背中に開いた穴からは、大きな黒光りする翼が一对、これも伸びやかに広がっていた。

「あ、あの……」

「なあに、ティエンだとて、それと人の姿とを使い分けておろう？ その稽古も、あやつにつけてもらえば良いだけのことよ」

戸惑いを隠しきれないカイを、竜神王はあつさりと笑い飛ばした。

「それとも何か、ついさっき、『どんな姿になっても良いから戻る』と言ったのは嘘だったか。ならば、やはりここに残って儂わしのあとを継ぐか？ 今のそなたならば、もはや誰ひとりとして異論など」
「いいえ、それだけはっ！」

ぶんぶん、とカイはかぶりを振った。ええいままよ、とばかりに、先ほど竜神王がやっていたのを真似て指を組み、人の姿をした自分

を必死に頭に浮かべてみる。とたん、ぽんっ、という音と共に、角と尾と翼が消え失せた。

「……ほお。やればできるではないか」

竜神王が、にんまりと牙を見せた。

「やはり、気の持ちようの問題であつたな。戻りたい、あの姫君を守ってやりたいという気持ち^が、迷いを凌駕し、新たな力をそなたに与えたのであろうよ」

「御意にございます」

素直に、カイは首肯した。

「それに……父上にも、自信を与えていただきましたゆえ」

一瞬、沈黙が流れた。

「そなた……今、儂を父と呼んだのか？」

ややあつて、竜神王が確かめるように問いかけた。

「こんな儂を……一度は、そなたに刃さえ向けた」^{みつぎ}

「三月の間に、二十年分の御心を掛けていただいたのです。これで父上とお呼びせねば、天罰が当たりましょう」

相手の自責にかぶせるように言葉を継ぐと、カイは微笑んだ。それから、あらためて相手に向き直り、深々と頭を下げた。

「いろいろとお世話になりました。それに、本当に申し訳ありませ

んでした。せつかくあれこれ心配いただいたというのに」

「ああ、あれはただの試みよ」

「試み、でございますか……？」

「左様。ああでも言えば、さすがのそなたも尻に火がついて人に戻る気になるかと思うてな、試してみただけのこと」

ふん、と竜神王は肩をそびやかした。

「だいたい、儂はまだ後継者が必要なほどの年齢としではないわ。あと五百年は現役であるつもりゆえ、万一気が変わったとしても、しばらくは譲ってなどやらんぞ」

小さくカイはふきだした。そんなことを言いつつ、一向にこちらを見ようとせず、あまつさえ、しきりと目をしばしばさせてまでいるのがよくわかったから。

空を飛ぶためにあらためて竜人の姿となり、衣服も上下とも整える。竜神王に導かれて天空城の門まで出てみると、空はほとんど雲ひとつなく晴れ渡っていた。月明かりと、例の裏庭をはじめ城内各所に焚かれた松明のおかげで、帰るべき王宮の場所も十分に視認できる。

そんな下界の様子と門柱の上の風見鶏の両方に目をやって、竜神王が断じた。

「うむ、この天候と風の強さなら容易に下界したまで降りられよう。あとは風向きがうまく変われば、瞬時のうちにあちらに帰れるはずだ。では……」

続けかけた声が、ぐっと詰まる。ゴホン、と咳払いして、竜神王

は顔をそむけた。

「何と……ここからも、かみなかしも上中下三国が一望できるとは！」

あえて気づかぬふりをして、カイは話柄を変えた。

「水晶玉を通しての眺めも素晴らしいものでしたが、こうして直接眺めるのも、また格別ですね」

すると、思いがけず、はずんだ声が返ってきた。

「そうであろう？ 幼き頃、初めてこのさまを見たとき、実に美しいと思うた。ずっと、ただ飽かず眺めていたいと……眺めるだけで十分だ、とな。それゆえに、『大義』を振りかざしてこの世界を攻めんとする父親の心が理解できなんだ。一度は地上に下ったのも、そのためよ。自分自身の不徳でユアン・ナスルに私怨を抱いていた間だけは、そんなことなどすっかり忘れておったが……」

再びこちらを振り返った黒い眼が、まっすぐにカイを射る。まなこ

「繰り返しになるが、すべてそなたのおかげぞ。そなたと再会し、それをきっかけとして、過去のわだかまりが完全に消えたからこそ、また昔のような心を取り戻すことができた。まこと、感謝しておるぞ。」

案ずるな、儂の目の黒いうちは、決して軍部に勝手な真似などさせん。その代わり、儂の命数が尽きようとしたときには……今度こそ、ティエンと共にここに帰り、儂のこの意思を継いでくれぬか。竜族の寿命は長いゆえ、その頃には、そなたらも、地上人ひとの間にとどまっただけは何かと都合にもなってくるであろうしな。

そなたは生真面目で、まっすぐな心を持った努力家だ。そして、

ティエンは柔軟な思考を持ち、人心掌握の技にも長けておる。それらを両輪として、ぜひ竜族と人族との架け橋となってほしい。この通りだ」

驚きのあまり、とつさに返事が出てこなかった。あの誇り高き竜王が、自分のような小童相手に、地につくほど頭を下げている……

「どうか……どうか面をお上げ下さい、父上」

その手を取って、カイは言った。

「父上のお気持ち、しかと承りました。その約定、必ずや果たしに参ります」

「まことか!？」

「はい。二言はございません」

それどころか、願ってもない話だとさえ思っていた。五百年……は誇張であるにしても、この分なら、「そのとき」が来るのは、あと五十年は先だろう。その頃には、カイも人としては老齢の域に達しているはずで、周囲からは「いい加減に引退して下さい」などとそれとなくほめかされすらしているのではないか。ユイファとて既に孫のひとりや二人いるような年齢で、「守ってやる」必要など塵ほどもなくなっているのに違いない。

その機をとらえて、政の舞台からこっそり姿を消し、天上界へと上って、今度は竜神王の父の意思を継いで、人と竜との架け橋となる。老後の過ごし方としては、まさに理想的だと言えよう。それに、何より「ティエンと共に」と言ってもらったのが嬉しかった。やはり父は、心の底ではとくにティエンを赦していたのだ。そして、その行く末をこっそり心配してもいた。カイに対してそうだったように。

風見鶏が、風の流れがカムナギ王都の方向に変わったことを告げた。

「さ……」

言葉少なに促すと、父は、またしてもくるりと後ろを向いた。カイは、それを咎めなかった。例によって、こみ上げてくるものをこらえているのだろうと察しがついたから。

「では……父上も、お達者で」

今一度頭を下げると、カイはバサリと翼を広げ、地面を蹴って風に乗った。このように大々的に空を飛ぶのは初めてだったが、風の流れをつまく見計らったおかげか、妙な方向に飛ばされることもなく、ぐんぐんと見慣れた王宮が近づいてくる。

（ユイファ、ティエン……今帰るぞ！）

それに、リクにも謝らねば　黙って急に消えてしまったことと、それゆえに、きっと相当な心配をかけてしまったであろうことを。

（ティエンとユイファに挨拶を済ませたら、さっそくリクの行方を追ってみよう）

この前会ったときの様子を考えると、ティエンはあまり良い顔はしないだろうが……

（そうだ、先ほど父上の水晶玉を拝見させていただいたときに、リクがどこで何をしているのかも確認しておくのだった……）

ちらりと後悔が心をよぎる。だが、たとえそうしたとしても、恐らくは無駄であつたろう。いみじくもティエンが推測した通り、竜の王者の神通力をもってさえも見通せないような場所に、リクは幽閉されていたのだから。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

何者の力も及ばぬよう、幾重にも張られた結界

その内側に作られた小部屋に、リクは横たわっていた。この三月の間、ずっとそうして寝かされていたのだ。腕には太い注射針が刺さり、眠り薬と栄養補給の薬が流れ続けていた。

口から食べ物を摂っていないせいか、頬はこけ、唇は真つ青を通り越して紫にすらなっている。その顔が、不意に悪夢でも見ているかのように歪んだ。

「ち、が……カイは、そん、な……うあああつ!!」

引き裂かれるような叫びと共に、背中が弓なりにのけぞった。まるで雷にでも当たったかの如く、びくん、びくんと体が痙攣する。

「まったく、見かけ以上にしぶといやつよ」

ぐったりとなつたリクを見下ろして、ぶつぶつと文句を言ったのはドウタクであつた。この三月の間、みつき彼は何度となく、催眠状態にしたリクの心に侵入し、術をかけ続けてきた。無論、リクを思うままに操り、一日も早く、王位を篡奪させるためである。ところが、

毎度毎度この調子で、術自体を拒絶されてしまうのだ。「罰」として、そのたびに苦痛を与えるようにもしてみたのだが、結果は同じであった。

「しかたない。もつと強い『術』を施してみるか」

続けてそう呟くと、竜神王のそれによく似た印を結び、念をこめる。とたん、再びリクの口から絶叫が上がった。絶叫は、今度は間断なく半刻ほど続き……それが止んだとき、ようやく茶色い瞳がゆっくりと開いた。

「我は、リクⅡナスルⅡハシム六世」

唇から、うつろな声が漏れる。

「現国王ユアンⅡカイⅡハシム五世は、祖父ユアンⅡナスルⅡハシム四世と、父ユアンⅡリク王子を毒殺し、母ユナ妃を斬殺せし仇敵なり。我の最大にして崇高なる使命は、これを打倒し、必ずや力ムナギ王家を『正統なる血筋』に戻すこと……」

国王、帰還す。

夜風がすうつと吹き過ぎて、ユイファが小さくくしゃみをした。

「もう入った方が良さげだな」

彼女を揺すり上げて、ティエンは言った。

「ごめんな、ほんとには散歩なんつーのは昼間にするもんなんだろうけど……」

「わかっています。昼間はお仕事があるのですもの、しかたがないわ」

につこり笑って、ユイファは答えた。

「それに……お仕事の合間には、陛下のことも捜しているのでしょうか？ 本当はとくに王都へ戻^{みやこ}ってきてらっしゃるはずなのに、全然お城に戻^{みやこ}ってらっしゃらないから……そうそう、そう言えば、リク様ってどなた？ その方のことも、一緒に捜しているのよね？」

「あー……」

片目をつぶって、ティエンは首の後ろを掻いた。まさに「おつしやる通り」だった。下手をすれば王室転覆とカイ自身の生命の危機を呼びかねないだけに、やはりどうしても放置してはおけず、自分なりに、竜の能力やら独自の情報網やらを駆使して、二人のことを捜し回っていたのだ。残念ながら、全く成果は出ていなかったのだが。

「ほんと、姫さんが相手じゃ、何の隠し事もできねえな」

「いいのよ、わたくしを心配させたくなくて黙っていたのでしょ？」

これまた鮮やかに看破して、ユイファはもう一度につこりした。

「でも、たぶん、陛下のことはもう捜さなくても大丈夫だわ」

「へ？」

ティエンは怪訝に聞き返し……次の瞬間、ぶつたまげた。

「でええ〜つつ！？」

雨雲ひとつかかっていないというのに、夜空を貫いて雷が落ちてきたのだ。

「危ねえっ！！」

とつさに伏せて、ユイファをかばう。

（あんなの食らったら、ひとたまりも……ね、え……！？）

ところが、予想に反して、物音ひとつ起こらなかった。雷だと思われた光は、むしろ、ゆっくり、ゆっくりとこちらに下りてきて……ばさり、と羽音を立てて目の前に降り立った「それ」を、穴のあくほどティエンは見つめた。

「おまえ……カイ、だよな？」

その証拠に、顔はカイ本人のものにはかならない。が、頭には角が、背中には翼が生えていて、立派な尾までついている。これは、まさか……

「まさか、仮装大会にでも出てたとか」

「……貴様にだけは言われたくないわ!」

思いつ切り、カイは仏頂面になった。

「自分とて、『素』の姿は早い話がこれの色違いではないか。だいたい、久方ぶりの再会なのだぞ? もっと気の利いた言いようはないのか」

「ねえな」

にべもなくティエンは片付けたが、無論、それは方便だった。本当は、うまく言葉が出てこなかったのだ。「何やってたんだ今まで!」とか、「心配したんだぞ!」とか、「どんなわけで、いきなり竜人化なんかしちゃったんだよ!」とか、心の中では、あれもこれもと渦を巻いているのだけれど、いざ口に出そうとすると、その手前で引っかかってしまう、というか、胸が一杯になってしまう、というか……

「どうされましたか、陛下!? 何やら妙な光も見えたようですが……」

建物の方から、警備兵の声がかかった。

「あ、いや……何でもない!」

とつさに応じたのはカイだった。そのまま目を閉じ、指を組んで何事か念ずる。ほお、とティエンが感嘆した。カイの体から、角と翼と尾が瞬時のうちに掻き消えたのである。しかも、身に着けている物まで、ティエンが纏まとっているのと全く同じ部屋着になっていた。

「随分な『進化』っぷりじゃねえかよ」

「まあな。これも父上のおかげだ」

ごく自然な動作でユイファをティエンから抱き取りながら、カイは言った。

「ふうん……」

何となく相槌を打ちかけて、ティエンは眉をひそめた。

「ちょっと待て。おまえ、今『父上』つつた!？」

黄泉の国に行つて先代王ハシム四世に会つていた、とでも言うなら話は別だが、そうでないとするならば、それは、つまり……

「おまえ、親父んとこにいたのか？ 何でまた……つつーか、聞いてねえし!!」

がつくりと肩を落としたのは、いつの間にやら隣で「許婚たちの喜びの再会の図」が大々的に展開されていたからであつた。

「お帰りなさいませ、陛下!」

「ただいま、ユイファ。長いこと留守をして、本当に申し訳なかったな」

「いえ、ユイファは、陛下がご無事でお戻りになられただけで十分にございます! しかも、あんなご立派なお姿にまでなられて……ええ、わたくしも、心眼でちゃあんと『見られ』ましたのよ? もう元に戻られてしまったなんて、本当に残念だわ。翼とか尻尾とか、ぜひとも触れてみたかつたんですのに……」

「何と、あの姿をそのように……嬉しいぞ、ユイファ。まったく、どこぞの阿呆とは大違いだ。とはいえ、ここでは人目について騒ぎにもなりかねない。あとで、いくらでも見せてやろうぞ」

「まあ嬉しい！ では、わたくしのお部屋で……あ、でも女官たちに見られるのもまずいのですよね？ そうしたら、わたくし、夜中にこっそり陛下の御寝所に忍んで 陛下？ どうされたのですか陛下？ お鼻から血が」

「い、いや、これは、その……も、問題ない」

「……なあにが『問題ない』だよ」

幻術で姿を消しつつ、ティエンはぼそりと突っ込んだ。

（十七ならともかく、七つ前のガキに「夜中に御寝所に忍んで」と言われたぐらいで鼻血なんか出しやがって……）

しかも、さりげなく「どこぞの阿呆」と形容されたような気がしたのは空耳だろうか。

（まったく、そうやって姫さんに鼻血拭いてもらってるその顔こそ、よっぽど阿呆^{アホ}っ面^{ツラ}じゃねえかよ……！）

だが、そんなティエンの内心をよそに、二人はすっかり彼らだけの世界に入ってしまった。

「……まあ、全然止まらないわ！ どうしましょう、このままずっと血が出続けて、陛下がお亡くなりになってしまわれたら……！！」
「何を申すかユイファ、この程度で私は死んだりはせん。だいたい、そなたを置いて死ねるわけなどなかるうが。ずっと守ってやると約束したのだからな」

「陛下……！！」

「ユイファ……！！」

（……あーあーあーもう！）

盛大にため息をついて、ティエンは天を仰いだ。

（勝手にやってる馬鹿夫婦っ！！）

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

「……しかし、まさかあの親父がおまえの命を助けたあな」

カイの部屋に戻って一通り話を聞くと、ティエンはあらためて目を丸くした。

「ああ。要するに、良くも悪くも情の濃い方なのだろうな。それゆえ、先代王陛下と母上の一件では烈火の如くお怒りにもなったのだろうが……その点、今回は、私がちゃんまりした仔竜の姿をしていたせいもあつたのだろう、まるで孫を溺愛する祖父様じいちゃんのようであつたぞ」

その溺愛ぶりを思い出したのか、カイは小さく苦笑を漏らした。彼の腕には、相変わらずユイファが抱かれている。今までよほど気を張っていたのだろうか、城内に入ろうと歩き出してすぐにユイファは寝入ってしまったのだ。いくら声をかけても揺すっても起きないうえに、無理に引き離そうとするとかえってぎゅうっとしがみついてしまうので、結局ここまで一緒に連れてきたのであった。

「どうやら、執務室の水晶玉にて、息も絶え絶えになっている私の様子をご覧になったらしい。そして、すぐさま駆けつけて下さったのだ。てっきり、あれは女性との連絡（じふせいとのれんごく）に使っものだとばかり思っていたのだが、違ったのだな」

「嫌味かい！」

たちまち、ティエンは渋い顔になった。

「俺だつてあれだ、声かけた女の子たちが困つてねえかな、とか、さみしい思いしてねえかな、とか、随時あれで確認してだなあ」

「それはそうと、リクのその後の行方のことなのだが」

「無視かよ！」

ますますティエンは渋い顔になった。その顔のまま、鉄瓶に入っていた茶を湯呑みに注ぎ、ずずず、とすすする。

「つつーか、俺は、おまえら二人、一緒にいるもんだとばかり思つてたんだ。で、あの坊主を利用しようとしてる連中に、二人まとめて拉致られたんじゃないかって……だけど、水晶玉には一向にそれっぽいもんなんか映んねえし、聞き込みしてもなしのつぶてでさ。ただ……」

「ただ？」

「あ、やつぱ教えねえ。そうだな……さっきの嫌味の件と、それから、この三月（みつき）、さんざんひとに心配かけた件について、土下座して詫び入れるんだつたら話してやつてもいいかな」

「はあ？ 何やそれ」

今度はカイが、ウナバル訛り丸出しで顔をしかめた。しばしの間、彼は何事か考えるように視線を巡らしていたが、やがて、おもむろに立ち上がった。

「ならええわ。オレはオレで、聞くあてがないわけやないし……ユ
イファを部屋に送ったついでに、そっちにも回ってくるけん、おま
えは、そん茶あでも飲んで待っとけ」
「……へ？　ちょ、おいっ……！？」

さっさと出て行こうとする弟を、慌ててティエンは追いかけた。

VS・宰相！

「…………なあ」

その部屋　宰相ハクロウの執務室の扉の前で、ティエンが不安げに囁いた。二人して同じ外見で歩いていては当然大騒ぎになるので、今は警備兵のひとりに身をやつしている。

「ほんとに、やつに聞いてみるつもりなのかよ？　つつーか、あのこうるさいオッサン相手にすんだったら、ちゃんと正装してきた方が良かったんじゃない？　髪だって、そんな伸びっぱなしじゃ…………」

ティエンの指摘した通り、カイは、相変わらず、さつき幻術で出した部屋着姿のままだった。髪も、旅から戻ってきたままの長さのものを後ろで軽くまとめただけだ。つい数刻前までティエンが国王の執務室で家臣たち皆に見せていた、短髪で王族服をきっちり着込んだ「国王陛下」とはあまりにも落差がありすぎる。

「『これが』良いのだ」

カイは、しかし顔色ひとつ変えずに言い切った。

「それより、ここから先もついて来るつもりなのならば、頼みがある」

「頼み…………？」

おうむ返しにティエンは尋ね…………その「頼み」を聞いて、さらに面食らった。

仕事熱心な宰相は、幸いまだ下城してはいなかった。畏まって国王を迎えた彼は、その姿を見て啞然とし、さらに続いて入ってきた「自分がさっきまで見ていた国王陛下」の姿を見て、引きつけを起こしたように立ちすくんだ。

「な、何故陛下がお二人……！？　というか、貴様……貴様は、あのときの――」

「そう、そなたが旅先で会った男だ」

蓬髪の男の方が、あとを引き取った。

「そして、そなたは決して『見間違えた』わけではなかったのだ
私こそが、本物のユアンⅡカイⅡハシムなのだからな」

完全に言葉を失ったハクロウに、これまでの経緯をざっと説明する。

視察だけでは見えてこない国の内情をどうしても自分の目で確かめてみたくて、こっそりと旅に出たこと。

とはいえ、玉座が空になるようなことはあってはならないので、母が王宮に上がる前に産んだ子で、自分にそっくりな顔をした兄のティエンに影武者を務めてもらっていたこと。

そろそろ帰途につこうとしていたところで偶然ハクロウと鉢合わせ、騒ぎを起こしたくてとっさに逃げてしまったのだということ……

「謀^{たはかり}るような真似をして、本当に申し訳なかった」

そう話を結ぶと、カイは深々と頭を下げた。答えは、すぐには返ってこなかった。ハクロウは一度大きいため息をつき、それから、

今聞いたことを頭の中で整理するかのように、目を閉じて、とんとん、と指で額を叩いた。

「信じ難い……と申し上げたいところですが、信じぬわけには行かぬのでしょうか」

ややあつてようやくカイに視線を戻すと、おもむろにハクロウは言った。

「正直、いささか妙だとも思つてはいたのです。失礼ながら、陛下は御即位後三年も過ぎようとしていらつしやるのに、いつまで経つてもどこか自信なげで、大丈夫だろうかとこちらが心配になつてしまつようなところがありでした。それが、ちょうど半年ほど前を境に、嘘のように消えてしまった。あたかも別人になつてしまわれたかのようにね。しかし、本当に別人だったのだということならば、それも納得できようというものです。それに……」

白い髭の下で、唇がわずかにほころんだ。

「半年前に比べて、随分と良き面構えになられた。さぞや得るものの多かった旅だったのでございましょうな」

「ああ、無論だ！」

カイの表情が、ぱあつと明るくなった。この先の話を進めやすくするために、あえてこうして旅に出ていることを告白したのであったが、ここまで色好い反応が返ってくるとは思っていなかったのだ。

「この経験、必ずや今後の政務に生かしてみせようぞ。……だが、その前にひとつ、ぜひとも断^たっておきたい憂いがあるのだ」

「憂い、でございますか？」

「そうだ」

大きくカイはうなずいた。

「旅に出て間もなく、私は義姉^{あね}上　亡き長兄^{あに}上の奥様であらせられるユナ妃殿下にお会いしてな……」

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

「何と……」

すべてを聞き終わったハクロウは、ますます目を瞠った。

「ユナ様が御所用で旅に出られ、その旅先で病に斃れたということは伺っておりましたが、まさかその裏に、そのような事情が隠されていたとは……」

しかも、あの少年が王太子殿下の……ですが、言われてみれば、確かに顔立ちといい、あの機転の利かせ方といい、在りし日の殿下にどこか似ていたような気もいたします。

私がそう思うのですから、ほかに同じように感ずる古参の家臣は必ずおりましょう。仮にその者が、畏れ多くも陛下が玉座にあられることに不満を抱いている不逞の輩であり、少年の所持していたという懐刀も見たというのなら、彼を手中に収め、王位を篡奪させようと考えたとしても不思議はないでしょうな。さらに、その者が私利私欲に駆られた野心家であったならば、少年を傀儡として政界を操り、間接的に我が国全土を支配しようという不屈き千万な野望を抱く可能性も、全くないとは言い切れませぬ」

「であるう？」

得たり、とカイは身を乗り出した。

「それで、そなたに心当たりの者がないか尋ねに参ったのだ。そなたならば、政界のことにも誰よりも詳しいうえに、誰であろうと隔てなく、厳しく評価できる目も持つておるゆえ、きつと有意義かつ客観的な意見が聞けるのではないかと思うてな。

それに、もしかすると義姉上も、同じ人物に唆されたのではないかという気がするのだ。義姉上の御心の内に、もともと弟御を討つた私への恨みがあつたことは事実だろう。しかし、そうだとしても、ああして狙いすましたかのように私の前に現れるためには――

「そうですね。日頃から御傍にあつた私ですら、今の今まで陛下が旅に出ていらしたなどは夢にも思わなかつたのです。普段、陛下とほとんど御接触のないユナ様であれば、なおのこと陛下を亡き者とせんと図る第三者によって陛下がどこに居られるのかを教えられ、『今こそ仇討ちの好機』などと囁かれたと考えた方が、はるかに自然というもの……」

もう一度目を閉じると、ハクロウは額をとんとん、と指で叩いた。

「陛下の居場所と少年の出自に関する諸々の両方を知っている、となれば、その者は政界の中枢もしくは隠密方に限りなく近い立場にいるとみて間違いないですな。なおかつ、生前のユアン＝リク殿下とある程度の交流を持つており、人ひとり拉致できるほどの手練れでもあり……ふむ、ひとり居りましたぞ。先代王様のもとの、まさにその隠密の頭を務めていた男で、名をドウタクと言うのですが」

「ドウタク……」

その名を、カイは口の中で繰り返した。

「うむ、思い出したぞ。私の即位と同時に、年齢的なことや健康上の理由で職を辞した家臣が何名かいたが、そのうちのひとりだな」
「左様にございます」

ハクロウは首肯した。

「ドウタクは、持病が悪化したという理由で職を辞しておりますが、その後も病にかかる気配すらなく、現在は王太后陛下のお屋敷で、執事として働いているとか」

「義母上の……！？」

カイが驚いた声を上げたそのとき、ティエンが不意に動いた。つかつかつか、と扉に歩み寄り、勢いよくこれを開け放つ。

「誰だ、そこに」

いるのは、と続けかけた声が、そこで呑み込まれた。

「何だ……姫さんじゃねえか」

「ごめんなさい……」

身の置き所をなくしたかのように、ユイファは小さな肩をすばめた。女官たちの姿はない。ということは、自分の判断で、心眼だけを頼りにひとりでここまで来たのだろうか。

「心配だったの。陛下、いつも宰相様に叱られてばかりいたから……」

「……何と、私は嫁女殿にそのような気苦労までかけていたか」

カイが苦笑した。今度は自分が彼女に歩み寄り、高々とその体を

抱き上げる。

「だがな、宰相はいつも私のためを思っていて、厳しいことを言うてくれるのだ。それに、今回は相談があつて、こちらから出向いてきたのだよ」

「ご相談……？」

「ああ。平たく言えば、この国の誤った部分をどう正し、どのようにしてより良き国として行くべきか、といった話だ。そうであつたな？ 宰相」

「はい、仰せの通りにございます」

「ほんとかしら」

如才なく応じた宰相に、ユイファはまだ疑惑の残る表情を向けた。

「でも……まあ、いいわ。確かに喧嘩や言い合いの気配はなかったし。だけど宰相様、あまり陛下をいじめてはいけませんよ？ 陛下は、本当はとても泣き虫でらっしゃるんですからね」

「……これ、ユイファ！」

「こりゃカンペキかかあ殿下確定だな」

慌ててたしなめたカイを、にんまりと八重歯を見せてティエンが小突いた。

とりあえず伝えるべきことはすべて伝えたし、女官たちも心配して捜し回っているであろうと思われたので、その後間もなく、カイはユイファを連れて彼女の部屋へ去った。

ティエンは、この場に残った。正確には、一旦出て行こうとしたところへ、カイたちを見送りに出てきたハクロウに目配せされたのである。

「ま……あんたの言いたいことは、何となくわかるよ。俺も、実はさっき言った『野心家』のひとりなんじゃねえかって疑ってたんだろ？」

「ええ、ありていに言えば」

あつさり認めて、ハクロウは自分の椅子に戻り、ティエンにも来客用の椅子を勧めた。

「聞けば、あなたは陛下の実のお兄様だという。しかも……陛下の影武者を務められたのは、今回だけではありませんか？かみなかしも 上中下三国首脳会談の折と、それに、下つ国の王太子様の首級を挙げられたあの戦も……でございましょう？ いずれも、今回の場合同様、失礼ながらあの陛下とはとても思えぬほどの手並みでございましたかな。

なればこそ、解せぬのです。そんなあなたが、何故影武者などに甘んじているのか……無論、建前としては、『直接王家の血筋を引いているわけではないから』ということなのでしょう。けれど、それだけ面差しがそっくりなのなら、極端な話、そのようなことなど何とでもなるというもの。」

「例えば、あの『あねさま』をけしかけて、旅先の事故に見せかけてカイを殺せば……ってか？」

自分から言つて、ティエンは肩をすくめた。

「いやいや、冗談じゃねえよ。だいたい、そうまでして手に入れたと思うほど興味も関心もないんだわ、『あの立場』には 三度三度あつたかい飯が食えて、誰にも邪魔されずに落ち着ける寢床があつて、時々きれいなねーちゃんでも抱ければ十分に満足って至極お手軽な性格なもんでね。」

ただ、俺、いろいろあつて目下『家出状態』でさ。カイは、そん

な俺のこと、何かと面倒見てくれて……そのくせ、自分からは決して助けなんか求めやしねえんだ。三国会談のときだって、下しもとの戦のときだって、体調崩して床とこから頭さえ上げられずにいるっつーのに、『これは国王たる者の務めなのだから』とか何とか言っただい。いつまで出かけようとしてさ。だから、つい見かねちゃったっつーか……ま、早い話が『兄馬鹿』ってやつ?」

結局、勧められた椅子には座らずに、踵を返す。

「それはそうと、あんたこそ、蓋開けたら実は自分が首謀者でした、なんっーことはねえだろうな? ……ま、たとえそうだとしても、下しもの王太子とおんなじ目に遭わせるだけの話だけだよ」

ちらりとハクロウを振り返った双眸が、刹那、鮮血の色に染まった。

第三章 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6683w/>

黒竜異聞

2011年11月20日01時16分発行